512
65ロ

0019480000

0019480-000

５１２－６５ロ

価値論と社会主義

小泉信三・著

改造社

補１０版
昭和３

ADB

帝國圖書館藏

納本

小泉信三著

增補 價値論と社會主義 全

改造社版

昭和三年一月 帝國圖書館

512-65

序

本書は著者のマルクス及びロオドベルトスの學說に關する近年の研究の產物を收錄するものである。目標は當初必しも價値論にのみ置かれた譯ではなかつたが、出來た結果を見れば「價値論と社會主義」なる標題が畧ぼ本書の內容に適ふものになつたと思ふ。マルクス、ロオドベルトスの二家を取つて、特に其學說を研究したのは何の爲めであるかとの問に對しては、著者自ら充分滿足なる解答を與へることが出來ない。凡そ一研究題目に對する感興は、必しも合理的に說明し盡くすことの出來るものではないからである。併し强いて云へば、舊經濟學の成績が此の二社會主義者の學說中に於て最も周到に利用せられ且つ最も周到に批評せられてゐることは著者をして其研究の必要を感ぜしめた理由の一をなすものだとは云ふことが出來やう。舊經濟學に對する信賴は既に失はれて、之に代るべき新經濟學の理論體系はまだ確實に樹立せられて居らぬ今日に於て、舊經濟學は吾々に幾何の既に取るべからざるものと、猶ほ棄つべからざるものとを殘して居る

かを知るは、新經濟學の發途に方つて當さに先づ爲すべきことで、而してマ、ロ二家の研究は此取捨の判別の上にも多大の光りを投ずるものであると思ふのである。

本書の内容は記述論評殆ど相半ばして居る。其論評の論據は本文中に示してある通りであつて、其當否の判定は之を讀者に委ねる外はないが、たゞ一事些か自贊に類する事を許されるならば、本書の内容は著者の豫期せざる、而して固より毫も著者の功に歸す可からざる方法に於てゞはあるが、本年の經濟學界に多少の貢獻をなしたと云ふことが出來やうか。それは本書第三篇第一章(及び恐らく同第二章)に收められた文章の(改造)(本年二月號及び七月號)に發表せられたことが、我國の代表的マルクシストをしてマルクスの價値價格學說に關する其解釋を公にせしめる機會を供したことである。卽ち山川均氏は(社會主義研究)(五月號及び九月號)高畠素之氏は(解放)(十月號)河上肇氏は(社會問題研究)(第三十九册未完)に於て、何れも著者の見解に對する批評を公にせられた。其批評は(マルクスに誤謬なし)と云ふ立場から下されたものと、(マルクスと雖も批評の餘地なきにあらず)との立場から下されたものとの別はあるが皆夫れ〴〵の意味に於て特色の顯著なものであ

つて、その經濟學、社會主義理論の研究者に與へた刺戟の甚だ大なることは、既に世間の認めてゐるところであると思ふ。而して此等の批評の有利なると不利なることを問はず、偶々諸氏をして其蘊蓄を披瀝せしめる機會を供し得たことは、著者の望外の仕合せであつた。此の特別の意味に於ては、未熟なる本書も亦會心の著述と稱していゝのである。

本書各章は何れも章末に記してある通りの機會に發表せられたものであるが、今本書に收錄せらるゝ爲めには、皆若干の訂正を閲みして居る(第三篇第一第二章就中然り)。又本書第二篇第一第二兩章、第四篇第一章は既に一度別の單行書に收錄せられた事がある。それを再び玆に轉載するに就ては、出版書肆(岩波書店、寶文館、下出書店)の好意に負ふところがあるものである。

大正十一年十二月八日

鎌倉小町にて

小泉信三

増補版序

本版には一二の訂正の外新たに「三度び勞働費用と平均利潤との問題を論ず」る追補一章が加へられた。これは主に河上博士の批評に刺戟を受けて書いたものであるが、著者は必しも批評の個々部分には答へず、勞働價値説の論據を再び吟味することに依つて、自ら其全體に答へることとなるやうに努めた。而して本書舊版の足らざる所は、これに由て少しく補はれ得たものと信ずる。

大正十四年五月

東京麻布本村町

小泉信三

第二増補版序

本書舊版の刊行後にも、著者は前年來引續けるマルクス價値論々爭の爲めに、四度び勞働費用と平均利潤との問題を論ず」及び「櫛田氏に答ふ」なる二篇の文章を「改造」に寄稿した。本書に新たに收錄せられたものは卽ちそれである。若し是に由て著者のマルクス價値論に對する意見を更に少しく明にすることを得ば、幸ひ是に過ぐるものなし。

昭和三年五月

東京市外御殿山

著者

價値論と社會主義　目次

第一篇　緒論……（一）

價値論上に於ける生産費説と勞働説

――（ロオドベルトス及びマルクスの學説の背景）――……（三）

第二篇　ロオドベルトス研究……（四三）

第一章　ロオドベルトスの勞働價値學説と平均利潤率の問題……（四五）

第二章　ロオドベルトスの地代論とリカルドオ……（七八）

第三章　ロオドベルトスの「資本論」……（一一三）

第三篇　マルクス研究……（一八七）

第一章　勞働價値説と平均利潤率の問題

――（マルクスの價値學説に對する一批評）――……（一八九）

第二章　再び勞働價値說と平均利潤率の問題を論ず
——（山川均氏の批評に答ふ）——……（二二七）
第三章　「資本論」以前に於けるマルクスの價値論、價格論……（二六〇）
第四章　マルクスのプルドン嘲評
——「哲學の貧困」——……（二八六）

第四篇　雜錄三章……（三一七）
ロオドベルトスの生涯及び學說大要……（三一九）
マルクス傳の一資料……（三四二）
エンゲルスのロオドベルトス批評……（三五六）

追補
三度び勞働費用と平均利潤との問題を論ず……（三七七）

第二追補
四度び勞働費用と平均利潤との問題を論ず……（四二九）
櫛田氏に答ふ……（五〇三）

第一篇 緒論

價値論上に於ける生産費説と勞働説

——ロオドベルドス及びマルクスの學説の背景——

一

此の二三年價値の問題に就て考へを進めて行くうちに、私は從來の價値學説に對する己れの知識と理解とが甚だ不充分不正確であつたことを痛切に感ずる機會に度々出逢つた。今迄の人が屢々陷つて屢々脱却した過ちに、自分も新たに陷ちうとしてゐることがある。自ら認めて難問とするものを、折角考へて解決し得たつもりでゐると、何ぞ知らん、それは前人の論じ盡くして、既に疑問の餘地を剩さぬものであつたりすることが、屢々あるのである。そこで私は少しく研究の方針をかへて、先づ己れの價値論に關する知識を整理することを思ひ立つた。それは先づ從來の價値學説に對する理解を正確にすること、次で從來の學説から、取るべきものと棄つべきものとを擇り分けることであつた。さうして置いて其上で、擇

り分けられて殘つたものを、將來の價値學說の爲めに如何に利用すべきかを考へようと思つたのである。而して此の擇り分けの第一歩として、私は從來の學說から、曖昧と矛盾とを(若しあれば)除いて見ようとした。固より矛盾の指摘といふことは、批評としては最上のものではない。併し批評者が矛盾の指摘丈けで甘んじて止まりさへしなければ、矛盾の掃除は、根本的建設的批評に到達すべき第一着歩となり得るものである。或る學者の根本的着眼が誤つてゐても、其人が常識に富んでゐる人で、論理の過程を常識で補綴する場合には、間違つた前提から出發しながら、一見無害の結論に到達する事の出來ることは、殊にアダム・スミスが許多の例證を提供して居る。斯ういふ場合には、問題の學說の內に包藏せられてゐる矛盾を、摘發する事が、能く人を導いて、其學說の根本的構造に對する批評に到らしめることが出來るのである。矛盾を指摘して之を除けば結論が甚しく不合理のものとなるか、或は經驗と背馳しない結論を其儘保存しようとする爲めには當初の出發點を改めるか、二途何れかに出なくてはならぬからである。卽ち從來の學說から曖昧と矛盾とを除けば、其學說に存する根本的の誤謬が、謂はゞ擴大鏡に照らし

出されて目に映ずることになるからである。

さて價値學說は、普通大別して客觀主義の學說、卽ち費用說Kostentheorieと、主觀主義の學說、卽ち利用(効用)說Nutzentheorieとの二つにせられてゐる。而して極く大體を云へば、英吉利正統學派の價値論は概ね前者に屬し、所謂墺太利學派が後說の最好代表者であることには異論がない。そこで私は、上記の方針で此二派の學說に臨み、その中から取るべきものと、棄つべきものとを擇り分けて見て、其結果を解放社の課題に對する答へに充てようと考へた。不幸にして、墺太利派の學說、並に是に對する論評の方は、是非參考しなければならぬ文獻で、目を通してゐる邊のなかつたものが多い爲め、此處には正統派價値論に對する論評を丈けしか纏める事が出來なかつた。利用學說研究の結果は、別の機會に報告するつもりである。

二

さて前述の通り、正統派の價値學說は、一言にして云へば、費用學說である。價値は費用に由て決せられると謂ふのである。ところで彼等の問題とする價値は、當

に所謂交換價値、卽ち貨物の貨物購買力に限られてゐたのであるから、彼等の主張は、畢竟貨物と貨物との交換比率は費用に由て決せられ、一貨物に投ぜらるゝ費用額が增加すれば、其貨物は今迄よりも多量の他の貨物と交換せられ、費用額が減少すれば、必然早晩其反對の結果が現れるといふに歸着する。たゞ此の價値を決する費用が何を以て成るかといふ點に就て、勞働價値說と生產費說とを分つことが出來るのである。費用は究局勞働のみから成るといふか、或は費用は勞働量に正比例すると認めるかするのが勞働價値說で、勞働量以外の他の要素も、亦費用の大小を與かり決するといふのが生產費說であると謂つて宜からう。そこで正統派經濟學者の中で、此の勞働價値學說を唱へたものは誰れ々々であるかといふと、リカルドオの亞流たるジエエムス・ミルとマカロックとは、確かにそれとして擧げることが出來るけれども、それ以外の重なる學者は皆生產費論者であつた。(或ひは生產費論者となつた)。たゞジエエムス・ミル等の師のリカルドオは、價値を決するものが勞働量のみでないことを明認するには至つたが、猶ほ始めには、アダム・スミスが貨物相互の交換比率が勞働量のみに由て決せらるゝ事を、土地資本の私有の

未だ起らぬ原始社會にのみ限つたのを不徹底として、同一の原則は文野兩社會を通じて行はれる事を、證明しようとして出發した點に於ても、また生產に要する時間が勞働量と相並んで貨物の價値を決定する要因たることを認めるに至つた後に於ても、明かに前者を輕んじて後者を重んじた點に於て、生產費論者中最も勞働價値論に傾いた生產費論者であつたとは云ふことが出來る。故に必しも語法の嚴密を求めない場合には、彼れを勞働價値論者の中に數へることも、深く咎むべきではない。ツガン・バラノウスキイが、事實を說明しようとする勞働價値說を、勞働を以て直ちに價値其者とする絕對的勞働價値說と、勞働を價値決定の最要々因とする相對的勞働價値說とに分ち、リカルドオを後者の代表者に數へたるが如きも便宜上姑らく容認して差支ないのである。斯のやうにリカルドオを姑らく勞働價値論者、又は極く之に近い生產費論者として、さてリカルドオ以後凡そ半世紀間に於ける英吉利經濟學說の發展を見ると、價値學說は勞働價値說、又は勞働價値說に近い生產費說から段々に遠ざかつて、純然たる生產費說に到達して居る。然らば其當初の出發點に於ける學說と、半世紀の後に到達した學說と、果して何れが正

しいかといふに、私は後の結論が正しいと云ふことは姑らく留保するが、出發點から到着點に到る迄の推移の過程には、論理上の無理がなかつたといふこと丈けは、之を言明するに憚らない。卽ち彼の出發點から出發すれば、此の到着點に到着するのは已むを得ない。始めに勞働價値說を證明する爲めに取つた論理上の道を、其儘何處までも進んで來れば、結局生產費說に到着するのは已むを得ないといふのである。此結論から學び得る敎訓の一つは、生產費說は正しいかも知れぬし、また間違つてゐるかも知れぬが、よし間違つてゐるとしても、これを匡正する道は、再び勞働價値說に復歸することでは決してないと云ふ事これである。勞働價値說は未聞の眞理ではない。正統派の學者は、リカルドオは勿論、アダム・スミスと雖も、概ねみな一度は勞働に依て交換價値の秘密を說明しようと試みたのである。ところがそれが成功しないで、結局生產費說に落着かざるを得なくなつたのである。全體の結果を通觀すれば、正統學派の生產費說は、一度び勞働價値說を通過して來たものだと謂つていゝのである。故に若し生產費說の誤謬なることが確證せられた場合には、費用說全體の價値に對する疑問が起らなければならぬ。漸くにし

て到達した生產費說から再び勞働價値說に歸るのは、全く無意義であると思ふ。

三

先づアダム・スミスから說き始めると、この人は前にも述べたやうに、資本の蓄積と土地の私有との未だ起らぬ未開狀態の下に於ては、生產上に費された勞働のみが物と物との交換比率を決定すると說いてゐる。卽ち曰く「彼の資本の蓄積と土地の占有とに並びに先だつ初期野蠻の社會に於ては、諸物の獲得に必要なる勞働量の比例は、その相互交換の規則たる事を得べき唯一の事情なるに似たり。例へば狩獵民族の間に於て、一頭の海狸を殺す爲めには、一頭の鹿を殺す勞働の二倍を要すること、を常とせば、海狸一頭は當然 naturally 鹿二頭と交換せらるべきもの、或は鹿二頭の價値あるべきものなり。二日又は二時間の勞働の所產たることを常とするものは、一時間の勞働の所產たることを常とするものゝ二倍の價値あるべきを當然 natural とす」と。然らば土地資本の私有蓄積の既に行はるゝ文明社會に於ては、價値は如何なる原因に由て決せられるか。スミスに從へば、文

明社會に於ては、一物の價格は其物の生産に參加する勞働に對する賃銀と、土地に對する地代と、資本に對する利潤との合成するところであると云ふ。ところが賃銀地代及び利潤には、各社會又は各地方に由て、其平均率又は普通率、卽ち自然率なるものがある。今一貨物の生産に參加する勞働土地及び資本に對する賃銀地代及び利潤が、夫れ〴〵その自然率に一致するものである場合には、此等三者の合成する價格を稱して、其貨物の自然價格と云ふことが出來る。而して時々實際の市場價格は、需要供給の關係に由て騰落樣々であるが、その騰落は常に此自然價格を中心として行はれて、早晩これに一致しようとする傾きを持つてゐる。何故といふに、若し市場價格が自然價格以下にあれば、勞働に對する賃銀、土地に對する地代、資本に對する利潤の孰れか若しくはその凡べてが、各其自然率以下に降らなければならぬ譯であるが、それが自然率以下に降れば、勞働土地又は資本は其現用途から撤回せられて、他の比較的有利の産業に移轉せられ、從つて其物の生産額を減少せしめて其價格を騰貴せしめ、反對に一物の市場價格が自然價格以上に昇れば、前と同じ理由が反對の作用をなして、其物の供給を增加せしめ、從つて自然價格と一

致するまで市場價格を下落せしめなければ已まぬといふのである。アダム・スミスの謂ふところの價値は、此の自然價格を意味するものと解せられる。

上述の通りアダム・スミスは社會發達の程度如何に由て、二元の價値法則を立てた。尤も此解釋に對しては異論がないではない。アダム・スミスは如何なる社會に對しても、同じ勞働價値法則を適用した。未開社會に於ても、文明社會に於ても、貨物の價値は常に勞働のみに由て決せられるのであるが、未開社會に於ては、其價値が全部勞働者の手に收得せらるるのに反して、文明社會では、それが勞働者と地主資本家との間に分配せられなければならぬと說いたのである。たゞそれ丈けの相違があるに過ぎぬと解するものもある。併しスミスが明かに原始未開の社會に於ては、と限つた上で、物と物との交換比率を決定する唯一の事情が勞働なることと認めてゐるに徵すれば、彼れが土地資本の私有蓄積の行はれる以前と以後とに拘らず、交換比率を決定する事情が、常に全然同一なることを說いたものとは解釋し憎いのみならず、後段に至つて、明かに賃銀率及び利潤率の騰落が價格高低の原因たることを說いてゐるのを見れば、彼れが價値を決定するものが常に勞働のみ

なることを說いたと主張すべき根據はない。何れにしてもリカルドオは、上記の通りにアダム・スミスを解するもので、此を理由として、彼れが未開社會と文明社會とを區別して、同じ勞働價値法則を以て終始一貫することをしなかつた不徹底を難ずるのである。

四

リカルドオは、人の知る通り、先づ勞働の投下に依て任意に其量を增加し得る貨物と、增加すべからざる貨物とを分け、彼に從へば、貨物中の大多數を占めるところの前者丈けを取つて研究の目的物とする。而して此の種の貨物にあつては、是等貨物の交換價値、或はその一方の貨物の幾許が他の貨物と交換せらるべきやの規則は、一に(solely)その各自に費やされたる勞働量に由りて定まる、といふのである。たゞ此に謂ふ、費やされたる勞働量とは、直接に一貨物に投ぜられた勞働量のみを意味するのではなく、生產上に用ゐる機械道具原料等の生產要具の生產に費さるゝ勞働量をも其中に含むのであつて、是等諸段階に於ける必要勞働の增減は、必ず

究局生產物の價値をして增減せしめなければ已まぬが、併し彼れの所見に從へば、此生產物が何人の手に、如何なる割合で分配せられるかは、毫も價値其者を動かすものではないのである。卽ち生產要具の使用者、卽ち勞働者が、同時に其所有者であつても或はさうでなくても、價値には影響せず、また生產物の如何なる部分が賃銀として勞働者に與へられ、如何なる部分が生產要具所有者、卽ち資本家に與へられても、これ亦少しも生產物の價値を上下することがないといふのである。蓋し利潤(卽ち生產要具所有者の收得分)又は賃銀率の高低は、各種產業に對して均等の作用を加へるからである。

併し一貨物の交換價値は其生產に費さるゝ勞働量に由て決せられるといふことは、何うして之を證明することが出來るか。吾々は同じ苦痛を忍んだものは、當さに同じ快樂によつて酬ゐらるべきが至當だと云ふ、漠然たる感情を抱いてゐるから、一定量の勞働を費して造られた貨物は、他の同量の勞働の生產物と相交換せられて然るべきものだといふ當爲(オルレン)の主張ならば、此素朴なる感情に訴へても、一應之を是認せしめることは出來やう。併しリカルドオが云ふのは、同量の勞働の生

産物は、互に相交換せられるのが至當だといふのではなくて、一貨物と交換される他の諸貨物の量は、事實上該貨物の生産に費さるゝ勞働量に由て定まり、その增減に由て增減する(他の諸貨物に費さるゝ勞働量を不變とすれば)、必ずせざるを得ないといふのである。併しこの斷定は自明の公理ではないから、之を承認せしめる爲めには、先づ其理を證明しなくてはならぬ。然るに私の知る限りでは、從來價値は勞働量之を決すといふ法則と、價値は勞働量に由て之を決するを至當とするといふ倫理的命題とが、稍々論者の頭腦中に於て混同せられた嫌のあつた爲めか、所謂勞働價値法則は、何等の證明を伴はずして、(或は甚だ不充分な證明を以て)主張せられてゐたやうである。

リカルドオ以前の勞働價値論者として擧げられるのは、キリヤム・ペチイであるが、此人は何ういふ事を說いてゐるかといふに、一六六二年に著はされた租稅論 Treatise of Taxes and Contributions. の中では、地代の性質を說明して、一定面積の耕地の收穫から耕作費を控除した餘剩は、其土地に對する其年の自然的地代、若しくは眞實地代を構成すると謂つた後で、此自然的地代は果して貨幣幾許に相當するか

といふ問を起し、之に答へて、別に一人の人があつて、耕作に費やすと同じ時間を費して銀の採掘精錬運搬に從事し、斯くして擧げ得た銀産額から、一切の費用を差引いた殘額がそれだと謂つて居る。「一方の者の銀と他方の者の穀物とは、之を同價と評定せざるべからず。假に一方は二十オンス、他方は二十ブッシエルなりとせば、當然此穀物一ブッシエルの價格は、銀一オンスたるべし。」「人若し一ブッシエルの穀物を作ると同時間内に、銀一オンスを秘露國の地中より倫敦に輸致することを得ば、一は他の自然價格 natural price なり。然るに今採掘一層容易なる新鑛の爲めに、能く從來一オンスを得るに要したると同じ勞を以て、銀二オンスを得とせば、穀物は他の事情にして變らざる限り、前に一ブッシエル五志なりしもの一ブッシエル十志たるを相當とすべし」とも云つて居る。是等の章句の間には、同じ勞働量を費して造られた貨物同志は、相互にその價値を等しうすべきが至當だといふ思想が隱見してゐるやうに思はれるが、如何であらうか。併しそれは兎も角として、同量勞働の生産物同志は何故必ず相交換せられるか。一定量の勞働の生産物と、異つた勞働量の生産物とが何故相交換せられる筈がないか。これに對してはべ

チィは殆ど説明を加へてゐないやうである。

ベチィから飛んでアダム・スミスに來ると、前述の通り、此人は原始社會では物の獲得に投ぜられた勞働量の比例が、其の相互交換の規則たるを得べき唯一の事情らしいと述べて居るが、一頭の海狸を殺す爲めに一頭の鹿を殺す勞働の二倍を要するとすれば、海狸一頭は何故當然鹿二頭と交換せらるべきものであるかに就ては、全く説明を加へてゐない。而して此場合にも、此の當然naturallyといふ言葉には、自らさうなるといふ意味と同時に、さうあるべきが自然で、至當であるといふ意味が、隱約の間に含まれてゐるやうに感じられるのである。

五

今リカルドオも此點をあまり詳細に説明してゐるとは云へない。併し彼れが自然價格と市場價格との關係を論ずる經濟學原理第四章を讀めば、彼れの價値論の證明となるべき推究は、其中に之を見出すことが出來るのである。是に由て觀ると、市場に於ける貨物の現實價格は、其時々の需要供給に由て定まるもので、これ

が、必しも常に投下勞働量に由て定めらるゝ其價値と一致するものでない事は、リカルドオも之を認めてゐるが、併し貨物の市場價格は、久しきに亘つては、其自然價格から離れることが出來ないで、結局之と一致すべき約束のあることを説くのである。それでは一貨物の市場價格は、何故久しきに亘つて自然價格の上下に逸脱することが出來ないかと云へば、リカルドオに從へば、それは資本間に競爭が行はれ、從つて其結果たる利潤率の平均といふ一事あるが爲めである。今一貨物の市場價格が、需要供給の關係から、其自然價格以上に昇るときは、資本は他の比較的不利の業務から此有利の生産業に集中して來て、貨物の供給を增加せしめ、從て價格を下落せしめる筈であるし、市場價格が自然價格以下に降れば、反對の作用が行はれて、此兩者が一致する迄價格を騰貴せしめなければ已まぬであらうと謂ふのである。斯ういふ譯で、市場價格が自然價格の上下に離れると、利潤率の不平均が起るといふのであるから、利潤率の平均を得たときといふのは、卽ち市場價格と自然價格との相一致したときである。利潤率の平均を求める力が市場價格を自然價格に惹き着ける。市場價格と自然價格との間に開きのある限りは、此の力の作用

は止まないといふのである。リカルドオは曰く「されば貨物の市場價格の何時迄も引續き大に自然價格以上、又は以下に止まることを妨ぐるものは、各資本家が懷ける其基金(資本)を比較的不利の用途より有利なる用途に轉用せんとする欲求是れなり。貨物の交換價値を調節して、その生産に必要なる賃銀と資本をその能率の原狀に復せしむる爲めに要する他の一切の費用とを支辨したる後、殘餘の價値又は餘剩をして、各業に於て、投下せられたる資本に比例するが如くならしむるものは、此競爭に外ならず」と。而して此自然價格は、卽ち彼れの謂ふところの交換價値で、此の交換價値は相對的投下勞働量に由て決せられると謂ふのである。斯ういふ譯で、物と物との交換比率は、一時の現象は措いて、長時間に亘つて之を見れば、生産上に費される勞働の相對量に由て定められると謂ふのである。

六

貨物の價値は生産上に費さるゝ勞働量之を決すといふ斷案は、右述のやうな證明を基礎とするものであるが、此證明は暗默の間、同額の資本は必ず同量の勞働を

代表すること(卽ち同量の勞働を雇傭すること)を前提として居る。成程此前提を承認した上でならば、貨物の市場價格は、假令一時其價値の上下に離隔することがあつても、利潤率平均の作用に由て、早晩必ず此に復歸すべき道理なることは勿論であるが、一度び此前提を撤去して、同額の資本は必しも同量の勞働を代表しないことを認めると、最早投下勞働量に由て定められた貨物の交換價値(自然價格)が、その時々の市場價格の吸引中心となることを信ずべき理由はなくなるのである。假りに例へば、二人の同じく一萬磅の資本を投じて生産を行ふ者があつて、一人は其資本の大部分を機械に投じ、一人は之を勞働者雇傭の爲め賃銀として支出し、而して生産物は各々その投下勞働量に比例して賣られるものとすれば、同じ一萬磅の資本に對して、一人が受ける收益は比較的甚だ少なかるべく、一人が受ける收益は、甚だ大なるべき筈である。そこで此の不同の利潤率の平均を求めて、資本が彼の不利の産業を去つて、此の有利の産業に移り、供給の增減、從て一方の騰貴一方の下落に由つて利潤率の均一を恢復し、其處で始めて其流動が止んだとすれば、其平均を得た場合の二貨物の比價は、決して投下勞働量に比例するものでないことは

明白である。故に同額の資本が必しも同量の勞働を雇傭するものでないといふことを承認する場合には、リカルドオの右に述べて來たやうな價値法則は、其儘之を維持することが出來なくなるべき筈である。

リカルドオの經濟學原理が公にされると、直ぐ此點を指摘して批評を加へる者が現れた。トルレンス大佐は其一人で、此人は、アダム・スミスが交換比率の勞働量に由て支配せらるゝことを原始未開の社會に限つたのは、細心にして當を得たるもので、リカルドオが一歩を進めて、同じ原則を文明社會にも適用しようとしたのは却つて過ちであつたと評し、結局「資本を構成する原料と賃銀との比例等しからざるとき、一業に於ける賃銀率の偶々他に於けるよりも高きとき、資本の耐久力一ならざるとき、耐久力は等しきも支出賃銀額の同じからざるときは、生産物の價値は、之に投ぜられたる勞働量に比例せざるべし」と謂つたのである。マルサスも亦稍ゝ遲れて、其經濟學原理(一八二〇)の中で、略ほ同一の論據からリカルドオの勞働價値法則を難じたのである。

リカルドオ自身も始めから此點に心着かなかつた譯ではないので、その當然勞

働價値法則と稱せらるべきものを述べた後に、是に對する修正として、資本中、流動資本と固定資本との占める割合の異同と、固定資本の消耗の遲速とあるに由て、貨物の比價が勞働量の增減を俟つことなく、賃銀率の昇降に由て變動し得る事を認めたのである。即ち賃銀が騰貴して、利潤が下落すれば、流動資本の重きを占める産業の生産物は、固定資本重を占める産業の生産物に比して、其相對價値は騰貴し、同じく使用久しきに堪える固定資本を以て生産せられた貨物は、然らざるものに比して、其價値が下落することを認めたのであるが、今右述の如き批評に會ふに及んで、彼れは漸く此修正の部分に重きを措いて、遂に價値を決するものは勞働量のみでなくて「勞働量」と「生産完了に要する時間」との二つであることを認めるに至つたのである。

七

前節にリカルドオの勞働價値法則の證明を論ずる場合に、私は二人の企業家の中、一人は其資本の大部分を機械原料に投じ、一人は其大部分を賃銀として勞働雇

傭の用に充てる場合の差違を示したが、之に對しては、機械も原料も、共に始めに遡れば、皆勞働の所産であるから、此兩企業家は結局共に其資本の全額を(直接又は間接に)勞働の雇傭に投じたものと云ふことが出來るといふ風に考へるものがあるかも知れない。ところがリカルドオは、此の二つの場合に原則上の相違のあることを認めてゐる。どう違ふかと云へば、機械は過去の勞働の生産物であるから、始めて其製作に勞働が投ぜられたときから、機械を用ゐて造り出した生産物が市場に賣却せらるゝ迄に、長い時間を要するに反し、直ちに資本を賃銀として支出する場合には、投ぜられた勞働が生産物となつて現れ、若しくは生産物として市場に賣却せられる迄に、時を要することが少ないといふ違ひがあるのである。そこでリカルドオは、前の例に擧げた資本の有機的組成の異同(此の術語は後にマルクスが用ゐたものであるが、姑らく此處に之を借用する。意味は此場合には資本中流動資本と固定資本との占める割合の異同といふことである)を、勞働が費されてから、其成果が市場に出される迄の時の遲速の相違として考へたのである。而してリカルドオは、此の時の遲速といふ要素の價値に及ぼす影響を、漸く重要視するやう

になつたのである。

リカルドオの友人の中で、マルサスは始めから勞働價値說の反對者であつたが、稍〻弟子分に當るマカロックは、極めて單純な勞働價値說を堅く信じて動くまいとしてゐた。今リカルドオの此二人に與へた書簡の、保存刊行せられてゐるのを見ると、リカルドオがマルサスに對する場合と、マカロックに對する場合とで、議論の語調が違つてゐるのは餘程興味がある。卽ちマルサスに對しては、成るべく勞働價値說を辯護しようとしてゐる傾が見えるのに、マカロックに對する場合には、明白卒直に價値を決する原因が、勞働の一あるのみではないと認めるに至つたことを告白してゐるのである。卽ち屢々引用せられる書簡(一八二〇年五月二日附)の一節では、最善の考慮を盡したる後「予は貨物の相對價値の變動を來たし得る原因二あることを信ずるものなり。第一は、貨物の生産に要する相對的勞働量、第二は、斯る勞働の成果が、市場に搬出せらるゝ迄に經過すべき相對的時間是なり。固定資本に屬する一切の問題は、此の第二の規則の下に屬す……」と明言してゐるのである。たゞ此の兩原因の何れを重しとするかと云へば、彼れは勞働を重んじて

時間を輕んじては居るが、併し時間が原理上勞働と相並んで價値決定の原因たることは、彼れの明かに認めるところなのである。

其處でリカルドオは、經濟學原理第三版に於て、生産物の價値が投下勞働量に比例し、或はこれと共に增減するのは、(一)生産上勞働のみを投じて機械を用ゐず、而して其市場に搬出せらるゝ迄に經過する時間の同一なる場合、及び(二)生産上に用ゐらるゝ固定資本が、價値及び耐久性を同じうする場合に限ると說くやうになつた。リカルドオは始めアダム・スミスが資本の蓄積、土地の私有の未だ行はれざる原始社會に限つてのみ、貨物交換比率が投下勞働量に由て決せらるゝものと說き、文明社會に對しては、同一原則を以てこれに臨まなかつた不徹底を難じてゐたが、さて彼れ自身が、詳細に此問題を論じ究めた揚句に到達した結論を見ると、アダム・スミスのと餘り遠はぬ制限を、勞働價値法則に加へなければならぬ事になつたのである。

前にも述べた通りリカルドオの弟子のマカロックは、單純な勞働價値說を以て一貫しようとしたが、リカルドオは彼れに與へた書簡中に、其見解の單純に失することを戒しめてゐる(マカロック宛書簡一三一—二頁)。リカルドオはマカロックの單純な理論では、其說明の出來兼ねる難問として、葡萄酒の貯藏に由て價値を增し、また樹木が成長するを俟つて始めて大なる價値を有するに至る場合を擧げて居る。葡萄酒の釀造には、成程一定量の勞働が費される。併し其の釀造せられた葡萄酒が、たゞ數年の保藏の後に其價値を增すのは、何うして之を說明するか。また最初二志許りの費用をかけて植付けた樹樹が、幾年かの後には百磅の價値があるやうになる。一旦植付けた後には全くそれに勞働を投じないのに、猶ほ此の價値の增加があるのは、何うして之を說明するかと云つて、價値決定の上に於ける時間要素の輕視すべからざることを說いてゐるのである。

此難問に對するマカロックの解答は、餘程奇怪なものである。或學者はマカロックを以て、勞働價値說に伴ふ有りと有らゆる過ちを犯した人と評してゐるが(A. C. Whitaker)此評は必しも酷評として斥けることは出來ないのである。即ち右の難

問に對してマカロックは、人間の勞働でも自然力の作用でも、兎に角苟も物の價値を增加せしめるものは、凡て呼ぶに勞働の稱を以てすることに由て、其價値學說を救はうとしたのである。卽ち曰く、望ましき結果を持ち來たす傾きのある行爲、若しくは作用は、その人間に依て行はれたると、動物機械又は自然力に依て行はれたるとを問はず、皆な適當に之を勞働と定義すべきものであると。從て保藏に依て葡萄酒の價値が增加するとすれば、その價値增進の作用を爲すものは何であつても、皆之を勞働と定義すべきものだといふのである。マルサスが之を評して、此新定義によれば、證明の出來ないものはない。プラムプヂングは麥粉と牛乳と牛脂と石とを混ぜて作つたものだとも云へる。若し石と云ふ言葉がプラム(乾葡萄)と云ふ意味ならば。と云つて居るのは、適評とせざるを得ないのである。

後に至つてマカロックは、また別の方法で勞働價値學說を維持しようと試みた。而して此のマカロックの試みは、後にマルクスが資本論第三卷中の一節に說いてゐるところと稍趣きを同じうしてゐるから、引用の價値があると思ふ。マカロッタはリカルドオに從つて、一度賃銀率の變動が純然たる勞働費用の增減と離れて、

獨立に價値をして變動せしめる原因たることを認めた後、附け加へて、併し、平均價値は勞働量の增減に依てのみ左右せられるものだから、純然たる勞働價値說は依然として正しいものだと云はうとした。卽ち其文の大意に曰く、賃銀率の動搖は、成程特定貨物の交換價値に多少の變動を來たさしめるものではあるが、併し此動搖は、貨物全量の價値全額 total value を增減するものでないことも亦た注目しなければならぬ。此動搖は、耐久力最も小なる資本に依て生產せられたものゝ價値を增加せしめるとしても、それは同樣に、比較的耐久力多き資本に依て生產せられたるものゝ價値を減少せしめる。故に全體の價値は常に依然として同一である。而して其交換價値は、其費用、卽ちそれを生產し、且つ市場に搬出する爲めに要する勞働量に比例するといふことは、特定の一貨物に就ては、嚴密に眞理ではないかも知れぬが、貨物全量を總括したもの the mass of commodities taken together に就ては、此を斷言することは最も眞であると。(Principles, 4th ed. p. 371, cited by Whitaker) マルクスが、商品が其價値とは一致しない生產價格で賣買せられることを認めた後、成程斯やうに個々の商品は、或は其價値以上、或はその價値以下に賣れるけれども、或

商品が其價値以上に賣れる丈け、他の商品は其價値以下に賣れるから、一切の產業全體を總括すれば、生產價格の總額は價値總額に一致するもので、此意味に於て價値法則は、依然其効力を失はぬと云はうとしたのは(本書第二一七頁參照)マカロックの所說と其軌を一にするものである。而して此種の試みに對して、如何なる批評を加ふべきものなるかは、別の機會に述べた通りである(本書第二一七—九頁)。

勞働價値說を純粹な形ちで維持しようとしたものに猶ほジ・エ・エムス・ミルがあるけれども、彼れの試みも亦私の所見を以てすれば、失敗に終つてゐる。

九

リカルドオ以後第一に指を屈すべき經濟理論家は、恐らくナッサウ・シィニオルであらう。此人は節欲 abstinence といふ術語を新鑄して、之を經濟學の語彙に加へた。彼れに從へば、節欲とは、物の不生產的使用を節し、或は故らに直接の結果の生產を棄てゝ、遠き將來の結果の生產を擇ぶの行爲であつて、勞働と節欲とが貨物生產費を合成するものである。而して利潤の節欲に於けるは、猶ほ賃銀の勞働に於

けると等しいものであると謂ふ。シィニオルは此節欲といふ新術語の爲めに、屢々攻擊(と恐らく併せて誤解と)を受けた。併し此言葉は別として、此言葉によつて現される思想は、決して新しいものではない。リカルドオが、價値は勞働量と生產に要する時間との二つに由つて定まると謂つたのは、二種の貨物に各々同量の勞働が費されてあつても、一方の貨物にあつては、投ぜられた勞働の成果が市場に出て賣れるまでに經過する時間が短かく、他方の貨物にあつては、それが長ければ、長時間を要する生產物は、もう一つの種類の生產物よりも、高く賣れなければならぬ道理だといふにあつた。此場合敢て長時間を要する生產(機械を用ゐての生產)に從事するのは、生產の結果の享樂を延期し、夙く收めらるべき結果を棄てゝ、晩く擧けらるべき結果を取ることに外ならぬから、シィニオルの言葉は新しくても、思想其者はリカルドオの說の擴充延長か、然らずんば其の variation と見て差支ないのである。たゞ此意味を表す上に於ては、動もすれば倫理的聯想を伴ふ節欲といふ言葉よりも、後にマアシャルがその代りに採用した待忍(waiting)といふ言葉の方が、或は無難であるかも知れない。何れにしても、シィニオルの說くやうに、平等自由

なる競爭の行はれるところでは、貨物の價値は其生產費に一致しようとするが、其生產費は、勞働と節欲とから成るもので、而して生產費中にあつて勞働の占める部分と、節欲の占める部分とが、一定[illegible]でないことが勿論だとすれば、生產上に費された勞働量と生產物の價値との關係は、リカルドオが最初に說いたところよりは稀薄なものとならざるを得ない。勿論リカルドオと雖も、價値決定原因の二元を認めたことは、前記の通りであるが、彼れにはまだ其經濟學原理の全篇を通じて、勞働價値說に對する充分の未練を以つてゐた。シィニオルは此未練を捨てたのである。

十

さて前に、リカルドオのやうにして勞働價値說を證明するには、先づ同額の資本は同量の勞働を代表(或は雇傭)するといふ前提の存することを要するといつたが、此前提の成立せんが爲めには二つの條件の備はることを必要とする。第一、賃銀額の正確に投下勞働量を反映すること、第二、資本家の支出資本中に於て、賃銀の占

める比例の同一なることがそれである。ところで、此の第二の條件の事實上備はり難きことは、前述の通りリカルドオ自ら之を認めてゐたが、第一の條件は、略ほ實現せらるゝものとして彼れは立論してゐたやうに見える。此の點に關する彼れの議論は明確を欠いて居るが、兎に角彼れは賃銀率の異同は、略ほ投下勞働量に相應しようとする傾あるものとの承認の上に論を立てたやうに見受けられるのである。ところがシィニオルは、此點に於ても賃銀額と投下勞働量とは、必しも常に比例を保つものではないから、投下勞働量と價値との間には、更に新なる罅隙の生じ得べき餘地があるといふことを指摘した。而して此結論に到達するのに、彼れは地代論から入つたのである。

地代は價格構成要素に入らず。地代は價格の結果にして原因にあらず。これはリカルドオの反覆力說するところであつたが、シィニオルは之に反して、地代は價格中に入ることを明言して、勞働量と價値との關係を更に稀薄ならしめたのである。それは之より先きマルサスも既に試みた事であるが、シィニオルの特色は、その地代といふ言葉を廣義に解釋して、勞働者の收得する賃銀の中にも、rent の要

素は含まれ得るものと說き、延いて賃銀と投下勞働量との比例を失し得べきことを認めた點に存するのである。即ちrentなる語は、彼れに從へば、生産者が何等の犧牲なくして收得せるもの、或は別言すれば、その犧牲に對する報酬以上に收得せるもの、自然又は運命が、或は何等其收得者の努力を待たずして、或は勞働の發揮又は資本の使用に對する平均報酬以上に、與ふるもの一切を包含すべきものであるといふ。從てシィニオルの所謂地代は、本來の地代の外、人の任意に企及すべからざる知識才能特權等から生ずる一切の特別收益を包含するもので、勞働者が收得する所得には、眞の勞働に對する報酬の外、更に別の要素が含まれてゐる。否なこれが含まれてゐない場合は却て稀れだといふのであるから、賃銀額は投下勞働量を正確に反映しないことが却つて事物の本則だといふ事になるのである。

右に述べたところを概括すると、シィニオルは價値を構成するものを賃銀利潤地代の三者とし、而して究局賃銀其者も、亦必しも投下勞働量と相應するものでない事を認めたのである。リカルドオ其人が既に純粹な勞働價値說を奉ずるものではないが、シィニオルは上述の議論によつて、リカルドオよりも勞働價値說に遠

ざかること更に數歩なりしものと謂はなければならぬ。

十一

シィニオルの次に擧ぐべきものは、ジョン・スチュアアト・ミルであるが、ミルはシィニオルに比較すれば、リカルドオの學說を遙かに忠實に遵奉保存しようとした。而かも猶ほこの人も、勞働者の收得する賃銀が、必しも其の投ずるところの勞働量と比例しないで、熟練勞働者が其勞働に對する比例以上の報酬を受けてゐるといふことのあるが爲め、投下勞働量と生産物の價値との間に開きが生じ得ることを認めてゐるのである。ミルの價値學說は、ミル自身の概括するところに依ると、畢竟次の如きものに歸着するのである。曰く「若し二物の一方が、平均上價値を有すること他方よりも大ならば、其の原因は必ず、それが生産の爲めに或は、より多くの勞働量を要するか、或は永久的に一層高率の報酬を受くる種類の勞働を要すること、若しくは此勞働を支ふる資本、又は資本の一部分が、一層長期に互つて之を放下せざるべからざること、若しくは最後に、生産が永久的に高率の利潤を以て償ふこ

とを要する何等かの事情を伴ふことに存せざるべからず。是等諸要素中生産に要せらるゝ勞働量最も重きを占む。自餘のものゝ効果は、何れも微細にはあらず」と雖も、之よりも輕ろし」と。(Principles, Bk. III, ch. VI.)

ミルは元來、生産は勞働者自身に由て企てられないで、資本家が勞働者を雇つて之を營むものとして立論して居る。而してそれが現在の社會に於ける生産の本則的形態であることは異論のないところであらう。ところが生産が資本家に依て營まれる場合には、勞働其者は資本家に取つては何等の費用を意味しない。資本家に取つての費用は、勞働者を雇傭する爲めの賃銀であつて、生産に要する勞働量が增減しても、それが爲めに支出する賃銀總額に增減のない限りは、この客觀的勞働費用の增減は、毫も資本家の意識には上らないのである。同時にこれと反對に、一物の生産に要する勞働量には增減がなくても、何等かの理由で、或種の産業に於ける賃銀率が、特に他に比して騰貴するといふ事があれば、其産業に於ける資本家の生産出費はそれ丈け膨脹し、從つて其産業に於ける利潤率を動かし、延いて貨物供給の現狀を變動せしめて、其交換比率に影響せざるを得ないのである。シイ

ニオルが折角生産費(勞働節約)と、それに對する報酬(賃銀、利潤)とを區別して、議論の混線を防がうとしたのに、ミルが又もや賃銀利潤を生産費の構成要素としたのは、後にケルンズの攻擊を免れなかつた所以であるが、併し議論の要點は、客觀的に、謂はゞ人間對自然の關係を眼中に置いた場合の費用と、資本家の立場から見た費用とを明かに區別しなければならぬと云ふ丈けの事であつて、前の立場から見た費用のみが費用であるといふのは、偏狹なる言葉の爭に歸着する嫌がある。資本家の立場から見れば、勞働者の勞働は毫もその苦痛とするところでない。たゞ此の勞働を雇傭することが、資本家の懷からの出費を要するので、それがそこで始めて彼等の關心事となるのである。卽ち彼等の立場から見れば、費用は賃銀であつて、勞働ではない。而して勞働者と資本家とが別人であつて、而かも生産の主宰者は資本家である場合には、此の資本家の立場から見た費用の大小は、當然市場價格の歸向中心を動かすのである。

十二

上述の通り、ミルはシイニオルとは少し違つた方法で、賃銀率と投下勞働量との不均衡から生ずる勞働量と價値との離隔を認めたが、ケルンズはその所謂不競爭團 non-competing groups の說に依て、更に此點を詳論して居る。

ケルンズに云はせると、貨物生產費を構成するものは、勞働と節欲と危險(リスク)とであるが、この中の危險は、彼れ自身も頗る之を輕視して、僅かに數言を之が爲め費すに止めて居る位で、その主要問題として論じてゐるのは、價値に對する勞働と節欲との關係である。さて彼れに從へば、人が生產上に敢て勞働又は節約の犧牲を忍ぶのは、これに對する報酬を得んが爲めである。ところで、勞働に對する報酬は賃銀、節欲に對する報酬は利潤であるが、この賃銀利潤は、何れも生產物の價値を其源泉とするものである。そこで一貨物生產の爲めに忍ばれた勞働と節欲とに賃銀利潤のよく比例するところでは、價値は生產費に比例するといふことが出來る。然らば賃銀及び利潤は果して勞働と節欲とに比例するか何うかといふに、ケルンズに從へば、生產者卽ち勞働者間及び資本家間に完全なる競爭の行はれるところ、卽ち勞働者は全然自由にその欲するところに勞働を投じ、資本家は同じく全然自由

にその欲するところに資本を投ずることの出來る場合には、犧牲と犧牲に對する報酬との平均といふことが實現せられると謂ふ。

然らば此の勞働間及び資本間の競爭は、事實上完全に行はれてゐるか(或は行はれ得るか)何うかと云ふに、ケルンズは資本間には完全なる競爭が行はれるので、節欲の犧牲と、之に對する利潤といふ報酬との關係は、諸產業を通じて平均する事が出來るものと認めたが、勞働者の間には障壁があつて此競爭が行はれないので賃銀は投下せられた勞働とは、限られた範圍の外では、釣合はぬと謂ふのである。此の障壁に依て相互に遮斷せられた幾多の階層が、卽ち彼れの所謂不競爭團を成すもので、同じ階層の內部では、勞働者相互間の競爭が完全に行はれるから、同階層同志の勞働者にあつては、その收得する賃銀は、その投下した勞働に比例するけれども、異つた階層間には原則として此事が行はれぬから、從つて賃銀と投下勞働量との不平均を來たすといふのである。もう少し具體的にいふと、同じ勞働者の間にも上下幾多の階級がある。例へば勞働者中の最下級には、無熟練若しく準無熟練勞働者(農業勞働者も之に屬す)が居る。其次に大工、指物師、鍛工、石工等の手工業者、

及びこれと略ほ其境遇を同じうするものが居る。更に其上には、技師、藥劑師、眼鏡師、時計師等の高級なる一階層がある。又更に其上には、學者藝術家其他所謂 profession に從事する人々の一團がある。これ等各階層の境界は、全然之を踰越することが出來ぬといふものではないけれども、一の階層から其上の階層に移るといふことは甚だ困難で、これを爲し得るのは寧ろ異例に屬するといつていゝ。上層の勞働者が如何に有利の報酬を受けて居つても、下層の者は往いて之と競爭することが出來ない。比較的上層に屬する者の仕事は、特別の資格を具へたものでなければ出來ないものであるのに、能く此資格を修得することは、これ丈けの教育を受ける資力と機會とを有つてゐる者にのみ限られてゐるといふ制限がある爲め、上層に屬する者は、下層の者に對しては獨占的地位を占めることゝなつて、勞に比して過大の報酬を收めてゐても、下層の者の競爭に依てそれが引下げられるといふ事がない。そこで同じグルウプに屬する勞働者の生産物同志、例へば卓子(テエブル)と錠前、または時計と晴雨計といふやうなものは、其生産費に應じて相交換せられるけれども、異つた階層の生産物間の交換比率は、その生産費に比例するものではない。

然らば異階層間の交換比率は何に由つて律せられるかといふと、ケルンズはミルが國際貿易の理論として立てた相互需要の法則 law of reciprocal demand を借り來つて、之を此處に適用しようとする。然し相互需要の法則を論ずることは、今吾々の問題ではない。此處にはケルンズに依て價値が生産費に由て左右せられることが、たゞ同階層勞働者の生産物相互間にのみ限られることになつた事丈けを記せばいゝのである。

斯の如く價値が生産費に由て左右せられる範圍は、甚だ狹く局限せられることになつた。而かも其の狹い範圍内に於ても、勞働は生産費を構成する要素の一たるに過ぎぬものであるから、生産費に由て左右せらるゝ價値は、直ちに勞働量に由て左右せらるゝ價値ではないのである。それでは勞働者間に階層の障壁があつて、一般的自由競爭を妨げてゐるといふ事實は、果してあるか何うかと云へば、私はあると答へなければならぬと思ふ。たゞリカルドオは、勞働者間資本家間、到處に完全に自由競爭が行はれるものとの假定の下に其價値法則を立てたのであるから、かゝる競爭は事實行はれないといふことが明かになつたところで、リカルドオ

の推論の過程に謬りがあるといふ事にはならぬ。たゞ彼れが稍々事實に遠い假定を前提として出發したといふ譏りを受ければ受けるのである。

以上長々と述べ來つた、十八世紀末から凡そ百年間近くの英吉利價値學說發達の結果を概括すると、資本の有機的組成に異同がなくて、(卽ち始め勞働が投ぜられてから、生產物が出來上る迄に經過する時間に異同がなくて)、而して自由競爭が完全に行はれるところでは、貨物對貨物の交換比率は、たしかに生產上に投入せられた勞働量に依て決せられるものだといふ事が出來る。然るに一般的に資本の有機的組成に異同のないといふ事は、若しあるとすれば、生產方法の簡單幼稚な原始社會に限つてあるであらう。卽ち此點丈けでは、勞働價値法則の適用を始めから原始社會に限つたアダム・スミスが却て正しかつたのである。之に反して自由競爭が完全に行はれるといふ事は、或程度に發達した資本主義社會に於て、始めて之を見ることが出來るのである。そこで勞働價値說は同時に備はり難き二つの假定を前提として理論を構成しようとしたものだといふ事になる。而して此非難

を避けようとして修正を加へると、勢ひ生產費說に歸着せざるを得ないのである。價値論發達の歷史から、これ丈けのことが學ばれると思ふのである。

(「解放」大正十一年十一月號發表)

第二篇　ロオドベルトス研究

第一章　ロオドベルトスの勞働價値學說と平均利潤率の問題

一

勞働價値學說に取て最大の難關が利潤率均一の事實(若しくは傾向)である事は、既にMarxの『資本論』第一卷と第三卷との間に所謂『矛盾』の存する事實に依て充分明かに證示せられて居る。若しもMarx等の主張するやうに、價値が投下勞働量のみに由て決定せらるゝものならば、同額の資本を投じて生產を行ふ場合と雖も、その資本中、勞働者雇傭の爲に投ぜらるゝ部分の占める割合が相等しからざる場合には(Marxの術語で云へば、資本中の可變部分――賃銀として支出せらるゝ部分――と不變部分――原料器具機械等人間以外の物の爲め支出せらるゝ部分――との割合、卽ち所謂資本の有機的組成を同うせざる場合には)新たに產出せらるゝ價値額は相等しからざるべき筈である。從て同額の資本が生むところの利

潤額は、資本の有機的組成が異なるに從つて相違しなければならぬ筈である。然るに目前の事實は此理論に反して居る。利潤率は諸多の産業を通じて均一に歸する傾を示し、Marx其人も亦敢て此事實を否認しなかつたのである。其處でMarxの價値理論と、平均利潤率を其構成要素とするその生産價格の理論との關係は、多數經濟學者に取ては甚だ難解のものとならざるを得ない。Marx infallibleの信仰を以て之に臨むにあらざる限り、多くの人は是を以てMarx系統中の最大弱點と認めることに躊躇せぬであらう。併し是はMarxに就てのみ云はるべき事ではない。苟も勞働價値學說を徹底的に主張するものは、何人も此障害に逢着せざるを得ないので、若しRicardoの如きも、價値に關するその論究をPrinciplesの始めの三節(第三版以後に就て言ふ)に限り、『……貨物の交換價値若しくは一貨物の幾許量が他の貨物と交換せられる可きやを決定する規則は、殆ど一に其各々に投ぜられたる勞働の相對量に由て決せられる』と云ふに止めたならば、彼れの價値論は必ず利潤率平均の事實と相容れぬものとなつたに相違ない。然るにRicardoは人の屢々卽了するやうに、單純な勞働價値論者では決してなかつた。彼れが勞働のみを價

値の決定原因とは認めて居なかつた事は、それを認めて居たMcCullochに對して、價値を決定する原因は一でなくて二である事を力說したのに徵しても之を疑ふべき餘地は全くない。然らば、價値を決定する二原因とは何か。今これをRicardo自身の言葉で言へば……價値問題に就て「最善の思索を重ねた結果、余は貨物の相對價値を動かす原因が二つある事を信ずるものである。第一は貨物を製作する爲め必要なる勞働の相對量、第二は勞働の成果が市場に賣出される迄に經過する時間の長短だ」と云ふのである。而してこれは嘗て別の機會に說明した通り、この時間の長短なる要素は結局これを利潤にreduceして考へることが出來るのであるから、極く大體に於て、Ricardoをして單純素朴なる勞働價値說の取る可からざる所以を覺らしめたものは、またMarxをして價値とは異なる生産價格に到達せしめた同じ平均利潤率であると云つても差支なからうか。そこでMarxが其價値法則を辯護して、平均利潤率なるもの未だ發生せず、生産要具は勞働者自身の手に屬したるが如き、幼稚狀態の下に於ては、價値法則は現實に交換比率を支配するものであると記した(Kapital III. 1. S. 156)と同じやうに、Ricardoも亦其勞働價値說に甚し

く制限を加へて、(一)人が生産上何等の機械を用ゐずして勞働のみを使用し、且つ貨物が市場に持來たさるゝ迄に經過する時間の同一なる場合、及び(二)人が同價値にして且つ存續(耐久)力を同うする固定資本を用ゐる場合に於てのみ、貨物の交換價値は費やされたる勞働量に由て左右せらるとしたのである。

之を要するに利潤率均一の傾向を事實として承認する以上は、單純なる勞働價値說は之を支持する事が出來ないらしく思はれる。Carl Rodbertus-Jagetzow が勞働價値說を前提として打立てた分配理論の全系統も、亦た此理を示す一例證を供するものである。

二

『社會主義經濟學の Ricardo』(A. Wagner)を以て稱せらるゝ Rodbertus の經濟理論系統は、其壯年の頃夙く完成の域に達して、爾後生涯を通じて餘り變易する處がなかつた樣である。卽ち今其三十七歲の著作なる Zur Erkenntnis unsrer staatswirtschaftlichen Zustaende, 1842 を取つて、之を Kirchmann に與へた公開狀三通(Sociale Briefe an von Kirch

mann von Rodbertus. Erster Brief. Die sociale Bedeutung der Staatswirtschaft, 1850—Zweiter Brief. Kirchmann's sociale Theorie und die meinige, 1850—Dritter Brief: Widerlegung der Ricardo'schen Lehre von der Grundrente und Begruendung einer neuen Rententheorie, 1851.右の中第二第三書簡は之を合綴し、多少の變更を加へて一八七五年 Zur Beleuchtung der socialen Frage の題下に公にせられて居る)及び其遺稿なる『資本論』(Das Kapital. Vierter socialer Brief an von Kirchmann von Dr. Carl Rodbertus-Jagetzow. Herausgegeben und eingeleitet von Theophil Kozak. Berlin, 1884)と比較するに、勿論時々必要に應じて、議論の重點の所在は同一ではないが、其分配原理に就ては常に同じ事が反覆力說せられて居るのである。それでは彼れが反覆說明するところの分配理論は如何なるものであつたか。其要領を摘記すれば、凡そ次の如きものである。

Rodbertus の經濟學的思索は「凡ての經濟財には勞働が費やされてある。而して勞働のみが費やされてある。kosten Arbeit und kosten nur Arbeit」と云ふ命題を以て出發する。是れが彼れの第一定理である(Erkenntnis S.1—30)。彼れは別の處で之を說明して斯うも云ふ。凡べて經濟財は皆勞働產物である、換言すれば勞働のみが

生産的(プロダクティヴ)である。さう云ふ意味は第一、勞働の費やされた財のみが經濟財に屬する。自餘一切の財は、それが人類に取つて如何に必要有用であつても、皆自然財であつて、經濟と相係はるところがない。第二に經濟財は凡べて勞働のみの所産である。卽ち是等のものは、經濟上の觀察Auffassungに取つては、自然力若しくは他の何等かの力の産物としてでなく、勞働の産物としてのみ意義を有する。是れ以外の觀方は博物學的の觀方ではあるかも知れないが、經濟學的觀方ではない。第三、經濟上から見ると、財は生産上必要なる物質的作業(materielle Operationen)を行ふ勞働の産物に過ぎない。但し玆に物質的作業と云ふのは、一定財の生産に直接に當る勞働のみを意味するのではなくて、其財を生産する爲めに用ゐられる道具の生産に當る勞働をも含む。卽ち穀物は鋤を執る人のみの産物ではなくて、同時に又其鋤を造る人の産物でもある(III. Brief, S. 26-28)。Rodbertusの公式を借りて云へば、X財は $m+\frac{n}{o}$ 量の勞働の産物であると云ふ。mは財の生産に投ぜらるゝ直接勞働の量、nは生産要具を造る爲めに費やさるゝ勞働量、oは生産要具が完全に消耗し盡くされる迄に生産し得るX財の量である(Zur Erkenntnis S. 12)。

Rodbertusの第一定理の意味は凡そ此の如きものである。

三

既に一切の經濟財は勞働の所産であるから、勞働に從事するものは勞働の全産物を其所得として收めなければならぬ筈であるのに、今日の社會では、此正義の要求は滿たされないで、勞働者は僅かに其の生産物の一部分を賃銀として收め、他の部分は悉くRenteとして財産所有者の手に歸屬する。玆にRenteと云ふは、賃子、賃料、不勞所得又は財産所得とも譯すべきもので、Rodbertusに從へば、「自ら勞働することなく、財産の力に依て收得する一切の所得」の謂ひであつて、地代も、資本利潤Kapitalgewinnも、資本利子Kapitalzinsも、皆等しく是れに屬するのである(II. Brief, S.59)。然らば如何なる原因の作用に由て、所得生産の爲めには一指を動かすの勞をも取らぬ人間が能く所得を收め得るか。既にRodbertusに從へば、所得は悉く勞働の所産であるから、若しも各勞働者が、纔かに己れを支へるに足る丈けの所得をしか産出することが出來なければ、無爲の人が他人の所産に倚賴して生活する事は絶對的に不可

能でなければならぬし、又假りに勞働者の勞働は能く己れ一身を支へる以上の餘裕を産出するにしても、無爲の人にこれを奪取するの權力がなければ、矢張りRenteなるものは成立すべき筈がない。そこでRodbertusはRenteの成立の爲めには「二の前提條件の備はる事を要すると云ふ。第一は經濟上の原因で、第二は法律上の原因である(II.Brief S.59,60. III. Brief S.42 ff.)。即ち曰く「勞働に依て産出せらるゝ以外に所得はあり得ぬのであるから、賃子は缺く可からざる二の前提條件を基礎とする。第一に勞働が少くも勞働者に取て、勞働繼續の爲め必要なる以上を産出するにあらざれば賃子なるものは生じ得ない。――蓋し斯の如き餘剰Plusが存するにあらざれば、何人も自ら勞働する事なくして、規則正しく所得を收受する事は不可能だからである。第二に此餘剰の全部又は一部を勞働者から奪つて、之を自ら勞働せざる他人に與へる制度が成立して居るのでなければ、賃子なるものは生じ得ない。――何となれば、勞働者は、本來常に先づ自ら其生産物を占有するからである。此餘剰が全部又は一部分勞働者から奪はれて、他人に與へられると云ふ事は人爲の法制に基づくものである。而して法律は常に威力と結付いて居るから、從

つて此奪取も亦た常に强制に依てのみ行はれる。

此强制が最も露骨明瞭に働らくのは奴隷制度である。奴隷制度の下では、勞働者は生産要具や生産物其者と同じく、主人の所有財産に屬し、主人は奴隷に必要なる食餌を給するの外、一切の生産物を其自由に處分する。而して主人が奴隷を支配する方法は、直ちに暴力其者であつた。然るに今日奴隷制度は最早存續して居ない。勞働者は「自由」なる人格である。それでは今日如何なる力が自由なる勞働者を强制するかと云へば、それは「饑餓」である。即ちRodbertusの文句を引用すると、「最初には奴隷制度がこの强制を行つた。(奴隷制度は農耕並びに土地所有と同時に發生する。)己れの勞働産物に於て斯る餘剰を産出した勞働者は奴隷であつて、勞働者並に生産物其者の持主たる主人は、其中から(生産物の中から)僅かに勞働繼續に必要な丈けを勞働者に與へて、殘餘若しくは餘剰をば己れの手に留める。然るに一切の土地が私有に歸し、又それと同時に、一切の資本が私有せられると、土地所有者並びに資本所有者は、解放せられたる、若しくは自由なる勞働者に對して同じ樣な强制を加へる事になる。何となれば、第一それは奴隷制度と正に同じく生

産物をして勞働者に屬せずして、土地及び資本の所有者に屬せしむるの作用を爲し、第二に土地及び資本の所有者たる主人に對立する、無一物なる勞働者をして、其生活維持の爲め、卽ち其勞働繼續の爲め、僅かに自己の勞働產物の一部分を甘じて受けしめるからである。さう云ふ譯で、成程勞働者と雇主との契約が奴隷制度に代つた事は代つたが、此契約は形式上にのみ自由で、實際上から云へば決して自由ではない。饑餓が殆ど完全に笞杖の用をなすのである。以前飼料と呼ばれたものが、今は賃銀と呼ばれるに過ぎないのである。」

故に賃子は、勞働者の手から其勞働產物を搾取した結果である。Rodbertus は玆に强奪 Raub なる文字を用ゐて居るのである(Das Kapital, S. 202—3)。

既に與へられた前提に依て、賃銀と賃子とが全國民所得中に占める割合も、亦た自ら演釋せられる道理である。賃子は勞働の生產能率が高められて、勞働者の生活必要程度以上に餘剩を產出するに至つて、始めて發生する。それ故勞働の生產能率が益々上進して、餘剩を生む事が多ければ多い程賃子の增加し得る餘地は擴大せらるゝ道理である。然らば賃銀は生產能率に伴つて上進することはないか

と云ふに、Rodbertus は大體に於て賃銀は勞働の費用價格 Kostenpreis に歸着する傾あるものと認めて居た。それは既に賃子發生の前提條件に依て窺はれる許りでなく、彼は或は勞働の交換價値は、其生活必要額に歸着せんとし、而して生活必要額は勞働者の欲望に依て定まるもので、勞働生產物の分量に依て定まるものではないと明言し、(Kapital S. 202—3) 或は又人口が增加し、從つて勞働が一層生產的になり、同時に個人の自由が大となるに從て、勞働者は益々己れを廉價に賣る必要に迫られる。何となれば勞働は益々競爭、而かも不利益なる競爭に支配せらるゝ商品に近いものになつて、雇主は益々低廉に提供するものに仕事を與へる事になるからだと記して居るのである(II. Brief S. 86)。

本來 Rodbertus に從へば賃子と賃銀とは相背馳すべきもので、國民所得中賃銀の占める割合が增加すれば賃子はそれ丈け減少し、反對の事が行はれゝば、又それ丈反對の結果を見るべき筈である。然るに上述の理に依て、賃銀は大體に於て勞働者の必要に依て定まり、生產能率の增加には伴ふ事が出來ぬとすれば、分業の進步、技術の發達に依て恩惠を受けるものは財產所得のみであつて、賃銀はこれに與か

る事が出來ない。卽ち賃子は生產能率と共に增進するに反し、「勞働者の賃銀は勞働の生產能率增進する場合には生產物に對して益々小なる分前を占める事になる」のである。(II. Brief 84, 85)

(註、玆に謂ふ生產能率はProduktivität の譯で、之を生產力としないのはRodbertusが別に Produktivkräfte なる文字を用ゐて居るのと區別する爲めである。Produktivkräfteは勞働人口の大小に依て增減する。生產能率と生產力とは相互單獨に增減し得るのである。)

四

賃子と賃銀との關係は上述の如くであるが、次に問題となるは、賃子その者は如何に分割せられて資本利潤及び地代となるかである。而して此理法を解する爲めには、其基礎となつて居る勞働價値說を知らなければならぬ。

Rodbertus は二重の意味に於て勞働價値說を奉じて居たと云つて宜からう。と云ふのは、一方では、彼れは勞働を以て價値の尺度たるに最も適したもの、勞働を以

て價値の尺度とする事が最も正理に適へるものなる事を主張し、他方に於ては、現實に貨物の交換價値は生產の爲め投下せらるゝ勞働量に依て支配せらるゝ事を認めて居たからである。第一の意味に於て、彼れは「若しも財の價値が常にその勞働費用額に等しきものならば、勞働は最良なる『價値の尺度』であるだらう」と云ひ(Erkenntnis S. 31)、又自ら「如何なる財が最もよく價値の尺度たるの用をなす可きか」と云ふ問を設け、それに答へて、疑もなく、それは常に財の眞價を最も忠實に示す事の最も確實なるものである。貴金屬は人の知る通り、其れ自身の價格が變動するといふ缺點を持つて居る。反之勞働は凡ての財の自然的價格決定原因その者である。それ故に若しも財の相互交換せらるゝ分量が、兩貨物に含まれたる同一量の勞働に由て決せらるゝものとすれば、卽ち換言すれば、Aなる貨物とBなる貨物との交換比率は、常に此の兩貨物に投ぜられたる同一の勞働量に依て決定せらるゝもの、さらに換言すればX勞働の造る貨物量は常にX勞働の造る貨物量に對して交換せらるゝものとするか、或はさうなる樣な仕組にすれば、勞働は當に之を財の價値尺度として用ゐ得べきのみならず、貴金屬より一層よく其役目を果たす

であらう。何となれば、勞働は何等價格の變動を蒙ることなく、常に同一なる財の費用尺度たるものだからである」と云ふのである(Erkenntnis S. 62, II. Brief S. 78)。此思想は漸く進んで、彼れの勞働貨幣の主張に到達するのであるが、右の引用文に依て知られる通り、彼れは此場合常に若しもと云ふ條件を付けて議論をして居る。此意味で說を述べる場合には、彼れは現實の交換比率は投下勞働量に依て支配せらるゝものとは斷定して居ない。故に彼は勞働が價値の尺度たりと云ふは既に實現せられたる事實ではなくて、將來に於て實現せらるべき勞力の對象たる理想だと云ふ意味を反覆して述べて居るのである。(II. Brief S. 80. III. Brief S. 26)

併し同時に彼れは現實の所得分配の理法を說明するに、勞働價値說の承認を以て出發して居る。

勿論此處に謂ふところの價値は所謂交換價値である。それでは交換價値と使用價値との關係は何うなつて居るかといふに、個々の交換價値は斯うして成立する。即ちAが自分に取てより少ない價値(即ち使用價値)を有するものを、より多くの使用價値を有するものに對してBと交換する。同じ動機がBに於ても働らく。

斯くして兩生產物の一定量に就て交換が結了する。斯くして交換に由て一生產物が他の生產物に對して受ける對價(Geltung(即ち交換せられた相手の貨物の分量に依つて計量せらるゝ)を稱して價値、即ち玆では交換價値と云ふ。故に交換の眞相は、各人が他人の爲めに使用價値を生產し、又從つて他人から其代償を受ける關係を設定することに在る。而して交換價値は、他人に對する使用價値に外ならぬものである……それ故交換價値は又之を社會的使用價値と呼んでも好い。それが前者である事は、それが後者である事を示す」のである(II. Brief S. 75)。

此交換價値が、Rodbertus に依れば、投下勞働量に歸着しようとするのである。勿論市價(交換價値が普遍化したものを市價(マルクトヴェルト)と云ふ)時々の需要供給に由て定まるのであつて、それが個々の場合に於て、常に精確に勞働費用に一致するものでないことを Rodbertus は明かに認めて居るが(III. Brief S. 92. Kapital S. 6 u. a.)併し市價は結局、自由に放任せられた交換に於ては、その『公正若しくは自然なる』交換價値なる勞働費用額に絕えず歸着しようとする傾を持つて居る。何故と云ふに各人利己心の發動の結果、競爭場裡に於て市價は久しく其勞働費用額以上にも以下に

も停まる事は出來ぬ。若し市價が『自然的』交換價値以上に在れば、均衡が恢復せられて、同量勞働の産物と産物とが交換せらるゝ樣になる迄、競爭者が來り加はるであらうし、市價が『自然』價以下に降れば、その反對の事が行はれるからである。それ故、大體に於て、生産物の市價は生産能率に反比例する。同量の勞働力を投じて二倍の生産物が造られるならば、同量の生産物の市價は半減する」と云ふのである(II. Brief S. 80-1. III. Brief S. 92. Kapital S. 6 ff.)。これが Rodbertus の價値論の大略である。而して是を基礎として彼れの分配論は演釋せられるのである。

五

さて賃子の全額は如何なる理法に從つて資本利潤と地代とに分れるか。固より地主と資本家との別を生じないで、原料の生産も、其加工も、凡べて同一企業家の權下に於て行はれた時代に於ては勞働の所得と賃子との分割丈けがあつて、賃子全額は一括してこの地主兼資本家の手に屬して居たのである。此の時代には勿論地代と資本利潤との分岐はない。然るに分業の結果、原料の生産 (Rohproduktion)

と原料に加工する製造工業 (Fabrikation) とが別々の人に依て行はれることになると、一國全所得から賃銀總額を控除した殘餘(卽ち賃子)は、如何なる割合で原生産業と製造工業との間に分配せられるかと云ふ問題が起る。此問は上述の價値法則に依て、極めて簡單に答へらる。卽ち投下勞働量に比例して賃子は原料生産と製造工業との間に分配せられるのである。Böhm-Bawerk が假に設けた一例に依て說明すれば、一定量の原産物を作るのに、百日分の勞働が要せられ、其原料の加工製造に更に二百日分を要するとする。而して賃子は生産物總價値の百分四十を占めるものとすれば、勞働四十日分の生産物が賃子として原料生産に歸屬し、同じく八十日分が製造工業に對する賃子となると云ふのである。卽ち原産物の價値が製造工業産物の價値に比較して少なければ少ないほど、原生産業に歸屬する賃子の割合は低く、又其反對ならば又反對の結果がある。而して此場合投下せられた資本額は、此分配比率に關係しないのである。

さて製造工業に配當せられた賃子額は、直ちに製造業に投下せられた全資本に對する利潤と看做して差支ないけれども、原産業に歸屬する賃子は、直ちに之を地

代と見る譯には行かぬ。何となれば、原産業にも亦資本が投下されてあるからである。そこで此賃子に就て、利潤と地代とを區別しなければならぬ。而して此區別の標準となるものは、普通利潤率である。普通利潤 ueblicher Kapitalgewinn は製造工業に投下せられた全資本額と、之に算當せらるゝ賃子額とを比較することに依つて得られる。斯くして得たる利潤率を原産業の賃子に適用して、若しそれが原産業に投下せられた資本に對して、普通利潤率以上に相當すれば、其餘剩部分は卽ち地主の地主として受くべき地代だと云ふのである。然らば原生産業に歸屬する賃子の投下資本に對する比率は、必ず普通利潤率以上に上るべき理由があるであらうか。Rodbertus は然りと答へる。それは原生産業は、製造業に比して特に有利な地位に在るからである。製造業に於ては其資本の一部分を(屢々大なる部分を)原料購入の爲めに支出しなければならぬのに反して、原産業に於ては此費目がない。然るに Rodbertus に從へば、原料からは新しい價値が生れない。それ故製造業は原産業と比較すると、賃子を增さずして支出資本を增さなければならぬ不利があるのである。卽ち原産業に歸屬する賃子の投下資本に對する割合は、製造業

に落ちる賃子の投下資本に對する割合よりも必ず高い。地代は必然此處から生ずると云ふのが彼れの分配理論である。

念の爲め原文を引用すること次の如し。

六

Rodbertus 問を設けて曰く、總じて原生産物の上に歸屬する賃子より資本利潤を控除したる後に、猶ほ幾許かゞ殘るべき道理があるか。又如何なる前提の下に、如何なる理由に由つてこの餘剩が殘るかと。是れに對して自ら答へて曰ふのに「…原産物も製造工業品も、共に其費用勞働に從て交換せらるると云ふ前提、原産物の價値は僅かに其費用勞働に等しとの前提の下に於て、(Ricardo も亦正に是を其一切の研究の根據として承認す)原産物の價値の高低如何を問はず、賃子の原産物に歸屬する部分から資本利潤を控除した後には、常に何物かゞ殘らなくてはならぬ筈である。其理由は次の如きものである。予は前に賃子は原産物の價値と製造品の價値との比例に應じて分配せられ、而して此價値は費用勞働に由て決せられる

ものと假定した。斯く云ふ事はまた當然次の事をも意味する。此賃子部分の大小は、資本――それに對して利潤が算當せらるゝところの資本――の大小に由て決せられずして、農業上若しくは工業上の直接勞働と、道具機械の消耗の爲め間接に費やされた勞働とを加へたものに由て決せられる。それ故資本の中で、道具と賃銀とから成立つ部分のみが賃子部分の大小に影響を與へ得る。何となれば、道具の消耗は間接勞働の量を定め、又賃銀額は(少くも賃銀率が同一なる場合には)直接勞働と比例する。而して吾々の前提によれば、此兩者が合して生産物の價値を形成するものだからである。然るに資本中、原料價値から成立つ部分は、決して賃子に影響する事がない。何となれば、此部分は決して製造業の添加生産物 (Zusatzprodukt) の費用勞働に影響を與へ得ないからである(原料價値は新價値の發生に關係なきの義)。……反之原産物の價値、或は原料價値は『出費』としては資本財産の一項目をなし、而して製造生産物に歸屬する賃子部分は、此資本財産に對して利潤として算當せられなくてはならぬのである。然るに農業資本に於ては、此部分が缺けて居る。農業は豫め行はれた生産の結果を原料として要する事がなく、全

く始めて生産を行ふのである。而して農業に於て原料に比すべき財産部分と云へば、土地其者であるだらうが、是れは有ゆる學說に依て無價なるものと前提せられて居るのである。

「故に農業と工業とは賃子部分の決定に關係ある兩資本部分(賃銀、道具)は共通にするけれども、是に影響のない部分を共通にはしない。然るに前の兩資本部分に由て決定せられた賃子を、資本に對して算當する場合には、後者も亦資本として計算の中に入れなければならぬ。而して此部分は製造業資本にのみ存するのである。それ故原生産物並に製造産物の價値が費用勞働に依て定められ賃子は此價値に比例して原生産物と製造産物の兩所有者に分配せられるものと假定しても、卽ち原生産及び製造工業に於て生ずる賃子部分が、夫々生産物に費やされた勞働量に比例するとしても、農業及び製造業に投下せられた資本(此資本に對して賃子は利潤として割當てられるのであるが)相互の比例は、投ぜられた勞働量、及びこの勞働量に依て決定せられた賃子部分相互の比例と同一でなくて、原生産物及び製造産物の上に歸する賃子部分が、等大なる場合、製造資本は農業資本よりも、其中に

含まれて居る原料價値丈け大きいのである。而して此原料價値は、生じたる賃子を利潤としてそれに算當すべき製造資本をば增大せしめはするが、利潤其者は增大せしめず、又從つて、同時に農業をも併せ支配する一般資本利潤率を下降せしむるの結果を來たすから、農業に於ては必然的に、此利潤率に依て利潤を計算した後に、猶ほ賃子の一部分が殘らなくてはならぬ筈なのである。……故に原生產物の價値が費用勞働に等しくさへあれば、(Ricardoも亦、最不利なる事情の下に造られた生產物に就ては此事を承認した)一般賃子の前提條件——卽ち勞働の充分なる生產能率、及び土地資本の私有——が備はる限り、原生產物の價値は如何に小さくても、或は農業勞働の生產能率、卽ち土地の豐度は如何に低くても、必ず地代は發生しなければならぬ。……現實の交易に於て、少なくも價値は費用勞働に等しとの法則に歸向しようとするのが通則である限り、地代も亦通則である。地代が生ぜずして資本利潤のみが生ずるのは、Ricardoの言ふ樣に本來の狀態ではなくて、一の變態に外ならぬ」(III. Brief S. 96-100)。さう云ふ譯であるから「Ricardoの地代論は、或は彼れの理論全體の根本原則たる、生產物は何れも費やされたる勞働に應じて價値を有す

との命題と相容れぬか。……或は此原則を固執すれば彼れの地代論が謬つて居るか、何れかである。(此理論は私が上に試みたより以外の方法では立て樣がない)」(III. Brief S. 173)

これがRodbertusの分配論の根本原理で、企業家利潤、利子、借地料 (Unternehmungsgewinn, Zins, Pacht) は何れも上に說明した資本利潤と地代とが第二次的に細分せられたものに外ならぬのである。

七

右に記述するところに依て、Rodbertusの分配論上、卽ち賃子總額の分れて利潤となり、地代となる說明の上に於て、普通利潤率なるものが甚だ重要なる役目を演ずること、而して此普通利潤率なるものは勞働價値學說に依て說明せらるべきものなる事は明かにされたと思ふ。そこで是に對して批評を加ふべき順序となつた。

賃子發生(Marxの用語に從へば餘剩價値發生)に關するRodbertusの說明が兎に角甚だMarxに近似して居ることは爭ふ事が出來ない。兩者の何れに取つても、賃子

は勞働力の價値と、その勞働の生産する價値額とが一致しないで、後者が前者を超過し、而して此超過額が之を産出する勞働者以外の者の手に歸屬するところから生ずる。それ故同額の資本を投じて生産を行ふ場合にも、其資本中勞働購入の爲め(卽ち賃銀として)支出せらるゝ部分の割合が同一でなければ、産出せらるゝ賃子額は同一ではない。たゞMarxは全資本中賃銀として支出せらるゝ部分のみを可變部分とし、殘り一切を不變部分として一括し、後者にありては常に消耗せられた價値額丈けが、生産物の價値として再現するに止まつて、一切價値の增減が起らず、價値の增加、卽ち餘剩價値の發生は、必ず資本の可變部分からのみ起ると說明したのに反して、Rodbertusは資本財産を分けて原料、道具及び賃銀の三つとなし、原料價値はその儘生産物の價値となつて再現するに止まるのに反して、賃銀及び道具の消耗額は賃子の大小に影響するものと認めて居る。卽ちMarxが不變資本の一部分と認めた生産要具の消耗額を、Rodbertusは所謂可變資本の一部に數へて居るのである。この點はMarxの方が正しいので、Rodbertusの前提から出發すれば、消耗要具は、原料と同じく、これを不變資本中に數ふべきが當然だと思ふけれども、今其事

は深くは論じない。たゞMarxに取つても、Rodbertusに取つても、賃子額(餘剩價値額)の大小は資本中の――Rodbertusの用語では資本財産中の――賃銀部分の大小に依ては影響せられるけれども、原料價値の大小とは無關係である事は爭がないのであるから、此點丈けを取て批評を下せば好いのである。批評の主旨は一言で盡きる。Rodbertusが其分配理論上に於て重を措いた利潤率均一の事實を認める以上は、其議論の出發點たる勞働價値說は棄てなければならぬ。貨物は其生産に費やされた勞働量に應じて相互交換せられずして、或物は勞働量以上の價値を有し、或物は勞働量以下の價値を得なければならぬ。若し又Rodbertusが認めたやうに、價値は勞働費用に歸着するものならば、利潤率は永久に歸一せざる事を本則とする。卽ち資本財産中原料價値の重きを占める産業に於ては、その反對の實ある産業よりも利潤率が低くなければならぬと云ふのである。此道理は實例を假設して說明すれば極めて容易に會得せられるであらう。

先づ Böhm-Bawerk に倣つて簡易な一例を設ける (Capital and Interest. p. 358.)。

一生産業、例へば製靴業に十人の勞働者が雇はれてゐて、各勞働者が一年百磅の價値ある生産物を造るものとする。然るに一勞働者の生計必要費は一年五十磅で、各勞働者は夫丈けを賃銀として收得するものとする。さうすると此場合、雇主が收得する賃子は、前提に依て投下資本總額の大小には關係なく、常に五百磅 (100×10−50×10=500) なるべき筈である。投下せられた資本額が、賃銀の爲め五百磅、原料の爲め五百磅、計一千磅であるとすれば、五百磅の賃子は千磅の資本に對して百分五十の利潤となる。然るに別に他の産業、例へば金匠業に同じく十人の勞働者が雇はれて、各人同じく年百磅の價値を生産し、同じく其二分一を賃銀として受け、他の半分を賃子として雇主の手に歸せしめて居るものとする。ところが打金匠の原料として使用する金は、靴工の原料たる皮革よりも遙かに高價である爲め、雇主は賃銀として五百磅、金の購入の爲め一萬九千五百磅、合せて二萬磅の總資本を支出しなければならぬとすると、五百磅の賃子は二萬磅の資本に對しては、僅かに百分の二半の利潤に相當するのである。これは忠實に Rodbertus の前提するとこ

ろに從つて設けた一例であるが、更に之をもつと一般的の形で現はすには資本論第三卷に於て、Marx が「利潤の平均利潤化」論中に掲げた表を借用するのが甚だ便利である。

茲に社會に五の産業があつて、その各に投下せられた資本總額は同一であるが、其中に就て賃銀に支出せらるゝ部分 l と、原料に投ぜらるゝ部分 m との割合が、産業に由て一々違ふものとし、而して右の例にあつたやうに、一勞働者が産出する價値額は常にその生活費卽ち賃銀額の二倍に等しきものとし、生産額から賃銀を控除した殘高の、賃銀に對する比例を賃子率 (Marx の餘剩價値率) と命名すると、茲に左の如き表が成立する。(Marx, Kapital III. 1. Teil S. 133 參照)

	資本	賃子率	賃子額	生産物價値	利潤率
I.	80_m+20_l	100%	20	120	20%
II.	70_m+30_l	100%	30	130	30%
III.	60_m+40_l	100%	40	140	40%
IV.	85_m+15_l	100%	15	115	15%

V. 95_m+5_i 100% 5 105 5%

（道具の消耗額は姑らく除外してあるが、それが爲め原理に變更を來す事はないと信ずる）

即ち資本構成要素の比率如何に依て、利潤率は一々違はなければならぬのである。然らば Rodbertus は利潤率の不均一を當然の事として承認したかと云ふに、決してさうではなくて、彼れは明かに資本間の競爭に由て利潤率は均一に歸すべき事を認めて居つたのである。彼れの所謂普通利潤率は、製造工業に投下せられだ資本總額と、是より生ずる賃子總額との比に依て定まるので、上記の表に就て云へば、賃子合計 20+30+40+15+5=110 の、資本合計五百に對する比、即ち22%がそれであるが、彼れは各製造業に於ける利潤率は、みな此普通率に歸着しようとするもので、若し一產業(例へば上記打金匠の如き)に於ける利潤率が此普通率以下にあるときは、資本は其產業から引出されて他に移り、又それが此普通率よりも高度にあるときは、他から其產業に資本が流入して、之を普通率まで引下ける作用が行はれる事を明かに承認してゐる (III. Brief S. 94)。資本が流入すれば何故利潤率が下降し、資

本が流出すれば何故利潤率が上進するか。是に對する解答は、資本の流出入に依て、生產額が增減する爲め、需要供給の理に依て生產物の市價が或は下落し、或は騰貴するからだと云ふの外にはあり得ない。併し之を承認するのは、生產物が其生產の爲めに投ぜられた勞働量に應じて交換せられると云ふ、最初の原則を放棄する事を意味する。或貨物は其勞働費用以上に賣れ、或物はそれ以下に賣れる事を承認しなくてはならぬのである。今姑らく利潤率が平均した場合の貨物の賣價を、價値に對して價格と呼ぶならば、Marx を引用して「資本は利潤の低い方面から引出されて、より高き利潤の生ずる方面に投ぜられる。この不斷の流出入に由て、即ち利潤率の高低に應じて幾多の方面に分配せらるゝ事に由て、資本は幾多の產業部門に於ける平均利潤を同一ならしめ、從て價値を變じて價格(Marx は生產價格と云ふ文字を用ふ)たらしめる樣な需給關係を作り出す」のだ (Kapital III. 1. S. 175) と云ふ事が出來る。而して貨物の價格は「例外的にのみ其價値と一致し、」最も發達した產業(原料價値に多額の資本を投ずる產業)では、價値は價格以下にあることを通則とすると(III 2, S. 291, 292)云はなければならぬのである。

九

以上を以て本論の要旨は既に盡きたのである。しかし終りに臨んで猶ほ一言Rodbertus の爲めに辨解しなければならない。

右に述べたところに依て、純然たる勞働價値說と利潤平均の傾向の認承との兩立し難き事は、略ほ明にせられたと思ふ。故に若し Rodbertus が、一方では、貨物がそれに費やされた勞働量に應じて交換せらるゝものと斷定し、他の一方では、利潤は各產業を通じて平均する傾あるものと認めて居たならば、それは少しく無反省に過ぎると云はなくてはならぬ。現に Böhm-Bawerk の如きは、此意味で Rodbertus を批評して居るが、これは些か酷に失した嫌がないではない。(Böhm-Bawerk は偶々新版を比較する遑なかりし爲め、古き英譯 Capital and Interest pp. 357-365 に據れり、讀者諒せよ。)Rodbertus も實は勞働價値說と利潤率平均の承認とが相兩立しない事を認めて居たのである。それで彼れは此兩立し難き二の物の何方を捨てたかと云ふと、勞働價値說の方に制限を加へて、個々の生產物は必しも其勞働費用に應じて交換

せらるゝものではないが、全體に於て(im allgemeinen)勞働價値說は眞理だと云はうとした。乃ち曰く、個々の場合、卽ち各企業、並びに分業の各段階に於て、生產物がそれに具體せられて居る勞働量に精確に比例して交換せられると云ふ譯には行かぬ。而して其理由は

(一)資本利潤が一切の企業を通じて平均する少なくも傾向を有するから

(二)今日同種生產物の普通價値は、最も不利なる事情の下で生產を行ふ企業に於ける生產費に由て定まるからである」と(Zur Erkenntnis S. 130)。第二の點は茲では問題にならぬ。第一の點に就て云ふと、Rodbertus は上に私が述べた樣な意味で、利潤率均一の爲め、貨物が其勞働費用に從つて交換せられる事の不可能なる道理を說明して居る。例へば曰く、一財の生產が假に四つの階段に分れ(例へば紡績、織物、裁縫と云ふ樣に)各段階が獨立した企業となり、何れも同量の勞働を要するものと想像せよ。然るときは、若しも此各段階に於ける價値が投下勞働量と一致するものならば、各段階に於ける特殊生產物の價値も亦他の各段階に於ける生產物の價値と等しいであらう。然し乍ら、最後の企業家は第一第二の企業家より多くの勞働を

雇傭することはないにも拘はらず、より多くの利潤を擧げなければならぬ。同じ理に由て、第二の企業家はより少なき利潤を數へなければなるまい。何となれば、最後の企業に於ては、必要なる原料が第二の企業に於けるよりも多量の勞働の生産物である爲め、それ丈け高い價値を有するだらうからである。然るに若しも兩企業の各々の生産物が、正に其費用勞働に應じて賣られたならば、利潤として殘る價値餘剩 Wertrest は最後の企業に於ては餘りに低く、第二の企業に於ては餘りに高かるべき筈である。ところが競爭は平均利潤 gleichmässige Gewinne を要求する。それ故、一貨物の費用勞働に等しき價値は、資本賃子を生ぜしむるに足ると云ふ命題は、利潤平均の法則の結果として修正されなければならぬと (Das Kapital, S. 11-12)。

X量のA貨物は抑も何故にy量のB貨物と交換せらるるかと云ふ問に對して、それは此兩者に同量の勞働が含まれて居るからだと云ふのは、最も明確な解答である。併し乍ら此明確な解答は、利潤率平均の事實と相容れない。始め單純明快を極めたMarxの價値學說が、Verklausulieren の度を重ねて、遂に一種の生產費說の如き觀を呈するに至つたのは、此爲めであつた。Ricardo を呼ぶに、勞働價値論者でな

く、寧ろ生產費論者を以てするの可を主張する者(例へば K. Diehl)がある事も、亦此難問と無關係ではない。Rodbertus が行論の透徹明晰は吾人の推重措かざるところではあるが、彼れも亦能く此難關の通過に成功して居るとは思はれないのである。

(「國民經濟雜誌」第二十九卷第三、四號發表)

第二章　ロオドベルトスの地代論とリカルドオ

一

本書前章に自分は『社會主義經濟學のRicardo』を以て稱せらるゝRodbertusの經濟理論系統は、その壯年の頃夙く完成の域に達して、爾後生涯を通じて餘り變易するところがなかつたやうである。則ち今其三十七歳の著作なるZur Erkenntnis unserer staatswirtschaftlichen Zustände, 1842を取て、之をv. Kirchmannに與へた公開狀三通、及び其遺稿なる『資本論』と比較するに、勿論時々の必要に應じて議論の重點の所在は同一ではないが、其分配原理に就ては常に同じ事が反覆力說せられて居るのである」と記したが、彼れの著作中最も重をRicardo駁擊に措いたのは、そのv. Kirchmann宛第三尺牘(Sociale Briefe an von Kirchmann von Rodbertus. Dritter Brief: Widerlegung der Ricardo'schen Lehre von der Grundrente und Begründung einer neuen Rententheorie. 1851)である。此

書の始めの二三節に據れば、v. KirchmannとRodbertusとは、經濟上の正義が傷けられ、本來勞働者の手に歸すべきものが地代及び資本利潤として勞働者以外のものゝ所得となる事の原因を、土地並に資本の私有と自由放任主義とに歸する點に於ては所見を同うするが、次の三點に於ては說を異にする。

(一) v. Kirchmannは農業上の勞働の生產率(Produktivität)は益々減退し、食料原料の價格は益々騰貴し、從て生產物に對する資本家及び勞働者の分前が益々減少し、又從て最後に、その所得の大部分が食料原料を以て成る階級の貧窮に陷るべきことを主張するのに對して、Rodbertusは農業勞働の生產率の增進を主張する。假りに農產物の價格騰貴と云ふ事實が起るとすれば、それを別の原因に由て說明し、農業地代の騰貴なる事實を全く別の原因に歸する。而して一般に賃子Rente(卽ち資本利潤並に地代)は勞働賃銀を犧牲にして增加するもので、勞働者階級の貧窮は食料原料の騰貴に由るものではなくて、生產物に對する彼等の分前の減少に由るものなる事、而して此分前の減少は、正に生產物價格の低廉と相伴つて起るものなる事を主張する。

(二)v.Kirchmann は商業恐慌の原因が、勞働階級の分前の僅少にして、資本家の過大なる分前に對して充分の購買者たること能はざるところに在ることを主張するのに對して、Rodbertus は原因を分前の僅少には求めずして、生産率の增進に伴ふ分前の減少に求め、而して假に此分前が現在の如く僅少であつても、その割合が一定して居りさへすれば恐慌は起らぬであらうし、又此分前が如何に大でも、それが生産率の增進に連れて減少すれば恐慌は起るべきことを主張する。

(三)最後に Rodbertus は、自由に放置せられた交易に於ては、勞働階級は勞働の生産率增進の果實から除外せらるゝ事を主張し、社會をこれより生ずる病患から救治するには、此狀態を改めて、果實の增加に對する均霑を保障するの外なきことを認めるのに對して、v. Kirchmann は、Rodbertus が希望することは既に今日實現せられて居る、勞働階級は既に有産階級と共に生産率增進の恩澤に等しく浴して居ると主張するのである。(P. 6, 7.)

然るに v. Kirchmann の經濟學說の出發點は Ricardo の地代論にある。そこで Rodbertus は自家獨特の分配理論を詳述し、これを Ricardo の地代論と比較して、後者の取

る可からざる所以を明にしようとするのである。それでは Ricardo 地代論の特色は何處に存するかと云ふに、Rodbertus の見るところに依れば、それは、地代を以て比較的有利なる條件の下に、農業に投下せられた資本が、現在の需要を滿たす爲め不利なる條件の下に投下せられて居る資本以上に擧げ得る餘剩利益 Mehrgewinn だと認める點に在る。而して此地代理論の構造は、この最も不利なる條件の下に投下せられた資本は、決して地代を生ぜずして、僅かに賃銀と普通利潤とのみを生ずるに過ぎぬと云ふ原則と不可離のものである。然るに Rodbertus の見るところを以てすれば、次に述べるやうに、勞働價値說の前提の下に於ては、土地に投ぜられた資本は必ず普通利潤以上に地代を生ずべき約束を持て居る。Ricardo の地代說では、地代の大小は說明されるが、抑も地代その者の發生は之を說明する事が出來ない。Ricardo 分配論の出發點たる勞働價値說と、その地代論とは兩立しないから、その地代論を捨てるか、價値論を捨てるか、何れにかしなくてはならぬ。勞働價値說から出發すれば、自分のやうにする外、地代論の立て方はないと云ふのが Rodbertus の主張である(P. 173)。

二

Ricardoの定義する地代とは「土地生産物の中で、固有不可滅の地力の使用に對して地主に支拂はるゝところの部分」の謂であるが、必しもそれは借地人に依て地主に支拂はるゝものたることを要しないで、地主自ら經營に當る場合にも地代の生じ得ることは、彼れが「地代は常にこの等量の資本勞働を投下して擧げ得たる收益の差である」と謂ひ、又「土地の全生産物の價値から、其種類の何たるを問はず、耕作に屬する一切の支出(使用せられた資本の利潤をも其中に含む)を支拂つた跡に地主の手に殘る部分」を以て地代と認め、又「第一の土地を土地の所有者が耕やしても、或は他の如何なる人が耕やしても、この十クオタアは等しく地代を構成するであらうと云つて居る事に徵して明かである (Principles 3d ed. pp. 58, 59. Works of Ricardo edited by Mc Culloch 1871, p. 87)。さてRicardoに從へば、地代は土地に投ぜられた同量の資本勞働が等しからざる收益を擧ける場合には必ず發生する。而して地代の高を決定するものは、その收益の差額である。今彼れの見るところに從へば、土地に

投ぜられた同量の資本勞働が、等しからざる收益を擧ける場合が三つある。資本勞働が地味の肥瘠を異にする土地に投ぜらるゝ場合、地味に肥瘠はなくても、位置の便否を異にする土地に投ぜらるゝ場合、及び既に耕作せらるゝ土地に對して、增收を計る爲め、更に資本勞働を累ね投じても、收益增加の割合が投費の增加に及ばぬ場合、即ち收穫遞減の法則が作用する場合が是れである。而して此の三つの場合が起るのは、何れも人口增加の爲め、穀物に對する需要のまた之に伴つて增加する結果であつて、國が新しく人口が稀薄で、肥沃豐饒なる土地が到處に存する場合には、地代なるものゝ支拂はれることがないのは、猶ほ空氣水の如き無限に存する天與物に對して人が代價を支拂ふことがないのと同じである。然るに人口が漸く增加して、最も便利の位置にある、最も肥沃な土地のみを以てしては、之を養ふべき食料を產出するに足りなくなると、茲で或は地味の劣れる、或は位置の不便なる新しい土地を耕やすか、或は既に耕やされて居る土地に對して、相對的減收をも顧みず、更に累ねて資本勞働を投ずることをしなくてはならぬ。其處で始めて地代が發生すると云ふのである。

比較的位置の不便なる土地を耕やす場合も、或は同一地に資本勞働を累ね投じて收益遞減法則の作用する場合も、道理は同じであるが、漸次に地味の劣れる土地が耕やさるゝ場合を取て見るのが、Ricardo の地代法則を會得する上に最も便利である。假りに甲乙丙三級の土地があつて、これに各々同量の資本勞働を投ずると、甲からは百、乙からは九十、丙からは八十クォタァの純收穫が擧げられるものとする。今人口が稀薄で、甲級の土地のみが耕やさるゝ場合には、地代なるものはなく、耕作の全純收穫は凡て投下資本に對する利潤となるであらう。然るに人口增加して、乙級の地をも耕やすの已むなきに至ると、甲級地には十クォタァの地代を生じ、地主は之を手中に收める。何故と云ふに、農業資本に對する利潤率は均一でなければならぬが、今乙級の地を耕やす者は、其投下資本に對して九十の純收益を受けるものであるから、全く誰れにも地代を納めないで、乙級の地を耕やすのも、十クォタァの地代を納めて甲級の土地を耕やすのも、得失するところがない。卽ち斯の如く、甲級地に對して十クォタァの地代を納める事を敢て辭せざるものがあると同時に、既に甲級地を耕やすものは、其資本を他に轉用しても、九十クォタァ以

上の純收益を擧げることが出來ないから、彼は地主の要求を拒否することが出來ない譯である。そこで人口が更に增加すれば、同じ理由で、新に乙級地に十クォタァの地代を生じ、甲級地の地代は二十クォタァとなるであらう。

三

さて以上は姑らく穀物の價値を無視して、收穫穀物量の差額丈けに現れる地代に就て述べたが、Ricardo に從ふと、穀物の價値は他の一般貨物に於けると同じく、其の生產に要する勞働量に由て定まるのであるが、其勞働量は、最も有利な條件の下で生產を行ふ者が費やす、比較的小なる勞働量ではなくて、最も不利なる條件の下で生產を繼續するものゝ費やす最大の勞働量である。それ故人口の增加に連れて、勞働資本が漸次に劣等地に投ぜられると、啻に比較的優等地の地主に地代として收められる穀物量が逐次增加する許りでなく、これと同時に穀物一定單位量の價値は騰貴する。則ち地主は二重の利益を受けるのである。今 Ricardo が揭げて居る數字に據つて、地代穀量と地代の價値との比例を示すと、假に或土地に一定量

の勞働を投ずる時は一八〇クォタァの收益を擧げ、而して此場合の穀價が一クォタァ四磅と假定する。今次に同量の勞働を第二級の同面積の土地に加へると、一七〇クォタァの收益を擧げ得るものとすれば、穀價は (170 : 180 = £4 : x. x = £4—1—8 の計算に依り)四磅四志八片であるだらう。更に引續いて同量の勞働を同面積の次位の土地に投じて、順次に夫れ〴〵一六〇、一五〇、一四〇クォタァの收穫を擧げ得るものとすれば、穀價は順次に四磅十志、四磅十六志、五磅二志十片に騰貴するであらう。今假に第三位の土地が耕やさるゝ場合を取て見ると、最上地々主の收める地代は、穀二十クォタァ、之を貨幣に換算すれば (20 × £4—10—0 = 90) 九〇磅、第四位の地が耕やさるゝ場合には地代は穀三〇クォタァ、換算貨幣額一四四磅、第五位の土地が耕やさるゝときは穀四〇クォタァ、貨幣額二〇五磅十三志四片となる筈である。即ち地代穀量は一〇〇、二〇〇、三〇〇、四〇〇、の比を以て增加するのに對して、地代價値額は一〇〇、二一二、三四〇、四八五の比を以て增加するのである。

土地の位置の便否から地代が生ずる場合は、不便なる土地は運搬の爲めそれ丈け多く費用を要するのであるから、つまり生產力に優劣がある場合と同じものと

考へて差支へない。既耕地に益々資本勞働を累投して增收を期する場合にも道理は一である。Ricardo は收穫遞減法則を當然の事として、一定の土地に投下する資本勞働を倍加しても、收穫は倍加しないものと見て居る。今假に甲級地に投ずる資本勞働を倍加しても、收穫は二百クォタァとはならないで、百八十五クォタァに止まるものとすると、上述の場合と同一の理に由て、甲級地に十五クォタァの地代を生ずるであらう。此場合には土地は一であるが、最初に投ぜられた資本と、次に投ぜられた資本の收益力とは同じでない。地代は此の收益の差から生ずると云ふのである。

要するに何れの場合に於ても、二の同量の勞働資本の投下に依て擧げられる收益に差等のある時は、此差額は地代を構成し、而して最後に投ぜられた資本からは地代が生じないと云ふのが Ricardo の地代論である (In this case [of capital and labour being employed on land already in cultivation] as in the other [case of capital and labour being employed on lands of different quality] the capital last employed pays no rent. p. 59)。尤も「一國の穀物並に原產物は暫くの間は獨占價格で賣れる事がある。併しそれが永久的に獨占

價格で賣れるのは、資本を最早有利に土地に投ずることが出來なくなり、耕作せらるゝ土地の有ゆる部分、土地に投ぜられた資本の有ゆる部分が地代を生ずるに至る時許りである」と謂ひ「又然し乍ら私かに望むらく、予は一國の各部分が、その最高程度にまで耕やされる時迄は、常に資本の中で地代を生じない一部分があることを充分明かにし得たるものと思ふ」(pp. 291, 293)と記して居るのに徵すれば、Ricardo と雖も、穀物の增收がこれに對する需要に及ばない爲め、穀物が獨占價格で賣れ、又「一國の各部分が其の最高程度まで耕やされ」た曉には、土地に投ぜられた資本は、最も不利なる條件の下に投ぜられたものと雖も、猶ほ普通利潤以外に地代を生じ得ることを認めて居たものと云へるけれども、此點に對しては彼れは全く重きを措かなかつたのであるから、前に掲げた Rodbertus の Ricardo 解釋は決して失當ではない。それでは Rodbertus は何う云ふ理由で Ricardo 地代論を誤謬とするか。

Rodbertus は Ricardo を駁するのに、其章句を捉へて其誤謬を指摘するの方法を取らず、全く新たなる自家の理論體系を證明することに依て、自然に Ricardo の不合理を證明しようとした。卽ち建設によつて破壞するもので、批評としては最も堂々

たる積極的の批評である。(Rodbertus は經濟學 Staatswirtschaft 農學 Landwirtschaft 歷史、統計の四の見地から Ricardo を駁擊して居るが、吾々が茲で携はるのは、その經濟學上の議論丈けに止まる)

四

Rodbertus は先づ「凡べての經濟財は勞働生產物なり」又は同じ事を別の言葉で云つて、「獨り勞働のみが生產的 produktiv なり」との根本命題から出發する。此命題は著者自ら解釋するところに據れば、第一、勞働の費やされた財のみが經濟財に屬する。自餘一切の財は、それが人類に取つて如何に必要有用であつても、皆自然財であつて、經濟と相係はるところがない。第二に、經濟財は凡べて勞働のみの所產である。卽ち是等のものは經濟的見地から觀ると、自然若しくは他の何等かの力の產物としてゞなく、勞働の產物としてのみ意義を有する。此以外の觀かたは、博物學的の觀かたではあるかも知れないが、經濟學的の觀方ではない。第三、經濟上から見ると、財は生產上必要なる物的作業 materielle Operationen を行ふ勞働のみの

産物である。但し玆に物的作業と云ふのは、直接一定財の生産に當る勞働のみを意味するのではなくて、其財を生産する爲に用ゐられる道具の生産に當る勞働をも含むので、卽ち穀物は鋤を執る人のみの産物ではなくて、同時に又其鋤を造る人の勞働の産物でもある。之を一般的に云ふと、或道具を造るのにn量の勞働が費やされ、而してそれが全然消耗する迄にはx量の財を生産し得るものとすれば、各財は$n+\frac{n}{x}$勞働の産物だと云ふことを意味するのである。

さて一切の所得は悉く勞働の所産に外ならぬとすると、社會の中でその生産の爲めに一指を動かす事をもせぬ人々が、所得を得るのは如何なる原因に基づくか。玆でRodbertusは財の第一次的分配ursprüngliche Güterverteilungと、第二次的分配abgeleitete Güterverteilungとを區別する。法を司る裁判官、疾病を治療する醫師、少年を教育する教師の如きは、何れも物的生産には參加することなくして所得を收めて居るが、是等は何れも所謂第一次的分配に參加する他人の所得から、第二次的に所得を得るのでRodbertusが問題とするのは、所得の生産の爲めには一指を動かさずして、此の第一次的分配に參加するものがあるのは抑も何故だと云ふのである。具體的

に云ふと、地主は他人に其所有地を委附し、且つ借地料を徵收すると云ふの外、何事もせずに所得を得、又資本家が利子と云ふ同じ安樂な所得を收めるのは、如何なる原因に由るかと云ふのである。而して此の問に答へるものは、彼れの賃子Rente論であつて、之を說明した後にRodbertusは賃子が分れて資本利潤及び地代となるの理法を明にしようとするのである。

既に所得は悉く勞働の所産であるから、若しも各勞働者が、縱かに己れ一身を支へるに足る丈けの所得をしか産出することが出來なければ、無爲の人が他人の生産に依賴して生活する餘裕は全くなかるべき筈であるし、假りに又勞働者の勞働は己れ一身を支へる以上のものを産出するにしても、無爲の人に之を領得するの權力がなければ、矢張り賃子が成立すべき筈はない。そこで賃子發生の爲めには、二の條件の備はることを要すると云ふ。第一は、分業が創まつて以來、勞働が勞働者の生活維持並に勞働繼續の爲めに要する以上を生産する事、卽ち他人をして之に與かり生活する(mitleben)事を得しむる丈けを生産すると云ふ經濟的事實、第二は土地及び資本が私有せられて、それが爲め勞働産物が決して勞働者自身の手には

入らないで、他人の手に歸屬すると云ふ法律的事實である。」而して此二事實は相伴ふもので、第一の條件の備はるところでは必ず第二の條件も備はる。勞働者の勞働が己れ一身を支へる以上を生産するのは、分業を俟つて始めて起ることであるが、「分業が成立する限り、土地、資本、勞働産物は皆て勞働者に屬したことはなくて……常に他の私人に屬し來つた」のである(p. 42—57)。

此二條件の備はる限り、土地資本の所有者は必ず勞働生産物の一部分のみを勞働者に與へて、殘餘を己れの手に收めることが出來る。何となれば、己れの勞働力以外何物をも有せざる勞働者は、苟も生きんとする限り、地主資本家の「汝勞働者は汝の勞働の全生産物を擧げて吾等に交附すべし。而して汝は其中の一部分を賃銀として還附せらるゝならん」との契約を拒むことが出來ないからである。故に曰く、勞働者が其勞働産物の一部を他人に交附し得るほど勞働が生産的となり、土地及び資本の私有は、法律上勞働者の地主及び資本家に雇はれてより外に働く事を許さぬとすれば、勞働者はたゞ單に生活を支へんが爲め、否應なく勞働の全産物を土地及び資本所有者に交附し、己れはその勞働生産物の一部分を以て滿足しな

ければならぬであらう。併し乍らそれと共に勞働産物の自餘の部分は、自ら其地主及び資本家の手に止まるであらうと(p. 59)。

五

賃子は上述の如くにして成立する。次に賃子は如何にして分れて資本利潤及び地代となるか。これが Rodbertus の分配論中最も重要な問題で、此に對する彼れの解答は最も特色あるものである。

今 Rodbertus に據れば、一社會に於て生じた賃子全額は二つに分れて、農業(嚴格に云へば原生産 Rohproduktion)と製造業 Fabrikationとに歸屬するが、原生産に歸屬する賃子の中から、原生産に投ぜられた資本に對する利潤を控除した殘餘が地代を構成するのであるから、地代の法則に達する爲めには、先づ(一)一社會の賃子全額は如何なる割合で原生産と製造業とに分れ落ちるか、(二)資本利潤は如何にして定まるか、及び(Ricardoとの相違を論ずる場合に最も大切な事は)農業に歸屬する賃子から農業資本に對する利潤を控除した跡には果して何物かゝ殘るべき理由があるか

を知らねばならぬ。

是等の凡べてに對する解答の基礎として Rodbertus は勞働價値說を假定して居る。曰く、「予は……完成生產物並に生產物各部分の交換價値は、其費用勞働に等しきことを假定す。卽ち啻に完成生產物のみならず、原產物夫れ自體、及び製造物夫れ自體が此費用勞働に應じて交換せらるゝと、卽ち例へば原產物に製造產物より二倍の勞働(直接の勞働でも、道具に費やされた勞働でも)が費やされた場合には、それは二倍高價であるものと假定する。予は既に前回の書、並に Zur Erkenntnis unsrer staatswirtschaftlichen Zustände の第四章に於て、此假定が事實には一致しないで、實際の交換價値は或は此以上、或は此以下に上下することを委さに證示した。併乍ら實際の交換價値は、自然的交換價値でもあれば、正當なる交換價値でもあるところの彼の點に、少くも歸着しようとする(gravitiert)」(Z. 92 前章參照)。今一國の生產物總價値から賃銀總額を控除した殘餘、卽ち賃子全額は、農(原)產物と製造產物との價値に比例して、農產物の所有者たる地主と、製造產物の所有者たる資本家との間に分配される。卽ち例へば、農業と製造業とに各々同數の勞働者が使用せられて居

るとすれば、賃子は原產業と製造業との間に均分せられるのである。

さて製造業に歸屬する賃子は、製造業に投下せられた資本財產から生じたと認むべきものであるから、直ちに資本利潤を構成する。併し原產業に歸屬する賃子は直ちに之を地代と見る譯には行かぬ。何故と云へば、原產業にも資本を要するから、原產物に歸屬する賃子から先づ資本利潤を控除せねばならぬ。それでは何うして利潤を控除するかと云ふと、其標準となるものは製造業に歸屬する賃子と製造業に投下せられた資本財產との割合に由て定まる利潤率である。卽ち農業に投下せられた資本額に此の利潤率を乘じて、その得た結果を原產業歸屬の賃子から差引き、殘るところのものを地代と見るのである。ところで原產物の上に落ちる賃子から農業資本に對する利潤を控除して、その跡に殘るものを地代と見ると云つたが、疑問は果して其跡に殘るものがあるか何うかと云ふ事である。併し Rodbertus は必ず殘るものがあると云ふ。何故と云ふに、地主は工業資本家に比して原料を要せぬと云ふ特殊の利益を持て居るからである。卽ち工業勞働は、必ず原料の上に加へられなければならないのに、原產業に於ては、直ちに土地に勞働を

加へる。土地は無價であるのに原料には價値がある。假に双方に同量の勞働が投ぜられて、双方同額の賃子を收めても、製造業にあつては、原料價値を資本財産の一部として計算しなければならぬから、それ丈け不利益の立場に在る。從て工業資本と工業賃子との割合に依て得た利潤率を農業賃子に適用して、利潤を計算すれば、それを差引いた後に必ず殘るものがなければならぬ筈だと云ふのである。

六

此點を Rodbertus は詳細に說明する。卽ち自ら問を設けて曰く、總じて原産物の上に歸屬する賃子から資本利潤を控除した跡に、猶ほ幾許かゞ殘るべき道理があるか。又如何なる前提の下に、如何なる理由に由てこの餘剩が殘るかと。而して彼は[此問に對して Ricardo と正反對に、然り、私が(Rodbertus)上にそれから出發した前提、而して Ricardo も正に其の一切の研究の基礎として承認したところの前提、卽ち原生産物も製造産物も、共に費用勞働に應じて相交換せらるとの前提、原産物の價値は僅に其費用勞働に等しとの前提の下に於ては、原生産物の上に歸屬する賃子

の中から資本利率を控除した跡には常に何物かゞ殘らなくてはならぬ筈だと答へる。而してそれは實に次の理由からである。予は前に、賃子は原産物の價値と製造産物の價値との比例に應じて分配せられ、而して此價値は費用勞働に由て決せられるものと假定した。斯く云ふ事は、また當然次の事をも意味する。此賃子部分の大小は資本——それに對して利潤が算當せらるゝところの資本——の大小に由て決せられずして、農業上若しくは工業上の直接勞働と、道具機械の消耗の爲め間接に費された勞働とを加へたものに由て決せられる。それ故資本の中で道具と賃銀とから成立つ部分のみが、賃子部分の大小に影響を與へ得る。何となれば、道具の消耗は間接勞働の量を定め、又賃銀額は(少くも賃銀率が同一なる場合には)直接勞働と比例する。而して吾々の前提によれば、此兩者が合して生産物の價値を形成するものだからである。然るに資本中、原料價値から成立つ部分は、決して賃子に影響することがない。何となれば、此部分は決して製造業の添加生産物(Zusatzprodukt)の費用勞働に影響を與へ得ないからである。〔原料價値は新價値發生に關係なきの義〕……反之原産物の價値或は原料價値は〔出費〕としては資本財産

の一項目をなし、而して製造産物に歸屬する賃子部分は、此資本財産に對して利潤として算當せられなくてはならぬのである。然るに農業資本に於ては、此部分が缺けて居る。農業は豫め行はれた生産の結果を原料として要することがなく、全く始めて生産を行ふのである。而して、農業に於て原料に相當する財産部分と云へば、土地其物であるだらうが、此は有ゆる學說に依て無價なるものと前提せられて居るのである。

故に農業と工業とは、賃子部分の決定に關係ある兩資本部分(賃銀、道具)は共通にするけれども此に關係のない部分を共通にはしない。然るに前の兩資本部分に由て決定せられた賃子を、資本に對して算當する場合には、後者も亦資本として計算の中に入れなければならぬ。而して此部分は製造業資本にのみ存するのである。それ故原生産物並に製造産物の價値が費用勞働に依て定められ賃子は此價値に比例して原生産物と製造産物との兩所有者に分配せられるものと假定しても、卽ち原生産及び製造工業に於て生ずる賃子部分が、夫れ〳〵生産物に費やされた勞働量に比例するとしても、農業及び製造業に投下せられた資本(此資本に對し

て賃子が利潤として割當てられるのであるが)相互の比例は、投ぜられた勞働量、及び此勞働量に依て決定せられた賃子部分相互の比例と同一ではなくて、原生産物及び製造産物の上に歸する賃子部分が等大なる場合、製造資本は農業資本よりも其中に含まれて居る原料價値丈け大きいのである。而して此原料價値は、生じた賃子を利潤としてそれに算當すべき製造資本をば增大せしめはするが、利潤其者は增大せしめず、又從つて同時に、農業をも併せ支配する一般資本利潤率を下降せしむるの結果を來たすから、農業に於ては必然的に此利潤率に依て利潤を計算した跡に、猶ほ賃子の一部分が殘らなくてはならぬ筈なのである。……故に原生産物の價値が費用勞働に等しぐさへあれば(Ricardoも亦最も不利なる事情の下に造られた生産物に就て承認したやうに)一般賃子の前提條件――卽ち充分なる勞働の生産能率、及び土地資本の私有――が備はる限り、原生産物の價値は如何に小さくても、或は農業勞働の生産能率、卽ち土地の豐度は如何に低くても、地代は必ず發生しなければならぬ。……實際の交易上に於て、少くも價値は費用勞働に等しとの法則に向つての歸向が通則である限り、地代も亦通則である。地代が生じない

で資本利潤のみが生ずれば、それはRicardoの云ふやうに、本原の狀態 der ursprüngliche Zustand ではなくて、一個の變態 Abnormität に過ぎぬ。[S. 96-100]

以上が利潤及び地代の原理で、企業家利潤、利子、借地料 (Unternehmunggewinn, Zins, Pacht) は、何れも右に說明せられた資本利潤と地代とが、更に細分せられたものに外ならぬのである。

七

Ricardo の地代論の構造と Rodbertus のとの相違は、既に上述に依て明にせられた事と思ふが、更に之に加へて、資本利潤及び地代は如何なる原因に由て增減するかを見ると、Rodbertus の學說は一層よく了解されるのである。

玆に增減高低と云ふのは、資本利潤に就ては、利潤額の資本に對する百分率の增減、地代に就ては、一定面積の土地に對する地代額の增減を斥すものであるが、Rodbertus は是に就て三個の法則を立てる。

第一、一定の生產物價値、若しくは一定量勞働の生產物與へられたる場合には、更

に又同じ事を云へば、一定の國民的生產物與へられたる場合には、賃子一般の高低は、賃銀の高低と反比例し、一般勞働生產能率の高低と正比例する。賃銀低ければ賃子は益々高く、一般に勞働の生產能率高ければ、賃銀は益々低く、賃子は益々高し。

第二、與へられたる生產物價値の下で、賃子の高低が一定せる場合には、地代と資本利潤との夫れ〳〵の高低は相互に反比例し、又夫れ〳〵原生產勞働と製造勞働との生產能率の高低に反比例する。〔地代の高低は、資本利潤の高低及び原生產勞働の生產能率に反比例し、資本利潤の高低は、地代の高低及び製造勞働の生產能率に反比例するの義〕地代益々高ければ(若しくは低ければ)資本利潤益々低く(若しくは益々高く、又反對に資本利潤に高低あるとき亦同じ。原生產勞働(若しくは製造勞働)の生產能率が益々高く、若しくは益々低ければ、地代(若しくは資本利潤)は益々低く或は益々高く、又交互に資本利潤若しくは地代は益々高く、或は益々低し。

第三、資本利潤の高低は、一般生產物價値の高低と原生產物の價値及び製造產物の價値とに由て、或は一般勞働生產能率と原生產勞働能率及び製造勞働能率との關係に由て定められるが、地代の高低は更に此外、生產物價値量の大小 (Grösse der

Produktwerths)若しくは與へられたる生産能率の下で、生産に投ぜらるゝ勞働量、若しくは生産力 Produktivkraft 量に由て定まる(p. 115—117)。

第一の法則は殆ど説明を要しない。賃子は國民所得から賃銀を控除した殘額を以て成るのであるから、賃銀の高低とその殘額とが、反對の方向に動くのは當然である。而してRodbertusも多くの經濟學者と共に、賃銀は一般に勞働者の生活必要費額に歸着するものと認めて居つたから(p. 118)、勞働の生産能率が發達すれば、する程、勞働者以外の者の手に歸すべき部分(即ち賃子)は增大するのが當然である。次に賃子は前述の如く、原生産物の價値と製造産物の價値とに比例して、此二者の間に分配せられるのであるから、原産物の價値が高ければ、それ丈け原産業に歸屬する賃子は增加して、製造業に歸屬する部分は減少する。而して農産物の價値が騰貴すれば、それは製造業に取ては原料の騰貴を意味するのであるから、從てそれ丈け利潤率の下降することを意味し、利潤率の下降は、農業資本に對して算當せらるべき利潤の減少、從てそれが控除せられた跡に殘るべき地代の增加を意味する。然るに前提に依て、價値は勞働費用に由て定まるのであるから、勞働能率の增進に

由て、一定單位量貨物に投ぜらるゝ勞働量が減少すれば、價値は下落する。即ち製造業勞働の生産能率が增進すれば、農業に歸屬する賃子、從て地代は增加し、その反對に農業勞働の能率が增進すれば利潤は騰貴するのである。

さて以上は生産能率の增減から生ずる地代、利潤の高低であるが、最後に生産能率には全く變化がなくて、たゞ生産に投ぜらるゝ勞働若しくは生産力絶對量が增加したら、具體的に云へば勞働者人口が增加したら、何う云ふ結果が生ずるかと云ふ問題が殘つて、第三の法則は是に答へるものである。今迄よりも多量の勞働が生産に投ぜられるのであるから、生産物の價値額は無論增加する。併し生産能率には全然何等の變化がないと云ふ假定であるから、賃銀と賃子との割合は前と變らない。賃子が資本利潤と地代とに分れる割合も變らない。たゞ利潤及び地代の絶對額が增加することは明かである。ところで前述の如く、利潤の高低とは利潤額の資本額に對する割合の高低を謂ふのであるとすれば、生産能率には全く變化なしとの前提であるから、此割合も變はる筈がない。利潤絶對額が增加したのと同じ割合で全資本額も增加して居るのである。然るに地代になると、其高低は

地代額の一定面積に對する關係を謂ふのであるが、前述の如く、勞働量の增加に由て地代絕對額は增加しても、それが割當てらるべき土地面積は增加しないのであるから、地代の高低は變はつて來なければならぬ道理である。地代の高低は資本利潤とは違つて、更に別の一變動原因を有することになるのである。卽ちRodbertusは單に人口增加に由る地代の騰貴を、農產物の價値の騰貴を俟たずして(卽ち土地生產力の減退を條件とせずして)說明するのである(S. 117—128)。

以上Rodbertusは、土地生產力の優劣を度外して議論を進めて來たが、彼れの見るところに依れば、土地生產力に差等のある事實に逢つても、右の理論は困難を感じない。土地生產力の差等は、地代に差等を生ぜしむる原因にはなる。併し抑も地代その者を發生せしめる原因にはならぬと云ふのである。地味の差等が地代其者を發生せしめるのは、最後に耕やされた土地が、資本利潤のみを生じて地代を生じない場合に限るのであるが、苟も土地產物が投下勞働量に應じて價値を有する限り、斯る場合は起り得べき筈がないと云ふのである(S. 143—5)。

八

Rodbertusの地代論は、その前提を承認する以上は當を得たものと云はなければならぬ。苟も百人の勞働を費やした農產物が、同じく百人の勞働を費やした製造工業品と同價値を有するものとすれば、此の同價値のものを造る爲めに、工業家は農業家よりも原料を要する丈け、多くの資本を支出しなければならぬのであるから(道具の消耗は姑らく度外す)、工業に投下せられた資本は、農業に投下せられた資本よりも、必ず低い割合の報酬を受くべき道理である。從つて必ずその差額たる地代が殘るべき筈である。此處までのところでは、吾々はRodbertusの論究に誤謬のあることを發見し得ない。併し此結論が正しいとすると、苟も資本が土地に投ぜられた以上は、其土地が如何に磽确不毛の土地であつても、其資本は必ず普通利潤以上の賃子を生ずるものだと云はなければならぬ。併し何人も此事を承認するに躊躇せぬものはあるまい。さうすると吾々が今迄承認して來た論究の徑路中の何處かに遺漏があつたのでなくてはならぬ。その遺漏は何處にあつたのであ

らうか。

茲で吾々が第一に起し得る疑問は「工業に投下せられた資本は農業に投下せられた資本よりも、必ず低い割合の報酬を受くべき道理である」ならば、何故資本家は資本を工業に投ずることを罷めて、之を農業に移さないかと云ふ事である。勿論資本家がそれをしないと云ふ道理はない。そこで資本が工業から流出して、農業に流入するものとする。而して此流出入の結果は何であるかと云ふと、勿論工業産物の供給が減少して、農産物の供給が増加すると云ふ事の外にはない。然らば此流出入は何の點に到つて止まるか。それは云ふ迄もなく、資本が新たに農業に流入しても、普通利潤以上の賃子を收めることが出來なくなる點、即ち最後に土地に投ぜられた資本が、資本利潤は生ずるが、地代は生じなくなつた點である。勿論此點の到達には遲速があつて、肥沃な土地が充分存在するか、又は收穫遞減法則の作用が顯はれない場合には、容易に此點に到達せず優良地が缺乏して居るか、或は收穫遞減法則の作用が著しく現はれて居る場合には、その反對の結果がある。何れにしても、一方では工業品産額減少の爲めに其價格が騰貴し(從て利潤率を高め)、

他方に於ては、或は農産物の供給增加に由て其價格が低落するか、或は(收穫遞減法則の作用現はれ、若しくは優良地の供給に限りある場合)農業生産費の昂騰を來たし(從て農業に歸屬する賃子と、農業資本に對する利潤との差額が消滅し)た結果として、資本投下の見地から見た農工兩業の利益は均衡に歸する。即ちRicardoの云ふやうに、最後に土地に投ぜられた資本は、利潤のみを生じて地代を生じないのである。

斯うして見ると、Rodbertusの地代論は容易く破れるやうに思はれるが、彼れは此批評を豫期しなかつたのではない。即ち曰く、若しもRicardoが自由に占有し得べき土地の存する場合には、原産物の價格が低落して、資本利潤以上に賃子を剩さなくなる迄、新資本が農業に繼續投下せらるゝから、第一級の土地のみが、耕やさるゝ限り、地代は生じ得ないと云ふことを、資本利潤平均の原則からして證明しようとするならば、而して然る後に、次級地の耕作を可能ならしめる農産物の價値騰貴に由て、地代の成立を說明しようとするならば、それは最初に彼の競爭に依て農産物の價値が其正常價値以下に引下げられたと云ふ前提、即ち其費用勞働に等しき價

値を持たなかつたと云ふ前提の下に於てのみ正しい。[それ故に Ricardo の地代論は、或は彼れの理論全體の根本原則たる、生産物は何れも費やされたる勞働に應じて價値を有すとの命題と相容れぬか……、或は此原則を固執すれば、彼れの地代論が謬つて居るか、何れかである。而して此理論(地代理論)は上に私が試みたより以外の方法では立てやうがないのである]と(p. 173)。

Rodbertus は既に利潤率平均の事實を認めて居る(p. 94)。それでは此と相容れない勞働價値說の假定を何故固執しなければならないのか。彼れは既に利潤率の平均と、財は費用勞働量に應じて交換せらるとの假定との相容れざることを知つて、製造業に就ては、勞働價値說に重要なる修正を加へて[個々の場合、卽ち各企業、並びに分業の各段階に於て、生産物がそれに具體されて居る勞働量に精確に比例して交換せられると云ふ譯には行かぬ]而して其理由の一は[資本利潤が一切の企業を通じて少くも平均する傾向を有するから]だと云ひ(Zur Erkenntnis, p. 130)更に例を設けて、假に一財の生産が四つの階段に分れ、(例へば紡績、織物、裁縫と云ふやうに)各段階が獨立した企業となり、何れも同量の勞働を要するものと想像せよ。然る

ときは、若しも此各段階に於ける價値が投下勞働量と一致するものならば、各段階に於ける特殊生産物の價値も、亦各段階に於ける生産物の價値と等しいであらう。然し乍ら最後の企業家は、第一第二の企業家より多くの勞働を雇傭する事はないにも拘らず、より多くの利潤を擧げなければならぬ。同じ理に由て、第二の企業家はより少なき利潤を數へなければなるまい。何となれば、最後の企業に於ては、必要なる原料が第二の企業に於けるよりも多量の勞働の生産物である爲め、それ丈け高い價値を有するだらうからである。然るに若しも兩企業の各々の生産物が、正に其費用勞働に應じて賣られたならば、利潤として殘る價値餘剩 Wertrest は最後の企業に於ては餘りに低く、第二の企業に於ては餘りに高かるべき筈である。ところが競爭は均一利潤 gleichmässige Gewinne を要求するから、そこで一貨物の費用勞働に等しき價値は資本賃子を生ぜしむるに足るとの命題は、利潤平均の法則の結果として修正されなければならぬ(Das Kapital p. 11-12)と記して居るのである。

然るに利潤平均の作用は原産業と製造業との間には及ばぬと云ふ道理がない。既にこれが及ぶとすれば、農産物は其費用勞働に應じて價値を得ないで、正常價値(ノルマルヴェルト)

以下で賣れるのが當然である。農産物の市價がその自然價値に歸着しようとすることはないのである。Rodbertus の地代論の前提は支持することが出來ない。それから演釋せられた結論の支持することが出來ないのは勿論である。

九

Rodbertus は、Ricardo の地代論は其基礎をなす勞働價値說と相容れぬ。地代論が正しければ、勞働價値說は放棄しなければならぬし、勞働價値說が正しければ、地代論を棄てゝ Rodbertus 自身の學說を採用するの外はないと、述べて居る。是は其通りで、Ricardo の價値論なるものが Rodbertus の假定したやうな、嚴格な意味に於ける勞働價値說であるならば、彼れはまことに是を捨てるか、地代論を棄てるか、何れにかしなくてはならぬのである。併し Ricardo の勞働價値說なるものは、それほど明確嚴密なものではない。彼れがその價値論の章の末段に於て、所謂勞働價値說に非常に重要な修正を加へ爲めに果して之を勞働價値說と稱する事の當否如何をさへ疑はしめるに至つた事は姑らく措いても、(拙著「經濟學說と社會思想」第五八頁

以下、本書緒論參照)其修正を加へられない前の價値論に就ても、吾々が安んじて斷言し得る事は、Ricardo に據れば、勞働の投下に由て任意に增加し得る「貨物の交換價値若しくは一貨物の幾許が他の貨物と交換せらるべきやを決定する規則(rule)は、殆ど一に almost exclusively その各々に投ぜられた勞働の相對量に由て決せられ」、一貨物の生產に要する勞働量が增加すれば、その物の價値は增加し、これが減少すれば價値も亦減少すると云ふ事以上には出てゐない。Rodbertus の地代論を承認する爲めには、一定量農業勞働の產物と同量工業勞働の產物とが同價値である事を承認しなければならぬのであるが、固より異種の勞働の分量を比較するには、單に勞働時間のみを取て比較する譯には行かないので、必ず一種の勞働の幾時間は他の種の勞働の幾時間に相當するものとの換算を行はなければならぬ。然るに Ricardo は極めて輕く此問題に觸れて、その儘其表面を通過して居る(ch I. sec. 2)。卽ち Ricardo の價値說は、Rodbertus の前提となつて居るやうな、嚴密な勞働價値說ではないのであるから、此點に於て左まで甚しく矛盾の咎めを受けないでも濟むのではないかと思ふ。單に農產物の價値は穀物生產の困難が增して、勞働投下を要するこ

と多ければ騰貴し、其反對の事あれば下落すといふ丈けの事ならば、決して彼れの地代論と相容れないものではないのである。

私は別の機會に於て「Rodbertus の勞働價値說と平均利潤率の問題」に關する一文を公にしたが(本書前章收錄)彼れの地代論に對する批評も、要するに此議論の或意味に於ける擴充に外ならぬものである。(「三田學會雜誌」第十四卷第十、第十一號發表)

第三章　ロオドベルトスの「資本論」

一

Rodbertus の價値並びに分配理論に就ては、既に前二章に於て其大要を記述し、且つこれに多少の論評を加へ試みた。今本章の專ら主題とするところは、遺稿「資本論」中に於ける彼の恐慌及び資本學說である。此書は著者の死後九年にして、一八八四年 A. Wagner の委托を受けた Theophil Kozak の手で刊行せられたもので、題して Das Kapital. Vierter socialer Brief an von Kirchmann von Dr. Carl Rodbertus-Jagetzow. Herausgegeben von Theophil Kozak. と云ふ。標題の示す通り、von Kirchmann 宛の第四公開狀として書かれ、一八五〇ー五一年に公にせられた、第一第二第三書簡の續篇となるべきものである。

既述の如く(前章第七九頁以下) Rodbertus 自ら記すところに依れば、彼れ Kirchmann とは次の三點に於て見解を異にする。

(一) v. Kirchmannは農業上の勞働生産率(Produktivität)は益々減退し、食料原料の價格は益々騰貴し、從て生産物に對する資本家及勞働者の分前が益々減少し、又從て最後に其所得の大部分が食料原料を以て成る階級の貧窮に陷るべき事を主張するのに對して、Rodbertusは農業勞働の生産率の增進を主張する。假りに農産物の價格騰貴と云ふ事實が起るとすれば、それを別の原因に由て說明し、農業地代の騰貴なる事實を全く別の原因に歸する。而して一般に賃子Rente(卽ち資本利潤並に地代)は勞働賃銀を犧牲にして增加するもので、勞働者階級の貧窮は食料原料の騰貴に由るものではなくて、生産物に對する彼等の分前の減少に由るものなる事、而して此分前の減少は正に生産物價格の低廉と相伴つて起るものなる事を主張する。

(二) v. Kirchmannが商業恐慌の原因は、勞働階級の分前が僅少にして、資本家の過大なる分前に對して、充分の購買者たること能はざるところに存する事を主張するのに對して、Rodbertusは、原因を分前の僅少に求めずして、生産率の增進に伴ふ分前の減少に求め、而して假に此分前が現在の如く僅少であつても、その割合が一定して居りさへすれば恐慌は起らぬであらうし、又此分前が如何に大でも、それが生産

率の增進と共に減少すれば、依然恐慌は起るべきことを主張する。

(三) 最後にRodbertusは、交易が自由に放置せらるゝところでは、勞働階級は勞働生産率增進の果實から除外せらるゝことを主張し、社會をこれより生ずる病患から救治するには、此狀態を改めて、果實の增加に對する均霑を保障するの外なきことを認めるに對して、v. KirchmannはRodbertusが希望することは既に今日實現せられて居り、勞働階級は既に有産階級と共に、生産率增進の恩澤に均しく浴して居ると主張するのである。

Rodbertusは此三問題中の第一を其第三書簡中で說明し、第三の問題には、これも同じく彼れの死後一八八五年、Kozakの助力を得てWagnerが刊行したZur Beleuchtung der sozialen Frage II. Teilを充て、而してDas Kapitalに於ては第二の問題に解答を與へようとしたのである。彼れは此書に於てv. Kirchmannとの意見の相違を段々に推し究はめて行つて、結局恐慌は果して資本家の貯蓄(或は節約Sparen)の爲めに起るか何うかと云ふ問題に逢着する。而して節約の概念其者を明かにする爲め、彼は進んで資本の本質を論究しようとした。是より先き一八六七年Marxの資本論が公

にせられたが、Rodbertus に從へば、此書には部分的卓見と、甚しき誤謬とが同時に含まれてゐた。「一般に此の Marx の書は、資本に關する研究と云ふよりも、寧ろ今日の資本形態に對する論難である。此を彼は資本其者と混同し、而して其處から彼れの誤謬は生ずる」のである。(Briefe und socialpolitische Aufsätze von Dr. Carl Rodbertus-Jgetzow. Herausgegeben von Dr. Rudolph Meyer. S. 111 ff.)而して「資本概念は、人が其眞內容を三つの異つた社會狀態 (Weltzustaende)、即ち未だ人間所有の行はれた古代、土地及び資本私有の行はれて居る近世、及び所得所有のみが行はるゝ理想的狀態に照して點檢せざる限り、之を明確にすることは出來ぬ。それ故にこそ自分は、一切の關係に於ける資本內容を古代に就ても亦知らんが爲め、過去十年間に於て、古代經濟の研究に突進した。凡そ人は比較に依てのみ學び得る。予の『資本論』に於て自分は此根本思想を追尋するのである」と彼れは云つて居る(a. a. O. S. 99 ff.)?

二

恐慌の原因は勞働階級所得分の僅少其者に在るのではなくて、全國民生產物に

對する勞働階級得分が、勞働生產力の增進に連れて減少することに存すると云ふ、Rodbertus の學說を了解するには、先づ其反對論者たる v. Kirchmann の說を知る必要がある。v. Kirchmann は一例を假設して自說を證明しようとする。

玆に一の村があつて、村民は其の一切の欲望を凡べて村內の生產に依て充足して居る。而して其生產には(一)衣服(二)食物、燈火、燃料(三)家屋、家具、道具の生產の三種があつて、此三種の生產業は、各々一人の企業家と三百人の勞働者とから成立つて居る。而して勞働者は、何れの場合にも、其年產物の半分を賃銀として受け、殘る半分は、資本に對する利子並に企業利潤として企業家の手に收められるものと、何れも假定する。即ち此村には九百三人の住民があつて、自給自足を行つて居る。衣服生產業の企業家は、その三百人を以て全住民(九百三人)の爲めに衣服を供給する事が出來、食料燃料燈火生產の企業家も、亦その三百人の勞働者を以て、九百三人の爲めに是等の必要物を供給する事が出來る。同じ事は家屋家具道具等の製作を宰る企業家に就ても云はれ得る。さうすると此村では、全住民が幸福に生活すべき、凡べての條件が備はつて居る筈である。然るに少しく時日を經過して見ると、

事態は全く豫期に反して居る事が明になる。それは、正に今日の現實世界に於けると同じく、九百人の勞働者は窮乏に困しみ、三人の企業家は、其倉庫に充滿する賣り捌けない生産物の爲めに惱まされると云ふ事實が起つて來るからである。此事實は何の原因から生ずるかと云へば、それは生産物が全ての者に均等に分配せられずして、企業家は利子及び利潤として全生産物の半分を收め、僅かに殘る半分を勞働者に分與するからである。卽ちこれが爲め、例へば衣服製造勞働者は、其生産物を以て、僅かに他の二業の生産物の二分一を丈けしか購ふことが出來ぬ。それと同時に企業家は、其の手に收めた殘る二分一を賣捌くことが出來ぬ。何となれば、勞働者は誰れも最早それと交換すべき生産物を持つて居ないからである。企業家は其貯藏品を如何にすべきかを知らず、勞働者は其飢餓と欲乏とを如何にすべきかを知らないのである。

要するに此の窮乏と過剩との併存は、分配の不平等から生ずる。

然し乍ら此假定は、現實の世界とは二つの點に於て相違して居る。卽ち此村には奢侈と外國貿易とが行はれてゐないことがそれである。そこで、前の假定では

生活必需品のみが生産された爲めに、その半分を利子として收得する企業家は、それを自ら消費することが出來ず、又これを消費し得る九百人の勞働者には、それを購ふべき資力がないと云ふ結果に陷つたが、今全勞働者の半數をして、必需品の代りに贅澤品を生産せしめたならば、企業家の手許に於ける不捌貨物の堆積と云ふ事實は、消滅すべき筈と考へられる。そこで從來三百人が從事して居た衣服生産業には、僅かに百五十人丈けを當らせ、殘る百五十人とそれに相當する資本とは、これを贅澤物の生産に轉用し、他の二生産業に於ても同じ事が行はれたものとする。さうすると、九百人の勞働者が窮乏の生活を營むことは前の場合と少しも變りはないが、今度新たに四百五十人の勞働者が生産する贅澤品は、三人の企業家が自ら消費し得るものであるから、彼等は最早不捌貨物の堆積の爲め苦しむには及ばないのである(とv. Kirchmannは謂ふ)。

これに對しては現實社會には既に奢侈が行はれて居るのに、それにも拘らず販路壅塞、商業恐慌の起る事實があるのは何故であるかとの疑問が起る。v. Kirchmannは之に答へるに、それはまだ奢侈が不充分だからweil noch zu wenig Luxus vorhanden ist

を以てするのである。彼れは此理を再びその假設例に依て說明しようとする。今企業家が其收入を贅澤品の爲めに消費し盡さずして、その一部分を生產的に消費したならば、卽ち例へば、三人の企業家が、僅かに百人の勞働者の生產物を自ら消費するに止め、殘る三百五十人の勞働力を、その使用資本と共に新生產業の起設に投じたならば何うなるかと云ふに、二の場合が考へられる。第一はその新たに起こす生產業が必需品を生產する場合、第二は奢侈品を生產する場合である。然るに、第一の場合は、結局上記第一の場合と同じ事に歸着する。卽ちその第一年は、新事業起設の準備に費やされるが、第二年には、三百五十人の勞働者が新たに生活必需品を生產し始める。「ところが九百人の勞働者はその賃銀の不足の爲めに、從來の職業に停まつて居る、もとの四百五十人の勞働者の生產物を丈けしか買ふ事が出來ぬ。今この三百五十人が提供するものは、彼等が如何にそれを消費し度くても、彼等には手が屆かぬ、彼等はそれを買ふべき資力を持たないのである。併し乍ら三人の企業家は、これを相互に買取ることが出來ぬ。何となれば是等の通常貨物(必需品)を彼等は自ら消費する事が出來ぬからである」。然らば新に奢侈品生產

業が起こされた場合は何うかと云ふに、此場合にも矢張り、生產過剩に陷ることが避け得られない。何となれば新たに生產せられた奢侈品は、三人の企業家相互の外にこれを買取り得るものはないが、その企業家は節約を始めて、百人の勞働者の生產物以外、何物をも消費しない約束になつて居るからである。經濟學者の賞揚措かざる節約又は生產的消費は、社會の狀態を毫末も改善することが出來ない。「村民は依然として斯う云ふヂレマに面して居る。三人の企業家は其收入を最後の一錢まで、各種の幸福及び贅澤に浪費しなければならぬか、(其場合には勞働者は少くも皆乏しい生活ではあるが兎に角生活することが出來る)或は此奢侈が廢せられ、節約が行はれると共に、販賣が杜絕して、商品が堆積し、勞働者が職を失ひ、又從つて生計の途を失ふか、何れかである」(Das Kapital, S. 35-45)是がv. Kirchmannの恐慌說の要旨である。

三

Rodbertusは之を評して謂ふのにv. Kirchmannの假設例は實際の事實に適合して居

ない。元來恐慌に於ては、勞働者の窮乏と、販賣の杜絶との二事實が起るが、v. Kirchmannの假設例によれば、第一に、實際の事實とは逆つて、勞働者の窮乏は販路の壅塞とは無關係に存在するし、第二に、販路の壅塞はv. Kirchmannが自ら主張する樣に、分配の不平等からは生じないで、企業家の誤算から起つて居ると謂ふのである。實際の恐慌に於ては、勞働階級の困厄は、販賣の杜絶、企業經營の縮小若しくは停止と云ふことから起るので、賃銀の不足から起るのではない。恐慌に先だつては、却て比較的賃銀の騰貴するのが通則である。然るに上記の假設例に於ては、勞働者は始めから、賃銀の低率なるが爲めに窮乏して居るのであるから、「假令販路壅塞が罷んでも、卽ち資本家が不要なる尋常貨物の代りに、他の彼等自ら使用し得べき貨物を生産せしめても、窮厄は依然繼續するであらう。何となれば、是に由て生産物に對する勞働者の得分の僅少なることは猶ほ變らないからである」(p. 45-6)。

次に假設例では、販路の壅塞は所謂「有効需要」以上に貨物が生産せられることから起つて居る。卽ち貨物が「一方(勞働者)に就ては、一定の購買力に依て局限せられた需要以上、他方(企業家)に就ては、生理的需要以上」に生産せらるゝことから生じて

居る。併し乍らRodbertusの見るところに從へば、これは企業家の迂愚若しくは過失から起つた事で、勞働者所得分の僅少から起つたものでは決してない。勞働者の所得が如何に乏しくても、企業家が最早何人も買ふことが出來ぬか、又は欲せぬ尋常貨物を造る代りに、彼等自身の使用し得るやうな貨物を造りさへすれば、販路壅塞は起らない。其反對に、勞働者所得は如何に大きくても、企業家が同じ迂愚過失を犯して、需要(有効需要)のない貨物を生産させる限りは、販賣杜絶は依然として起るのである。卽ち假設例では「勞働者の窮厄も今日の商業恐慌に於けるが如く、販路閉塞からは生ぜず、又企業家の販路壅塞も貴下v. Kirchmannの主張するやうに、賃銀の乏しき事からは起らぬ」(p. 50)のである。

さうすると販路壅塞は結局「企業家の迂愚過失」から惹起されると云ふ事に歸着するか。Rodbertusはそれ丈けの說明では滿足しない。勿論彼れと雖も、今日生産過剩が此原因から生ずることがあるのを否認するのではない。所謂「迂愚過失」とは、企業家の需要誤認を指すに外ならぬものであるが、それは國民資本が私企業家の手に在つて、而かも市場の範圍は益々擴大し、欲望、産業の種類の增加し、生産力の

發達する事現在の如くなる限りは之を避けることが出來ぬ事は Rodbertus も認めて居る。これを防ぐには、今日の財産制度を根本的に改めて、一切の生産基本(Produktivfonds)を一個の社會的行政機關の手に統一し、其をして凡ての社會的並に個人的欲望の豫算を編成し、それに適應して土地資本を生産上に利用せしむるの外に途がないと謂ふ(p. 51)點に於ては、彼れも多くの社會主義者と同意見である。たゞ更に此の「企業家の迂愚過失」の外に、もつと深い必然的な原因があることを認めて居るのが Rodbertus の恐慌說の特色だと云つて好い。而して其原因と謂ふのは、「勞働生産力の增進に連れて、勞働階級の賃銀の國民生産物に對する分前は益々減少する」一事である。

各人の貨物需要力、卽ちその貨物の生産を促がし、造られた貨物に販路を供する程度は、(Rodbertus 謂ふ)彼れが造るところの生産物量、若しくは彼の生産能率に依ては定まらないで、彼れに對する割當額(Grösse seiner Abfindung)、卽ち彼れが生産物の價値から受ける分前に由て定まる。而して各個人に就て云はれることは、又全階級に就ても云はれ得る。此割當て、此分前が大なれば、各人が需要に對し、從て又生産

に對して及ぼし得る力は强いのである。ところで企業家は個々の生産の程度を此分前の大小に應じて定めなければならぬ。而して個々の生産の程度が、現在の分前と一致すれば、企業家は其任務を果して、國民的生産は國民的分配に依て是認せられたる(資格を與へられたる)國民的欲望に完全に適合するのである(p. 53)。併し企業家は彼の分前の限界內で止まらうとしても、社會の大多數、卽ち勞働者の受ける分前その者が、段々に目に見えぬ、併乍ら不可抗なる力を以て減退したならば何うするか。勞働の生産力は絕えず增しつゝあるが、此增進と歩を共にして、社會大多數員の受ける分前が、常に益々減退し、斯して何等の過失なくして、企業家脚下の地が崩壞したならば何うするか。Rodbertus は此事の必至を認めて居る。而して其結果は、販賣杜絕の外にないと云ふのである。從來の經濟學者は各人の所得を一定貨幣額(例へば一日 1 Thaler)を以て云ひ現はされて居る固定量と考へ、而して勞働の生産力が增進すれば、生産物の價値が低廉になつて同じ一 Thaler の所得內容が豐富になる丈けの事だと安心して居るやうであるが、今日の自由交易の制度の下に於ては、貨物が低廉になると同じ割合を以て賃銀率は低減して、1 Thaler の

ものは $\frac{3}{4}$ Thaler, $\frac{1}{2}$ Thaler 若しくは $\frac{1}{4}$ Thaler となる。從て大多數者は、生產力の增進にも拘らず、大體從來と同量の生產物を消費し、凡そ同數の欲望を滿たし得るに過ぎぬ。そこで資本家は單に今迄の分前額に適應して、生產の種類分量を決定して居るのに、常に今迄の分前以上に生產すると云ふ結果に陷るのである。「故に今日の商業恐慌は、一言にして云へば、社會の何れかの階級の罪ではなくて、自由に放置せられた交易に特有不可變の隨伴物である。それは生產力は如何に增進しても、國民生產物に對する分前の、賃銀より成立つ部分は、漸次同じ割合を以て下降すると云ふ、現國民經濟組織の著しき缺陷に由て惹起される慢性的疾患の發作である。それ故に不斷の生產力增進と共に、現社會に於ける不斷の不滿足が生じ、販賣困難並びに勞働と窮厄との不斷の爭鬪なる慢性的疾患が起こる。さて此困難が二三年愚圖々々曳ずつて來ると、恐慌が破裂して、現在產業の生產力が個々人の分前に對して甚しく權衡を失し、其結果として、斯る發作の劇しさを抑へ、單に交易を元の慢性的虛弱の狀態に復せしむる爲めに、勞働者に於ける幾月の欲乏と饑餓と、資本家に於ける其資本大部分の破壞とを必要とするのである。」(P. 62)

畢竟恐慌は生產と需要との不適合から起るものには違ひないが、Rodbertus は是を企業家の「迂愚過失」と云ふやうな、謂はゞ偶然の原因に歸せずして、勞働生產力の增進に伴ふ勞働階級得分の減少なる事實がある以上、必然避け難きものであると說明したのである。又 v. Kirchmann は、恐慌が分配の現在の不平等から起ると云ふ意見であるが、併し勞働者の賃銀が乏しくても、勞働力が奢侈品に向けられさへすれば、之を避け得る事は彼れも容認して居るのであるから、販賣杜絕、從て恐慌は不平等なる分配から必然的に起るものとは云ふことが出來ぬ。此點に於ては Rodbertus の批評を是認しない譯には行かぬのである。

四

恐慌は奢侈的生產に依て避けることが出來る。然るにも拘らず、現實世界に於て恐慌の起るのは何故であるかと云へば、それは上述の通り、資本家が儉約なるが爲めであると云ふのが v. Kirchmann の說である。併し Rodbertus の見るところを以てすれば、上述の假設例に於て、企業家が所謂「節約」を行ふ場合を見れば、それは畢竟

需要のない貨物を生産すると云ふ最初の[迂愚過失]を繰返して居るに過ぎない。即ち奢侈を廢して新生産業を起し、それに依て新たに尋常貨物を生産する場合は勿論、態々奢侈を廢して置きながら、新生産業を起して奢侈品を生産せしめる場合に於ても、共に企業家は、何人も欲することなき貨物を生産せしめて居るのである。苟も企業家が態々需要のない貨物を生産せしめると云ふ事を敢てする以上は、國民生産物が、もつと勞働者に有利に分配せられたところで、依然販路は壅塞せられざるを得ぬ。[此種の販路杜絶に對しては一般に何等の手段もあり得ぬ]のである。併しそれよりも重要なのは、假設例に於ける[貯蓄]が、本來の貯蓄になつて居ない事である。今日その資本利潤の中から貯蓄するものは、現在の資本を他に轉用し、又は全くこれを破壞することなくして、必ずその資本財產Kapitalvermögen を增殖する。舊來の資本からは今迄通り利潤を得つゝ、猶ほ其上に新なる利潤を收めようとするのである。成程投資の途を誤つて、新なる利潤を收めることには成功しないかも知れぬが、併し舊來の資本丈けは、少くとも之を現狀の儘に維持しようとするのである。然るにv. Kirchmann の村で貯蓄と云ふ時には、何等の資本增加はなくて、た

だ(第一の、通常貨物が生産せらるゝ場合には、從來の資本の一部が、從來の生産から引出されて新生産業に投下せられ、而して需要者のない通常貨物の生産に充用せられると云ふに過ぎない。v. Kirchmann は明かに三人の企業家は僅かに百人の勞働者の生産物のみを消費するに止め、[殘る三百五十人の勞働者の勞働力を、彼等が使用する資本と共に]新生産業に於て投用すると記して居るのである。(v. Kirchmann は[殘る三百五十人の勞働者の勞働力を、彼等が使用する資本と共に、新生産業起設の爲めに zur Anlegung neuer Produktions-geschäfte 投用する]と記して居るのを、Rodbertus は勞働力と資本とを直ちに新生産業に轉用するものと解釋して居るらしい。彼と此との相違は重要だと認められるが、併し今は本文に從つて、彼れの主張のみを紹介する。)これ丈けの事ならば、たゞ三人の資本家が、從來の生産業から生ずる利潤を棄てゝ、これを他に求めると云ふに過ぎない。又第二の、新設生産業が奢侈品の生産に當る場合を見れば、それは奢侈品の生産が繼續せられ、たゞ企業家が贅澤家から禁欲家に變つた爲めに、これを消費せずして放置すると云ふに過ぎない。何れの場合に於ても v. Kirchmann の[村の貯蓄者は現社會の貯蓄者とは遙かに異な

るのである」(p. 45-70)

そこで貯蓄の本質奈何なる問題からRodbertusは資本の本質其者の論究に進むのである。

五

抑も資本は(一)何を以て成るか。(二)如何にして發生し、如何にして增加するか。(三)如何にして再生產せらるゝか。(四)所得に對して如何なる關係に立つか。

Rodbertusの資本論は此四問に答へようとするものである。而してそれを行ふに方つて彼れが重きを措くところは、人間經濟生活の、一定の法制的關係の備はるを俟て、其條件の下に於てのみ考へらるべき可變の一面と、特定の法制的關係を離れて、直ちに人間對自然の關係に於て考へらるべき恒久の一面とを區別する事にある。後年彼れの影響を受けてAdolf Wagnerの用ゐた術語に所謂社會的若しくは歷史的法律的觀察と純經濟的觀察との區別である(拙著「經濟學說と社會思想」一七二頁以下參照)。而して之れを資本に適用すれば、土地及び資本私有を本質とす

るところの、現行法制の下に於てのみ考へらるべき資本財產(Kapitalvermoegen oder Kapitaleigentum)又は私的資本(Privatkapital)と、特定の法制には關係なく、人間對自然の關係に於て直ちに考へらるべき資本當體(Kapital an sich)資本物體(Kapitalgegenstände)若しくは國民資本(Nationalkapital)との區別となる。Rodbertusの所見によれば、從來經濟學者の誤謬は此二者を混同して、現行法制の下に於てのみ必要なる私的資本を資本當體と謬り認め、例へば資本は貯蓄に由つて生ずと云ふが如き、私的資本に就てのみ云はるべきことを、直ちに資本其者に適用しようとする所から生ずる。

「經濟學者は自然的生產行程を、土地並に資本所有法に依て條件附けられたる、社會的生產行程と混同若しくは混合し、其結果として、實際經濟世界には全く似寄りのものを有せざる一の資本概念に到達した」のである(p. 230)。一方資本當體は社會制度の如何に拘らず存在し、是に就ては、その如何なる法制的關係の下に在るかを問はず、上記の四問に對して常に同一解答が與へられるのである。

此事を明にする爲めには、現在經濟制度の下に於ける資本と、他の經濟制度の下に於ける資本とを取つて比較しなければならぬ。而して更に其れが爲めには、先

づ夫れ〳〵異なる經濟制度の下に於て、生産分配が如何に行はれるか、其等の間に如何なる共通點と相違點とがあるかを知らなければならぬ。其處で Rodbertus は先づ分業なき自給自足の孤立經濟 isolierte Wirtschaft と、分業を俟つて始めて生ずる社會經濟 Gesellschaftswirtschaft 若しくは國家經濟 Staatswirtschaft とを分ち、更に後者を土地並に資本の私有なき(卽ち社會主義)國家經濟と、土地資本の私有行はるゝ(卽ち現在)國家經濟との二に區別し、主として生産及び分配上に於ける此の三經濟制度間の原則的相違を詳論する。而して此點に於ける Rodbertus の說明は單に其資本論に入る爲めの準備として許りでなく、併せて彼れが社會主義主張の論據を說明するものとして、充分傾聽に値するのである。

六

先づ孤立經濟と國家經濟一般との差別に就て云へば、孤立經濟とは一個人が全く他人と交渉なく自給自足を行ふ經濟の謂であるから、これが分業並に分業を前提とする交換と相容れぬものである事は論を俟たぬ。「孤立經濟に於ては、經濟的

概念、經濟的發達なるものはあり得るけれども、國民經濟的概念、並びに國民經濟的發達なるものはあり得ない。……國民經濟は分業を俟て始めて生じ、而して分業は正に孤立經濟を終息せしめる」のである。然るに從來經濟學者は、分業を論ずるに當つては、各人が一生産若しくは一生産中の一作業のみに力を集中すること、及び其結果たる生産力の增進の方面にのみ著眼してゐたが、「分業の本質は其個人主義に在るのではなくて、正に其の共同主義 Kommunismus に在る。分業は正に勞働共同 Gemeinschaft der Arbeit と呼ばるべきものである。同時に「共同勞働に依て造出せる生産物の分配」と云ふ事が必然これに伴ふ。故に此意味に於て分業は、普通留針の製造が云々せらるゝ場合に於けるよりも、一層高き或物である。「分業は、此意味に於て、寧ろ道德並に法律が倫理的に、言語と民族意識とが精神的に、それを行ふと同樣に、個人の集合から社會を造る物質的紐帶である。」各人は全員の爲めに、全員は各人の爲めに働くと云ふ共同連帶の原則は、卽ち分業の最終原理である。

さて此の分業以前の經濟と、以後の經濟とを比較して見ると、第一に孤立經濟にも國家經濟にも共通であつて、而かも、分業の有無に由て其趣を異にする幾多の概

念が注目される。慾望、生産、生産物、資本、所得等の諸概念は卽ち是である。卽ち孤立經濟にも、慾望、生産、生産物、資本、所得等の概念がある。併し國民的欲望、國民的生産、國民生産物、國民資本、國民所得の諸概念は分業を俟つて始めて生ずる。而して分業に依て造られた社會が、孤立經濟主體の單純なる集合とは全く違ふと同じ樣に、是等の諸概念は、個人的慾望個人的生産其他の單純なる集合とは全く違ふ或物である。例へば國民的慾望は、個人欲望の合計の外に、更に社會其者の欲望を含んで居るが、此社會其者の欲望は、更に屢々個人欲望に干涉し之を左右する。從て國民的欲望は一の統一的有機的概念であつて、單なる算術的合計ではない。同樣に國民的生産物は、分業に依て社會生産物となり、從て凡ての人の勞働は各人の生産物に參加し、各人の勞働は全員の生産物に參加するのである。國民的資本其他に就ても同じ事が云はれ得る。

第二に分業を俟て始めて生産物の流通(Circulation)が起る。而して更に流通は孤立經濟に於ては全く其Analogieを見出す事の出來ぬ價値、貨幣及び信用なる三つの重要なる新概念を含む。之は別に說明を俟つ迄もなく明白であらう。第三に分

業經濟に於ては、孤立經濟では全く問題にならぬ特殊の經濟行爲が必要となる。卽ち先づ孤立經濟に於ては、生産者と消費者とは同一人であるから、生産に依て滿たすべき欲望の種類數量は、當然悉く生産者に知られて居るに反して、分業經濟に於ては、個々の生産者はその滿たすべき國民的欲望を直接知る事が出來ない。そこで彼と是とを適合せしむる爲め、何等かの方法に依て國民的欲望の測定を行ふ事が必要となる。次に孤立經濟では、生産者は生産要具(勞働の資本と)を凡べて己れの手に有するから、生産物量は常に當然現存生産要具に比例するに反して、分業經濟では、生産者が國民勞働と國民資本とを擧げて手中に掌握すると云ふ事がない。從て、是を最も有効に結合調整する爲に何等かの方法を講じなければならぬ。最後に孤立經濟では、生産者は常に生産物に屬するから、生産物は直ちに彼れの所得を形成するが、分業經濟に於ては、生産物は凡べて全員協力の結果であるから、何人も先づ分配と云ふ過程を經てからでなくては、所得に到達することが出來ぬ。其處で先づ適當の分配が行はれなくてはならぬ。是等特殊の經濟的行爲を誰れが、如何に擔當し、又その擧げ得る効果は如何、の問題は今玆で答へるには及ばない。

兎に角右に述べたやうな新經濟概念と新經濟行爲とが、分業の結果として必然それに隨伴し來るべきものなる事丈けは明にせられたと思ふ。而してこの新經濟概念と新經濟行爲との總體が、一の社會經濟として現はれるところの、特殊なる新經濟制度を形成する。此社會經濟が、今日の國民經濟 Nationalökonomie 若しくは國家經濟 Staatswirtschaft である(S. 104-5)。分業以前、卽ち孤立經濟に於ては、僅かに生產經濟と消費經濟とのみがあり得る。而して此二者は直ちに相接觸して、生產物は其一を出て、直ちに他に移るのであるから、此二領域內に於て適當の經濟が營まれさへすれば、經濟上の最終目的は達せらるゝのであるが、今分業は此二者間に新しき第三の經濟領域を開く。そこで一切の生產物は、何れかの生產經濟を去つて、何れかの消費經濟に移る爲めには、先づこの第三の領域を通過しなければならぬ。從て、最終の經濟目的を達せんが爲めには、更に此の第三領域に於て適當の經濟、卽ち國民經濟若しくは國家經濟が營まれなくてはならぬのである(S. 73-109)。

孤立經濟と國家經濟一般との差違に關して Rodbertus が記すところは、大要右の如きものである。次に彼れは土地及び資本の私有なき(未來の)國家經濟と、その私

有の行はるゝ(現在の)國家經濟とを比較して、其の各々の特質と相互間の差異とを明かにする。

七

彼れの見るところに從へば、土地資本の私有せらるゝ現社會に於ては、一切の生產物は其原料の狀態に在る時から、完成品の狀態に達する迄、一度も勞働者の手に屬せずして、常に地主及び資本家なる、勞働せざる第三者の手に屬する。而して其が最後に、國民所得として分配せられる場合には、勞働者は僅かに其生活維持に必要なる丈けを收得し、殘餘は一括して、賃子として土地及び資本所有者の手に歸し而して、此賃子は、再三說明したやうな方法で地主と資本家との間に分配せられる。(前二章參照)今此狀態を不當として廢止するとすれば、如何なるものが是に代り得るか。Rodbertus は明かに財產所有者が勞働生產物を橫領することを不當として居る。併し乍ら彼は、苟も分業、從て社會其者を廢止せざる限り、勞働者が其直接生產物全部を收得する事の不可能なる事を確認して居る。之は技術上絕對的に不

可能なので、例へば留針製造の場合に就て云へば、針の尖端を造る勞働者に其尖端丈けを與へて、尖端を成す金屬は之を別人に所有せしめると云ふ事が如何して行はれ得るか。又一農場を共同に耕やす農夫五十人中の一人の、個別的生産物は果して何であるか。之は到底答へる事が出來ぬ。故に此意味に於ける勞働全收は孤立經濟の廢止せられた處では、實現する事が全然不可能だと云はなくてはならぬ。「故に彼れが不當とするのは、個々勞働者が其の個別的生産物の全部を與へられぬ事ではない。彼は勞働者が其の生産全價値を收得し得れば滿足するのである。而して之が爲めには土地及び資本を全然私人所有から解放して、之を全國民の有に移さなければならぬと云ふ。但し此の私有の廢止は、一切の物體に及ぶ必要はない。財産一般が廢止されないで、たゞ所謂收利財産 rentierendes Eigentum 丈けが廢止されゝば好いのである。」

斯る法制的基礎の上に在る國家經濟と、今日の國家經濟との間には如何なる點に於て一致、如何なる點に於て相違があるかと云ふに、先づ分業が行はれて、生産者中の或階級は常に自然から原産物を採取し、別の階級は此原産物に加工して半製

品を造り、更に最後の生産者階級は半製品に加工して完成品、即ち所得財を造る。而して此所得財が樣々の階段に於て生産に參加し、其參加に對する報償として所得を受くべき資格ある凡ての者に分配せられると云ふ、國民的生産並に分配の大體の運動に於ては兩社會の間に差異はない。

反之、此運動が如何なる手段の仲介に依て行はれるか、及び何者が分配に與かる權利を有し、又分配は如何なる割合に於て行はるゝかの點に於ては、兩者は全然相異なる。即ち第一、現在社會に於ては、この運動は賣買と云ふ手段を通じて行はれるに反し、土地資本公有の社會に於ては、それが社會の支配及び規定 gesellschaftliche Verfügung und Konstituirung に依て行はれ、第二に現社會に於ては國民所得の分配に參加するのは生産者許りでなく、單なる土地資本の私有者も亦生産に參加したるもの、從つて國民所得の配當に與かる資格あるものと認められて居るに反し、土地資本公有の社會に於ては、生産者のみが生産に參加したるもの、從て又配當を受くる資格あるものと認められるのである。

八

そこで進んで社會主義社會に於て、國家は如何にして國民的生産を國民的欲望に適合せしめ、如何にして國民的生産額を生産要具の程度に維持し、如何にして國民所得の分配を社會的正義の原則に從つて調節するかを稍〻委しく知らなければならぬ。

第一に國民的生産と國民的欲望との適合に就て云ふと、固より欲望は無際限であるから、一切の欲望を充足する譯には行かぬ。其處で、各個人の欲望を如何なる程度迄滿たすべきかの問題が起る。而して此を決すべき標準は、各人が生産勞働上に於て擔當する時間勞働(Zeitarbeit)である。卽ち之が知れさへすれば、充足手段が各人欲望の如何なるものに迄及ぶかゞ明かになる。從て如何なる欲望を滿すべきか、卽ち如何なる財を幾許量丈け生産すべきかゞ決定せられ得る道理である。(公共欲望卽ち國家の歲出の事は姑く除外したが、之は公法に依て決定せられるので、各個人の欲望充足程度は、其公課負擔額丈け減少するのである。)たゞ問題とな

るのは、時間勞働を生産力と欲望との比較の尺度とする事の當否如何である。是を非とするものは、第一、勞働が生産の種類に由て難易の程度を異にすること、第二、同一生産内に於ても、各人の勤勉及び熟練の程度一ならざる事、第三、勞働の生産力に增減あることを擧げ、同一時間勞働の生産的意義同じからざることを論ずるのであるが、Rodbertus は此困難を解決する途を說明して居る。第一の困難は、標準勞働日 normaler Arbeitstag 若しくは標準勞働時間 normale Arbeitsstunde を定めることに依て解決される。卽ち標準時間を定め、生産の難易に應じて、個々の生産業に於ける實際の勞働日若しくは勞働時間を、標準日又は時間に換算する。例へば標準勞働時間六時間はA生産業に於ける七時間、B生産業に於ける五時間に相當すと云ふやうに計算するのである。第二の困難は、標準仕事量(normale Tagewerk)を定める事に依て解決される。卽ち各生産に於て、熟練及び勤勉の度に於て中位の勞働者を取て、其の一標準勞働日の仕事量を取り、之を一定標準時間内の標準生産額とすれば好いのである。而して第三の困難に至ては、標準勞働時間及び標準仕事量の尺度を勞働生産力の變動に應じて定時的に修正すれば解決されると云ふのである。

斯くして國民勞働の全量を確かめ、而して全國民資本の處分權を有する國家は、たゞ測定したる欲望に應じて個々の生產を開始し、それに應じて資本と勞働とを分割分配しさへすれば好いのである。

國民的生產額を現存生產要具の程度に維持することに就ては、難問はない。國家はたゞ現存勞働を上述の如き方法に依て、開始せられたる、諸生產に投用すれば好い。土地資本公有の社會に於ては、現在社會に於けるが如く、生產物に對する需要は直ちに勞働に對する需要を意味せぬと云ふ事がなく、生產を開始するに先だつて先づ資本の蓄積を俟つ必要もなく、技術發達の利益が一般に普及せずして、一部の人の獨占に歸する事もない。此事は後に土地資本私有の行はるゝ社會の特徴と併せ勘考すれば、自ら明白になるであらう。

九

さて最後に國家は、如何にして各人をして其產出全價値(嚴格に云へば、之より公課負擔額を控除せる丈け)を收得せしめるやうに、國民所得を分配するか。Rodbertus

が其方法とする所は(イ)一切生產物の價値の規定 Konstituirung des Wertes と、(ロ)完全に貨幣觀念に適合せる貨幣(具體的に云へば勞働券貨幣)の創定とである。彼れの說く所に據れば、價値の公定は勞働費用を尺度として行はれる。卽ち一物の生產に直接費やしたる勞働費と、其の爲めの生產要具消耗に由て、間接に費やされた勞働量との合計(彼れの公式に從へば $m + \frac{n}{x}$ 勞働)を以て其物の價値を定めるのである。是に對しては當然、生產物に對する需要、若しくは欲望を看過し、勞働費用のみを尺度として、價値(卽ち交換比例)を定める事は無謀だと云ふ非難が起る。併し Rodbertus は此に心着かぬのではない。彼れは價値が究極欲望に由て左右せられる事を明かに承認して居る(p. 137)。併し、若しも國家經濟的當局者が、生產と欲望との均衡を保つならば、價値は勞働費用を尺度として規定せられ得ると云ふに過ぎないのである。たゞ彼れは土地資本が公有せられ、國家がそれを支配するところでは、此條件は完全に滿たされるものと樂觀して居る(p. 137)。故に批評を加ふべしとすれば、此點に向つてすべきものであらう。

更に又價値規定の場合にも、再び(イ)生產の種類を異にするに從つて勞働の難易

一ならず、(ロ)同一生産内に於ても、勞働者の勤勉熟練の程度同じからず、(ハ)同一種生産に於て、勤勉熟練の程度を同うする者に就ても、自然的關係に由て、其の擧け得る收穫は同一ならず、(例へば土地に肥瘠の別あるが爲め、同一量の勞働が等しからざる收益を擧ぐるが如き)(ニ)長時間内に於ては、勞働の生産力に增減あるの理由を以て、勞働量をその尺度とする事の不當なるを論ずるものがある。併し(イ)(ロ)及び(ニ)の困難は前節に述べた方法に依て解決される。(少くも Rodbertus はさう認めて居る)。卽ち勞働及び勞働者間の差違は、標準勞働の方法に由て排除する事が出來る。それは前述の標準勞働時間及び標準仕事量から、進んで標準勞働 normale Arbeit なるものを定めるのである。標準勞働とは、標準仕事量に費やさるゝ勞働の謂であつて、一定量の生産物は、その標準仕事量の幾倍若しくは幾分一に相當するかに由て、幾何の標準勞働がそれに費やされたと認定する。例へば一定生産物の分量が標準仕事量の二分一に相當すれば、現實それに幾時間の勞働が費やされてあつても、其には拘らず、之を二分一標準勞働の産物と見做せば好いのである。卽ち勞働費用の公式 $m + \frac{n}{x}$ 勞働は $m + \frac{n}{x}$ 標準勞働の義に解さなければならぬのである。

然らば勞働生産力の增減に處するには如何するか。價値の定時的修正を行へば好いと Rodbertus は答へる。それよりも稍々困難なる問題は、勞働者の勤勉熟練に異同はないのに、例へば耕作採礦の場合に於けるが如く、自然の恩惠に厚薄のある爲め、同量の勞働が遂つた結果を以て酬ひられる場合に、果して何の勞働量を標準として生産物の價値を定むべきかである。前述する處に依て明なるが如く、Rodbertus は各人の勤勉若しくは技倆の相違、卽ち彼の所謂主觀的不平等の爲めに、各其の受くる處の報酬に差別を生ずるのは至當の事だと認めて居た。乍併、人が己れの責任に歸す可からざる、自然的恩惠の厚薄の爲め、得喪する事があつては不公平だと云はなくてはならぬ。現在社會に於ては土地生産物の價格は最劣等地に於ける耕作費に由て定まり、從て消費者全員に高價を負擔せしめる事に依て受くる利益は、優良地の地主が之を獨占して居る。併し、此の自然的恩惠を一部の地主に壟斷せしめる事が不當であれば、偶々其地を耕やす勞働者に其利益を獨占せしめることも亦同じく不當と云はなくてはならぬ。其處で彼れは穀物ならば穀物の、生産全額の平均費用に從て、價値を規定しようと云ふ。「一生産物量の價値は、此場

合最早地方的に分在せる個々人の標準勞働のみに從ては規定せらずして同時にまた、當該貨物の社會的生產額に費やされたる平均勞働量に依て規定されなくてはならぬ」のである(S. 146)。斯くして價値は勞働費用を尺度として公定せられ得るものとする。

次に國家は各生產者に對して其生產物に含有せらるゝ標準勞働量を計算し、之に對して證明券を交附する。此證明券は正に其生產者に依て造られた丈けの價値を表示するもので、其所有者に對して、同額の價値丈け他物を收得する權利を附與する。其所有者は宛も今日貨幣で買物をするやうに、社會の生產物貯藏所に於て此證明券を各々其任意の所得財と引換えるのである。卽ち此證明券は、分業に依て共同に作出せられた國民所得の中から各生產者が幾許を受くべきかを表示する「決濟手段」Liquidationsmittel たるもので、而して之れは考へ得らるゝ限り最も完全なる貨幣であるだらう。何となれば第一に、それは常に一定量の價値を表示するのであるから完全なる價値の尺度であるし、第二に、必ず現存の價値に對して發行せらるゝのであるから絕對的確實を保障する。而して第三に、其自體無價値の

紙片であつて而かも貨幣たる一切の條件を完全に具有するからである(S. 159-160)。

十

生產及び分配は Rodbertus の見る所に從へば、土地資本の私有なき國家經濟に於て最も完全に行はれる。少くも今日の社會に於て富と敎養上に於ける社會の進歩を妨げつゝある經濟的缺陷は排除されるといふ。此事は彼れが解剖するところの現社會の特質を取つて、彼此相比較する事に依て明瞭になるであらう。

國民的欲望に應じて生產の種類數量を決するものが、前記の社會に於ては社會若しくは國家自身であつたのに對して、土地資本の私有が行はれる社會では、土地及び資本の所有者が其任に當る。分配に至ては、生產物の交換價値に由て決せられ、而して交換價値の決定には市場を形成する一切私人が參加するけれども、併し供給を左右するものは地主及び資本家であるから、支配權は依然として彼等の手中に在ると云はなくてはならぬ。然るに第一に彼等の念頭に在るものは、自己の利益である。此利益を追求する間接附隨的の結果として、彼等は國民經濟的職分

を遂行する。國民的欲望を滿たす爲めにするのではなくて、賃子、利潤を齎らす見込があるから生産を企てるのである。然るに此利潤を彼等は豫め確知する事が出來ない。たゞ既往に徵して將來を推測するの外はない。現在の物價、現在の損益を根據として、生産規模の擴張短縮を決するの外はないのである。然るに原則として、此推測を各人は他人の推測をば知らずに、個々單獨に下す。土地資本の私有なき社會に於ては、中央機關が一目を以て國民的欲望を觀測し、一手を以て國民的生産を指導するから、同一欲望を滿たす爲めに、生産の重複する危險がなかつたのに、今玆では千の目が相互に覺知せずして同一の欲望を注視し、千の手が個々に其爲めの生産を行ふのである。

加之今日の社會では、資本物體(道具原料)と勞働とが現在する丈けでは、未だ生産は起らない。紡績技能を習得せる勞働者と、原料たる羊毛と紡績機械とがあつても、是等の自然的生産諸條件に「資本家」が對立しなければ、卽ち是等の資本物體を買ふ資力若くは財産(Vermoegen)を有する企業家がなければ、資本物體は活動を開始せず、勞働者は食を得る事が出來ない。「然るに此資本財産の所有、此の私的資本は、先

づ節約せられ蓄積されなければならぬ。今日では凡べての新生産企業、凡べての勞働者の新雇傭に先つて資本財産の節約若しくは蓄積が行はれなければならぬ。生産の豫備條件の備はる爲めには、勞働及び資本物體の現在に、更に加ふるに此事がなければならぬ」(p. 173)のである。併し乍ら此條件が備つた丈けでは、未だ不充分である。資本財産は賃子の生ずる見込がない限りは、投下されないが、賃子は生産物の市價が相當の高さに達する時にのみ生ずる。然るに市價は、生産物に對して充分なる有効需要 wirksame Nachfrage ある時にのみ相當の高さに達する。而して斯の如き有効需要は、既存の價値(卽ち購買力)を根據としなければならぬ。然らば此價値(購買力)は如何に全員の間に分配せられるか。

十一

今姑らく地主資本家及び企業家が同一人若しくは一階級をなすものとすれば、此の非生産者は、全生産物の中、僅かに一部分を賃銀として生産者の爲めに割き、殘餘を賃子として自ら收得する。賃銀は、勞働者と企業家との自由契約に依て約定

されるのであるが、今日生産物の價値が大體其勞働費用に歸着しようとする傾向があるのと同樣に、究局大體に於て勞働者の生活必要費に歸着する傾きがある。次に賃子は更に地代及び資本賃子(又は資本利潤)として既述の法則に從て地主と資本家との間に分割される。而して最後に資本賃子及び地代は、各企業家と資本家、小作人と地主との間に分割せられて、企業家利潤と利子、借地料と小作利潤となるのである。而して勞働者の賃銀、資本家の利子、地主の借地料は何れも生産物の價値如何に拘らず、企業家との自由契約に依て豫め約定せられる。(利子及び借地料額は資本家及び地主が自ら企業家となつた場合に收得し得べき收益高に歸着しようとする。)生産物の價値から是等の既定支出を控除した餘剩が企業利潤を形成するのである。

今一切の製作品、半製品及び原産物の市價は、所得財の市價に由て左右せられるのであるが、その所得財の市價は、上述既定價値額の所有者の需要に由て決せられる。「主としてこの價値額が、生産物の交換價値を高める有効需要の根據となる。その大小に由て今日市價の高低は定まる」(S. 190)のである。

之を再び約說すれば、社會は「各生産者に其生産物價値の全額を所得として歸屬せしめずして、今日土地及び資本の私有は、生産物若しくは生産物價値の生産者及び土地、資本所有者間に分割せらるゝ事を餘儀なくする。第一の配當に參加する此の三階級に對して、更に第四の階級として企業家が立つ。彼は需要供給の法則に從つて、豫め約定せる價値額を以て、前記三階級から、生産物に對するその配當分を買取る。此價値額は交換價値法則の支配を受けるものであるから、其高低は可變ではあるが、併し一定の點に向つて歸着しようとする。——卽ち勞働者の其れは、生産の結果如何に拘りなく、其生活必要費、土地及び資本所有者のそれは、彼等が自ら企業家たりし場合これに歸屬すべかりし額に歸着しようとする。最後に此確定價値額に由て、今企業家が單獨裁量に基づき、市場に搬出した生産物に對する有効需要が定まり、それと共に其交換價値、及び併せて企業家の手に殘る利潤が決せられる」のである(S. 191-2)。

さて右の如く生産及び分配が行はれる事の結果は何うであるか。

第一に地主及び資本家は、利益(賃子)を目的として生産を行はしめる。然るに既

述の如く、賃子は生産物の價格が充分の程度に達するときにのみ生じ、充分なる價格は充分の有効需要あるときにのみ實現せられ、而して有効需要は價値の所有を前提とする。故に今日の社會では、價値の所有者の欲望のみが滿されると云ふ道理である。即ち「生産は勞働(する者)の欲望の爲めに行はれずして、所有(する者)の欲望の爲めに行はれる」(P. 198)。有効需要を定めるものは「勞働者としてか賃子收得者としてか、兎に角既に分配に參加し、たる者」丈けであつて、仕事のない勞働者は、市價の高低、從つて國民的生産の決定の上に、何等の影響を及ぼす事は出來ぬ。今日地主及び資本家は、「最早需要する社會ではなくて、支拂ひ得る社會、それも最早勞働を以て支拂ひ得る社會ではなくて、所有を以て支拂ひ得る社會の爲めに生産せしめる」(P. 195)のである。而かもこの有効需要を地主資本家は統一的に測定せずして、たゞ既往から推して個々單獨に臆測する。其處で國民的生産と國民的欲望との不適合が通則となる。これが第一の結果である。

第二に、今日の社會では、勞働と資本物體とが存在しても、直ちに生産は起らない。それが爲めには、更に加ふるに是等の散在せる生産手段を統一結合する資本財産

が豫め蓄積されてなくてはならぬ。加之資本財産の蓄積があつても、其の財産は收利の見込のない企業には、投下されぬか、或は既に投ぜられた企業から引出され「景氣の恢復」を手を束ねて待つ。而して此の資本財産の不活動は、勞働及び機械原料にも打擊を與へて、是等のものは同じく無爲休息を餘儀なくされるのである。其處で國民的生産が、現在生産手段がそれを許す極度まで行はれない。「如何なる國も、土地及び資本私有制度の支配下に在るものは、富み得る丈け富んで居らぬ。」物質的窮乏の最中に於て勞働と資本とが無用の妨碍物となると云ふ奇怪事が生ずるのである。

第三に、土地及び資本私有制度の下では「最も自然最も單純なる正義の法則」は傷けられて、生産者は生産全價値の僅かに一部分のみを收得する。而して生産者の收得分、即ち賃銀は、生活必要費額に歸着する傾きを有して居るが、生活必要費なるものは元來生産物の一定量であつて、勞働の生産額には關係なく、勞働者の欲望に依て左右せらるゝものであるから、勞働者は啻に現在其生産全價値を收得する事が出來ぬ許りでなく、また將來に於ける生産力增進の恩澤から全く除外されて居

ると云ふ事に歸着する。此事から二の法則が生ずる。第一に勞働生產力が增進し、而して勞働者がその果實から除外せらるゝ事は、市場の賣買に參加する大多數人の收得分、從て其有効需要の減退し、一方市場に供給せらるゝ生產物量の增加する事を意味する。從て生產物の市價には不自然なる壓迫が加へられ屢々之を其費用額以下に窮迫する。第二に企業家は生產物賣却に先つて、勞働者、地主及び資本家に對して定額の賃銀、賃子の支拂を約定する。故に上記の原因に依て生產物市價が壓迫されゝば、彼は或は一時的に、或は部分的に、生產を休止しなければならぬ。而して此の後の結果はまた直ちに前の現象を喚起すのである。此法則は今日明かに事實となつて現はれて居る。

土地資本公有制度と私有制度とに對するRodbertusの比較論評は、大要上述の如きものである。而して此論究に基づいて、彼れは『……土地資本の共有を俟つて、始めて社會は完全に個人的並に社會的專制から解放される……』宗教改革に始まつた幾多解放の連續を完了せしめるものは、個人主義ではなくて、社會主義である』(p. 220-1)と云ふのである。

十二

Rodbertusは進んで先づ孤立經濟に於ける資本に就て、前に掲げた四問に答へる。既に前節に說明した通り、孤立經濟に於ては人は有ゆる社會的關係から離れて直に外界自然に對立する。從て吾人は此處に全く社會的關係に制約せらるゝ事なき自然的生產行程を認識することが出來る。然らば此場合に資本は何を以て成るか。人は其欲望を滿たす爲めに絕えず成る可く生產的に勞働しなければならぬ。然るに熟果の採取と云ふが如き最低度の生產行爲以外の場合に於ては、人は欲望充足手段を作出さる爲めには先づ道具と原料とを生產しなければならぬ。此の道具と原料とが(Rodbertusに從へば)資本であつて、それを以て、且つそれから造られた欲望充足手段は所得を形成するのである。別言すれば『資本……は更に生產の爲めに供用せらるゝ生產物、所得は直接欲望の充足の爲め役立つ生產物である。』前者は猶ほ勞働に俟つところある豫行勞働、後者は直ちに享樂に接する完成勞働である(23.4-5)。從來經濟學者は屢々生產者が生產中に消費する生活資料を資

本と認めようとするが、Rodbertus が是説の誤謬を指摘することは甚だ痛切である。謂へらく、此見解を徹底せしむる時は或は全然資本と所得との區別を廢止するか、又は此の二概念の顚倒に到着するの外はない。成程人間は絶えず其欲望を滿たす爲めに、絶えず勞働しなければならぬから、新勞働に從事しつゝ常に既往勞働の所得を享樂する。彼は生産しつゝ消費し、消費しつゝ生産する。併し彼は生産する爲めに消費するのではなくて、消費する爲めに生産する、享樂せんが爲めに所得を造出すのである。故に若しも「彼れが生産しつゝ消費するところのものが、資本である可きものならば、……彼れが消費しつゝ生産するもの、卽ち道具及び原料は所得でなければならぬか、或は……一切のもの、卽ち道具及び生活資料は擧げて資本となり、所得の概念は消滅しなければならぬであらう」と。(233-4)

Rodbertus は又勞働生産力の增進を資本に歸する說を否認する。資本は既述の如く道具と原料とから成るものであるが、原料は生産力の增進と共に增加するのを常とするけれども、此增加は彼の增進の原因ばかりではなくて、寧ろ結果に外ならぬ。又道具に就て云へば、成程人間は其勞働を一層生産的ならしめる爲めには

通常直ちに欲望充足手段の生産に其勞働を向けずに、先づ道具に之を向ける。而して造るところの道具が精巧であればあるに從て、勞働生産力は增進するのが常である。併し乍ら資本發生以前から生産力の增減はあり得る許りでなく、資本が增加する事なく、否却て減少しながら、生産力が增進する事があり得る(精巧なる道具に由て生産力は增進するが、此道具の生産に要する勞働量は從來よりも大ならざる場合)から、畢竟「生産力の增進は資本に歸せらるべきものではなくて、勞働にのみ歸せらるべきものだ」と云ふのである(235-39)。又彼は資本の本質を蓄積量(Vorrath)に求める說をも斥ける。資本の本質は更に生産の用に供せらるゝ生産物たる一事にあつて、其量の大小、持續時間の長短は問ふ事を須ゐぬと云ふのである。(239-40)

十三

次に孤立經濟に於て資本は如何にして發生し、如何にして增加するか。答に曰く、資本は勞働に由て發生し、勞働に由て增加すると。

資本の發生に關する有力なる一說は、資本は貯蓄に由て發生すと主張する。併

し原料及び道具が如何にして貯蓄に由て發生し得るか。若しも貯蓄と云ふ事が、消費せずして保存すると云ふ意味ならば、それは貯蓄するより前に先づ存在しなければならぬ。或は之を道具を作る爲めには、その間己れを支へる丈けの食料を先づ貯蓄しなければならぬと云ふ意味に解釋しようか。併し乍ら若し孤立經濟主體が手から口に生活する狀態に在つて、道具を製作するの餘時がないとすれば、彼れは勿論其食料を貯蓄する事は出來ぬ。之を行ふ前には、先づ勞働生產力の增進と云ふ事がなければならぬ。生產力の增進に由て從來全然生活必須物の獲得に充てられた勞働に餘裕を生ずるに至つて、始めて此餘裕勞働を道具の製作に充當する事が出來るのである。故に孤立經濟主體をして食料以外の或者を生產する事を得しめる丈けの食料を以て、彼の最初の資本なりとするも、或は最初の道具及び原料を以てそれなりとするも、直接資本物體を造るものが常に勞働のみなると同じく、又斯る資本の發生を可能ならしめるものは、勞働生產力の增進のみであつて、貯蓄ではない。」

資本の發生が勞働に由ると同じく、資本の增加も亦勞働に由るので、貯蓄に由る

のではない。抑も資本と云ふ言葉は、二の意味に解釋され得る。資本を形成する生產物量の增加と云ふ意味と、資本の爲めに費やされた(或は資本が代表する)勞働量の增加と云ふ意味とである。前の意味での資本の增加ならば、それは勞働生產力の增進に基づくものであるし、後の意味での資本增加ならば、それは勞働その者の增加に基づくものであつて、何れの場合にも貯蓄の增進に基づくものではない。(此處に謂ふ勞働その者の增減は、一日中の勞働時間の延長若しくは短縮と、過去に關したる勞働時間の長短とに依て決せられる。此理を一國民の上に移せば國民資本の增減は勞働人口の增減と、國の新古とに依て決せられると云ふ事が出來やう)

資本が勞働に由て發生し、勞働に由て增加すると同じく、資本は勞働の反覆 Wiederholung der Arbeit に由てのみ再生產せられる。玆に資本の再生產と稱するのは、道具及び原料の消耗の補充を意味するが、斯る補充が Rodbertus の立場からすれば、勞働に由ての外之を行ふ途がないのは說明を俟たぬであらう。

最後に資本は所得に對して如何なる關係に立つか。Rodbertus は此問に答へる事

に依て、旁ら資本を以て所得の源泉となし、資本と所得との間に因果關係を認める經濟學者の妄を辨じようとする。彼の見る所に從へば、豫行勞働たる資本と、完成勞働たる所得との間には「源泉と水流、原因と結果、生産原力と生産物」との關係はなくて、兩者は「單に連續繼起の關係に立つに過ぎぬ。」例へば人が樹枝を折取つて、それを以て果實を打落したとすれば、此棒片は彼れの資本であるが、打落された果實なる所得を以て此棒片の生産物とは認める事が出來ぬ。此場合の所得は「棒を折取る勞働と、棒を揮ふ勞働との生産物」に外ならぬ。前者は果實を獲得せんとする勞働の第一歩に外ならぬのである。之を一般的に云へば、孤立經濟主體は成るべく多額の所得を得んが爲めには、先づ原料と道具との生産を以て其勞働を始め、次で其道具を以て原料に加工する勞働に移り、遂に斯くして所得に到達する道程を經なければならぬのである。然るに原料は全然、道具は部分的に消耗することに依て、資本は絶えず所得に變形しつゝある。前者は後者の第一歩に過ぎずして、資本も所得も共に等しく勞働、而かも勞働のみの生産物である。先づ資本生産なる道程を迂回することに由て生ずる所得の增收は勞働にのみ歸すべきものである。

たゞ其勞働は經濟主體が同一量の勞働を一層有利に投用する事、卽ち一層よく自然を驅使する方法を解することに依て、其生産力を高めて居ると云ふに過ぎぬ。卽ち「一言にして云へば、所得增收は勞働生産力の增進のみから生ずるのであつて、更に資本と稱する、本質上勞働とは別の特殊の働因として參加する第二の要素からではない」「孤立經濟主體の所得は、資本の大小に由て、或は大或は小である。併しそれは資本が所得を生むから、それの創造者であるから、ではなくて、兩者共に兩者以外に立つ同一なる力、卽ち勞働の所産であるからである。その勞働は所得を作り、又所得に達する道程上に於て所得の第一歩たる資本を作らなくてはならぬに由て、また等しく資本と所得とに現はれなければならぬのである」(373-4)。

一四

Rodbertusが資本の本質を明にする爲め、遡つて孤立經濟下に於ける資本に關する一見無用の嫌ある思辨を以て論究を始めるのは、姑らく人對人の關係を無視し、人對物の關係のみを取て見れば、孤立經濟は、分業及び所有權の爲めに、外觀遙かに

複雜なる文明社會の縮圖を示すもので、孤立經濟下に於ける資本に就て云はるゝと正に同一の事は、資本及び土地私有の有無に拘らず、國家經濟内に於ける國民資本(國内に現存する資本物體の綜合)に就ても云はれるからである。たゞ土地及び資本私有の行はれざる社會に於ては、現在社會に於けるが如く、私的資本の爲めに資本本質の確認を妨げられる事がない爲め、此理は一層容易に了解する事が出來る。そこで彼れは先づ社會主義社會の下に於ける資本に就て既記の四問を提出し、之に對して孤立經濟に於けると同一の解答を與へ、且つ其理由を說明する。

土地資本の私有なき社會に於て國民資本は何を以て成るか。此場合の國民生産は孤立經濟に於ける生産よりも遙かに複雜で、縱てに原生産 Rohproduktion 半製造 Halbfabrikation 製造 Fabrikation の諸段階に分れ、更に各階段は横に幾多の生産部門に分れ、(例へば原生産が狩獵、漁撈、牧畜、耕作、採鑛に分るゝが如く)更に各部門は幾多の生産經濟又は經營 (Unternehmungen) に分れて行はれ、國民中特殊の階級が各之を擔當する。而して各種の原生産業に於て自然から採取せられた原生産物は、半製造の原料となり、半製造物は製造業の原料となり、斯くして順次生産段階を歷進して

最後の段階に於て、享樂財又は欲望充足資料なる完成狀態に到着する。同時に別に機械及び道具の生産を擔當するものがあつて、各階段各部門に於て要せらるゝ道具機械の供給補充を掌る。而して各生産部門の最後階段に於て、完成の狀態に達した享樂財は、社會其者及び社會を構成する個人の間に分配せられて、各その欲望充足の用に供せられる(既記の如く社會その者の受ける配當額は、公權に由て規定せられ、各個人の收める得分は各人の價値生産額に應じて定まる)のである。が、此の最終生産段階に於て完成し、直接社會的欲望の充足に供用せらるゝ財が國民所得を形成し、此所得がそれを以て、且つそれから作出される一切の道具と原料とが、國民資本を形成する。即ち此場合に於ても、國民資本の本質はそれが國民生産物中の更に生産の用に供せらるゝ部分、即ち更に勞働に依て繼續さる可き豫行勞働たる事に存し、國民所得の本質は、國民生産物中の終局消費に供用せらるゝ部分たること、即ち完成勞働たる事に存するのである(259-60, 264)。

Rodbertus は此處でも再び勞働者を養ふ生活必要品を資本と認める一部學者の通說の妄を辨ずる。謂へらく、土地資本の私有なき社會に於ては、凡ての者は勞働者で、凡ての所得は勞働所得である。從て全國民所得は此の勞働者維持の爲めに充當せられて居る。故に若し勞働者維持の用に供せらるゝ生產物を資本とするならば、此場合全國民所得は之を國民資本に數へなければならぬ。さうすれば主客地を換えて、一定生產期の全生產物(新たに造られたる道具と原料とその大部分を占む)を國民所得に數へるか、或は全然國民資本と國民所得との區別を廢棄するか、孰れかに出でるより外はないと云ふのである。又一部の學者が勞働者の收得分を生活必要費と其以上の餘剩部分とに分ち、勞働續行の爲め缺く可らずとの理由を以て前者を國民資本に數へて、後者と相對せしめるとも、亦 Rodbertus の不合理とするところである。謂へらく、成程生活必要資料を缺くものは、必要なる道具原料を缺くものと同じく、生產に從事する事が出來ぬ。併乍ら其人が生活資料の缺乏を憂へるのは、其が爲めに生產を行ふ事が出來ぬからではなくて、其が爲めに生活を營む事が出來ぬからである。[消費を(假令其一部分でも)生產手段となし、生產

を却て目的となすは經濟的の順序を顚倒し、目的を手段に引下げ、自由人格を再び奴隸と見る所以である。](262)

財の持續性も亦資本財、所得財の區別の標準にはならぬ。若し此標準に據る分類を徹底せしむれば、欲望滿足手段を消費財と使用財とに分ち、後者(例へば衣服の如き)は之を資本財中に數へなければならぬからである。所詮資本と所得との區別は、財の用途如何、卽ちそれが直接欲望の滿足に充當せられるか、又は生產の用に供せられるかの外に其標準を求める事は出來ないのである。

又資本の本質を生產力の增進に求める說の不當なるは、國民經濟に於ても孤立經濟に於けると異なる所はない。若し資本の本質が生產力を增進せしむるに在るとすれば、第一に原料は之を資本から除外しなくてはならぬ。第二に道具の利用に由て生產高が豐富になるのは事實であるが、その道具は豫め勞働に由て造られたもので、畢竟孤立經濟の場合に、經濟主體が其時間(卽ち勞働)の一部を道具生產の爲めに割き、其道具を利用する事に依て生產高を豐富にすると同樣に、國民勞働の一部分が道具の生產に充當せられ、他の部分がその道具を利用して所得財の生

産を行ふと云ふに過ぎない。之に由て生産力の增進を來たすとすれば、それは道具生産に充當せらるゝ勞働か、或は道具を利用して生産を行ふ勞働か、又は其の双方か、何れにしても國民的勞働以外のものに之を歸する事は出來ぬ。

一六

土地資本の私有なき社會に於て、國民資本は如何にして發生增加するか。

Rodbertus は勿論その勞働に由て發生し、勞働に由て增加する事を主張するのであるが、此主張を明にする爲めには、資本は貯蓄に由て發生增加すと云ふ有力なる異說を反證しなければならぬ。彼は謂ふ、貯蓄なる語は二の意味に解釋される。財を蓄積 zu einem Vorrath ansammeln する事、及び財を自家直接の消費に充用せずして、更に再び生産の用に充當する事が是である。併し資本とは道具及び原料の謂であるとすれば、苟も國民生産が其常態を持續する限りは、蓄積せらるゝ事はない。穀物は磨粉場に運ばれ、穀粉は製麵包師の許に致される。同時に水車や燒麵竈は築造せられると直ぐに使用される。故に國民的生産が何等かの原因に由て停滯

するに非ざる限り、原料及び道具は何處に於ても蓄積(寧ろ堆積)することはないのである。又貯蓄なる語を第二の意味に解すれば、原料道具は元來直接消費に供せらるゝ事なきものである。從て其消費を節すると云ふ意味で貯蓄せられる事は、元來不可能なのである。彼は此點に於て J. S. Mill を引用し來つて、其貯蓄說に反對する。Mill は假に一定數の個人若くは家族が、一定面積の地上に來住して、自勞自活を營む場合を想像し、此場合にも、彼等は次季の播種に必要なる丈けの穀物は消費を節して保存しなければならぬと說明したのに對して、(271) 是は材木を採伐したものが、其一部分を以て机を造り、他の部分を以て道具を造つた場合と理に於て少しも變りはないが此の材木の後の部分は果して節約(貯蓄)されたものと云ふ事が出來ようかと云つて居る。(併し、之が節約でないと言明する事は、必しも人の同意せぬ所であらう。)「國民資本を構成する原料と道具とは、明かに蓄積せらるると云ふ意味に於ても、又消費を節して留保せらると云ふ意味に於ても、貯蓄せらるゝものではなくて、……國民的勞働に由てのみ發生し增加する……」ものである(272)。

國民資本の增加に就て云へば、孤立經濟の場合に於けると同じく、其增加を測定

する標準は二つある。資本を構成する貨物量と、資本が代表する費用額(即ち此場合には價値額)とである。前者を標準とすれば、國民資本を增加せしめるものは、國民的勞働の生産力增進であるし、後者を標準とする場合には、それは國民的勞働量增加の結果としてのみ生じ得る。然るに國民的勞働量の增加は、二の方法で行はれ得る。第一は生産力に異同のないものとして、一國民が他國民よりも生産を行ふ事が久しい爲めに、その繼承保有する資本財、從て其の代表する價値額のより大なる場合、第二は生産の各段階に於て、より多量の勞働が生産に投ぜらるゝ場合である。此の第二の方法に於ける勞働量增加の最大働因は、人口その者の增加であるが、休日の制度、勞働時間の延長、小兒の生産從業も亦、その程度は低く、範圍に限りはあるが、兎に角同じ効果がある。何れにしても、國民資本の增加が勞働に由てのみ行はれると云ふ Rodbertus の意味は明白であらう。併し經濟學者が資本は節約又は貯蓄に依つて生ずと云ふ場合には、必しも原料、道具其者の貯蓄と云ふ事のみを考へては居ない。是等の資本財を造る爲めには、それを生産する勞働者を養ふ丈けの食料、一般的に云へば所得財が豫め蓄積されなくてはならぬ。少くも國民

資本が生産人員增加の結果として增加する場合には、此の新生産者を養ふ丈けの食料が豫め存しなければならぬと謂ふのである。併し Rodbertus は此見解にも同意しない。何故と云ふに、彼れの說明に從へば、抑も勞働者增加の行はれる方法は二つある。一は平均年齡が延長すること、二は出生率が上進することである。第一の方法で勞働者數が增加する場合は、たゞ消費しつゝ生産する者の生存期間が延長されると云ふ丈けであるから、食料蓄積の問題は起らない。第二の人口增加の場合には、一夫婦が生み、從つて養育すべき子女の數が增加するのであるから、子女が成長して自から生産に從事し得るに至る迄、父母は從來よりは一層節約的に spaerlicher 生活しなければならぬ。併し此の節約的に生活すると云ふ事は、經濟學者の所謂節約貯蓄 sparen と其意味は同じでない。加之右は子女養育の期間父母の生産力に異同なきものと假定しての論であるが、通常は此期間に於て生産力は增進する(Rodbertus 其理由を示さず)。從て此意味に於ける節約も不必要である。Rodbertus も、J. S. Mill の引例にあるやうに(279)、奴隷の所有者が、奴隷をして繼續勞働せしめ、或は所有奴隷の數を增さんが爲めには、生産物全部を自己の享樂に費消

せずして、其一部を奴隷飼料として留保しなければならぬ事を承認して居る。併し、之は奴隷制度と云ふ特定の法制に依て必要となつたので、自然的經濟過程上必要なのではない。即ち上述の場合に於ては、生産者と其生産物との間の自然的經濟關係は、全然廢棄されて居る。此場合、生産者には彼の生産物、即ち彼れが造るところの生産物は歸屬しない。彼は其所有から除外せられ、生産物はそれを同じく己れの生産物と稱する(但し經濟上の意味でなくて、法律上の意味に於て己れの生産物と稱する)他人の手に歸屬する。此の非生産者、但し生産物所有者は、生産者をして更に勞働せしめる爲めに、其生産物、即ち法律上の意味に於ける生産物から節約をしなければならぬ。彼はその生産物の一部分を費消せずして、その生産物を奪はれたる生産者維持の爲めに充當しなければならぬ。而して此生産者にはその勞働力維持の爲めに必要なる丈けが還附されなければならぬのである(280)。即ち Rodbetus に從へば、自然的經濟過程のみを眼中に置けば、資本の成立增加はただ勞働に依てのみ行はれる。資本が貯蓄に由て發生增加すと云ふは、たゞ一定法制を條件とする私的資本に就てのみ云はるべき事なのである。即ち「或人々が一

切の生産物を造り、他の人々に一切の生産物が帰屬するやうな社會狀態が存する時は、後者は前者に、兎に角彼等が生産を繼續し得る丈けを生産物の中から殘さなければならぬ。」併し乍ら自然的生産過程上に於いて、資本成立の爲めに貯蓄は果して必要なるか否かの問題に就ては「彼の法律に依て造られたる、經濟學の立場から見れば人工的なる社會狀態は、何物をも證明するものではない」と彼れは謂ふのである(280, 281)。

一七

國民資本は如何にして再生産せられるか。

云ふ迄もなく勞働に依つて行はれる。孤立經濟の場合に經濟主體が其時間の一部を道具と原料との生産に割いたと同樣に、吾々は今想定せる社會に於ては、各種生産の最終段階に於て絶えず所得財が生産さるゝと同時に、其以前の諸段階に於ては絶えず原料道具の生産補充が行はれるのである(286-288)。此點に關しては Rodbertus の說明には難解なる何物もない。

最後に國民資本と國民所得との關係は如何。

此點に於てもRodbertusは、孤立經濟下に於ける資本と所得との關係に關する言說を反覆する。一國民も孤立主體と同じく道具と原料とを造り、其道具を以て、其原料から、所得財を造るに過ぎぬ。國民資本も國民所得も兩者共に等しく國民勞働の、而して國民勞働のみの產物である。唯國民資本の大小と、國民所得の大小とは並進する。卽ち勞働生產力が增進すれば、國民資本も國民所得も共に量に於て增加し、人口增加の結果として、國民的生產物が價値に於て增加すれば、國民資本も國民所得も共に價値に於て增加する。乍併此並進關係あるは、決して國民所得が國民資本の所產なるが爲めではなくて、「國民的資本も所得も、兩者共に同一なる、其以外に存する力、卽ち國民的勞働に由て造られ、且つ動かされるから」である。(Ⅱ. 126)

Rodbertusは資本を以て所得の源泉と爲すの說を、資本當體と資本財產國民所得と個人所得との混同に歸して居る。卽ち土地資本の私有せらるゝ現社會に於ては、資本所有者は生產上一指をも動かす事なく、而かも所有資本の價値の減損なくして、定時的所得を收受する事が出來る。此事實を見て多くの經濟學者は、資本を

所得の源泉と爲すのであるが、玆に所謂所得の源泉は、實は資本ではなくて、資本所有Kapitalbesitzである。而して此の所得はRodbertusに從へば、現行法制の力に依て、勞働生產物の一部が生產者の手から資本私有者の手に奪はれたものに外ならぬのである。此に到つて土地資本の私有行はるゝ現社會に於て、私的資本又は資本財產なる假象が、如何に資本實體の觀察を妨げつゝあるかを論じなければならぬ。

一八

土地資本の私有せらるゝ社會では、國民生產物はその生產全過程を通じて常に生產者以外の私人の所有に屬する爲め、生產物は常に交換の手段に由て一段階から他の段階に移り、生產者は其の生產全價値を收得せずして、その得分は生產力の增進と共に益々比較的に減少し、また此の分配の不平等あるが爲めに、社會の一部の爲めに絕對的生活必需品が生產さるゝと同時に、他の部分の爲めに最高奢侈品が生產せられ、然らざる場合よりも生產物の種類は遙かに多樣となるの相違はあるが、自然から原產物が採取せられ、漸次生產段階を歷進して、原產物が半製品、半製

品が製造品となり、而して生産の最後の段階から消費の手に移る大體の徑路に到つては、土地資本の私有行はるゝと行はれざるとに由て異なるところはない。國民を一單位と見、國民生産物、國民資本、國民所得の一所有者と見、資本當體を一全國民の立場から見れば孤立經濟に於ける資本、及び土地資本の共有の行はるゝ分業經濟に於ける國民資本に對すると同じ事が、此場合の資本に就ても云はれなければならぬ。卽ち今の場合にも、苟も資本と所得との區別を撤廢し、若しくは其位置を顚倒せざる限り、國民資本に數ふべきは、國民生産物中、原料及び道具を以て成る部分、國民所得に數へらるべきは社會其者若しくは個人の直接欲望充足手段を以て成る部分である。而して其の發生增加、及び兩者間の關係に就ても、既述の說明を悉く反覆する事が出來る。「土地及び資本の所有は、相交易する個人に關しての み重大なる影響がある。國民を一單位として見れば、その個人に及ぼす影響は消滅する」のである。

以上の立場から Rodbertus は特に三の點を擧げて自說を强調する。第一、貨幣は國民の立場から見て資本に屬するか否か。彼の所見に從へば貨幣は國民資本に

屬せずして國民所得に屬すると云ふ。蓋し社會は、例へば司法の爲めに裁判所の建物を要すると同じく、社會的に造られたる國民生産物を適當に分配する爲めの手段を必要とする。貨幣は社會の此直接欲望を滿たすのであるから、當然國民所得に屬すると云ふのである(293-4)が、此說の對照として直に想起されるのは Adam Smith の資本分類である。Adam Smith は個人所有の stock(財の蓄積)を直接消費に充當せらるゝ部分と、所得贏得の手段として用ゐらるゝ部分、卽ち資本とに分ち、更に後者を、所有者を更へる事に依て所有者に利潤を齎らすか、又は同一人に繼續保持せられつゝ收入を齎らすかに由て、流通資本と固定資本とに區別したる後進んで一國若しくは一社會の stock を、同じく直接消費用の stock、固定資本及び流通資本の三部分に分つ。而して更に此の謂はゞ社會的流通資本を構成する部分として(イ)貨幣、(ロ)賣手の手中に在る食料品、(ハ)衣服家具家屋の原料、及び(ニ)未だ消費者の手に歸せず、製造家又は商人の手中に存する完成品を擧げて居る。然るに是等の流通資本は、貨幣を除く外何れも究極自然、卽ち土地鑛山及び漁業の産物を以て補充せられ、而して其終極の運命は固定資本となるか、又は消費者の手に歸して消費せら

るるか何れかであるが、唯貨幣丈けは他の流通資本と趣を異にして、寧ろ固定資本に近い。蓋し貨幣は生活必要品、便宜品、娯樂物を適當なる割合に於て社會各員に分配する作用をなす交易要具 instrument of commerce であつて、其自體消費財たる事、從て社會若くは個人の所得 revenue の一部を形成する事がない。故に曰く「それには、依て社會の全所得が規則正しく一切社會各員の間に分配せらるゝところの貨幣は、其自身その所得の如何なる部分をも成す事なし。流通の大車輪はそれに依て流通せしめらるゝ財とは全然異なる。社會の所得は全然それ等の財を以て成り、之を流通せしむる車輪を以て成らず」と。(Wealth of Nations, edited by Cannan, vol I p.272)

Smith と Rodbertus と兩說の何れが正しきかは、強ち裁定を必要とせぬ問題であらう。消費財の分配に貨幣の缺く可からざる事に就ては議論はない。たゞ之を欲望滿足資料分配の手段に過ぎぬものと見るか、或は社會は斯る手段を缺くこと能はざるものなるが故に、貨幣はそれ自體此の直接欲望を充足する謂はゞ一種の消費財なりとするかに由て、二家の孰れかゞ正しきものとなるに過ぎぬ。但し Rodbertus の意見を一貫すれば、一切の交通交易の機關、設備一切は、貨幣と同じく、社會の直接

欲望を充たすものとして、之を國民所得中に數へなければならぬ事は論を俟たぬであらう。(Böhm-Bawerk, Positive Theory of Capital, 1891, pp. 66 參照)

第二に勞働階級の所得は國民所得に屬するか國民資本に屬するか、の問題がある。財產所得卽ち利潤及び地代に就ては、問題なく、何人もその國民所得を形成することを疑はぬが、賃銀に至つては、その同じく國民所得の一部をなす事は、之を認めるものと認めぬ者とあるが、之を國民資本の一部に數ふる事に於ては多數經濟學者が一致して居る。此見解は賃子を構成する所得財は、生產に依て始めて造られるに、反し、賃銀財は道具及び原料と同じく、生產若しくは企業開始以前に豫め存在するものとの考へに基いて居るが、Rodbertus は此考へ方を否定するのである。謂へらく、凡そ賃銀の支拂は生產物賣却以前に行はれるか、或は賣却を俟つてその收益中から支拂ふかの孰れかである。前の場合には、企業家が豫め賃銀支拂の資金を持たねばならぬ事は明白であるが、之は私的資本に屬するもので、此に論ぜらるべき資本當體とは全く別物である。賃銀財(勞働者の消費すべき生產物)其者に至ては、成程賃銀支拂期日以前には存在する事を要するけれども、生產開始以前に

存する必要はない。而して賃銀支拂は常に一日、一週、若しくは一箇月間生産が行はれた後始めて行はれる。一勞働者が一定の生産部門で勞働しつゝある同じ一日、一週、若くは一箇月の間に、最終生産段階に於ては賃銀財又は所得財が造られて居るのである。故に彼等は豫め生産開始前に存する生産物の中からではなくて、特定の期間内に彼等が造出す生産物の中から賃銀を支拂はれるのであつて、此點に於て賃子を構成する所得財との間に何等の差別を設くべき理由はない。從て賃銀財のみが獨り該生産の資本に數へらるべき理由もないのである。次に賃銀が生産物賣却を俟つてその收益中から支拂はれる場合には、其時迄勞働者の生活を支へる賃銀財は、該生産の資本と見なければならぬと論者は謂ふが、之は勞働者が前期に受けた賃銀若しくは所得であつて、賃銀は、それに對して資本たるか所得たるかを決しようとして居る、問題の生産の爲めの賃銀ではない。加之當期の所得受入までを支へるに前期生産からの所得を以てする事は、勞働者に限つた事ではなくて、地主及び資本家も、新生産から新賃子を收める迄は、前期の賃子財を以て生活するのである。此點に於ても賃銀財と賃子財とを區別すべき理由は立たぬ。

故に賃銀財と賃子財とは、共に等しく國民資本を形成するか、或は共に等しく國民所得を形成するか、何れかでなくてはならぬ。而してその之を國民資本と認む可からざる理由は既に再三說明した通りである(294-303. Zur Erkenntnis. p. 14 ff.)。

第三に以上說明する所に依て、賃銀財その者は、奴隷所有者が奴隷維持の爲めに自己の消費を節約すると同じ意味に於て、節約せられる事もない。勞働者は自らの之を消費して貯蓄せず、企業家は既に勞働者に配當せられた賃銀財に對しては最早處分權を持たぬ者であるから、奴隷所有者が奴隷の生活費を貯蓄したやうに、勞働者の爲めに貯蓄を行ふ事は出來ないのである。

十九

以上の說明に依て、分業の有無、土地資本に關する法制の如何に論なく、資本當體は常に原料と道具とを以て成り、勞働に依て發生增加し、且つ所得に對しては因果の關係でなくて、單に先後の關係に立つと云ふ Rodbertus の主張は明にせられたと思ふ。然るに「資本當體、資本物體、國民の見地よりせる資本と全然違ふ或物が、今日

通常資本なる語に依て了解せらるゝ私的資本、資本財産、所有資本」で(304)ある。而して經濟學に最不幸なる混亂を招致するものは、此二者の混同であると謂ふ。たゞRodbertus「資本論」は未完の儘遺されたので、私的資本は何を以て成り、如何にして發生增加し、所得に對して如何なる關係に立つかの說明は甚だ不充分であるが、私的資本が一定の法制を條件として始めて成立し、而して其法制は歷史的產物で、時代に依て或は興り或は亡びるものなる事は、彼の反覆力說して已まぬ處である。

現社會に於ては啻に個人的所得のみならず、土地その者、並に最初の段階から最後の段階に至る迄の國民全生產物は、生產者以外の第三者の私有分Privateigentumsloose に分たれて居り、而して此私有分は、其所有者に國民所得の分前、卽ち賃子を與へる。然るに一切の土地、並に所得として分配せらるゝ迄の國民生產物が生產者以外の私人の手に屬するものとすれば、國民生產物、並に國民所得の運動を支配するものは社會其者ではなくて、是等私有分の所有者でなくてはならぬ。卽ち生產は是等の私有者が勞働者を結合し、それを自家の企業として起す事に由てのみ營まれる。而して斯る狀態の下に於ては、生產經濟經營の爲め斯る私有分は缺く可

からざるもので、例へば原生產を營まうとするものは、原生產に必要なる土地生產物道具其他に對する私有權を有し、製造業を營まうとするものも亦それに必要なる原料道具等に對する私有權を持たなければならぬ。今Rodbertus が私的資本と稱するものは「生產企業の經營に必要なる生產物私有分Privateigentumsloos am Nationalproduktl」で、從來經濟學者の資本と稱するものが是である。彼は別の所で之を廣義の資本と稱して、狹義の資本、卽ち國民資本に對立せしめて居る。それは既に彼れが一八四二年の著 Zur Erkenntnis の中に行ふところで、今「資本論」の缺を補ふ爲め其一節を引用すれば、曰く「……狹義若しくは本來の意義に於ける資本は、之を廣義の資本又は企業基金と區別しなければならぬ。前者は道具及び原料の現在量を包含し、後者は今日の分業關係と一企業經營の爲めに必要なる基金Fond全部を包含する。今日の關係に依れば一企業家の基金は、啻に原料及び道具のみならず、生產收益の中から必要なる賃銀及び賃子を支拂ふに足る丈けの貨幣を含まなければならぬ。此の兩部分は企業家に取ては同じ價値を持つ。兩者は共に財產であつて、企業は經營上に於て贏得するところのものを、全基金に對して算當するので

ある。更に兩者は單に企業家に取てのみならず、現在關係の下に於ては、一生產の經營又從つて開始の爲めに等しく必要である。故に人がその限りに於て、兩者を廣義の資本若しくは企業基金の概念の下に一括するのは正當である。たゞ兩者各それ自體を取つて見れば、著しい相違が顯はれて來る。兩者の中の一方のみが生產開始に當つて現實に存在する財量で、他方は差當り何等現存の物財量を代表せず、又代表すべき筈なく、唯々未來生產物の分前を代表し、その(生產物の)決濟の用を爲す流通手段の蓄積に過ぎぬ。……前者のみが國民資本の概念と一致する」と(p. 23-4)。而して資本當體とは違つて、私的資本は貯蓄に依て發生し、(p. 288-9)所得に對しては其源泉たるの關係に立つものである(p. 314-15)。

乍併此意味に於ける資本は、土地資本が私有せられ、生產者は其生產全價値の僅かに一部分を以て酬ひられる社會に於てのみ必要となり、且つ存在するもので、決して本質的、永久的經濟概念ではなく、それは僅かに流轉常なき諸國民の法制史から生れるに過ぎぬ。資本當體、國民資本は、生產其者の本質進步に由來する絕對的の意義を有する。國民的生產其者が廢止せられぬ限り、原料と道具は常に必要で

あり且つ存在し、國民生產物は完成所得財と、更に生產の用に供せらるゝ財とに岐れるであらう。反之私的資本は、一定の法制關係の存續、社會的生產行程の一定形式、卽ち生產行程が土地並に資本私有の爲めに取得する形式、に關係する相對的意義を有するに過ぎぬ。國民的生產物の中で私的資本の實內容を形成する部分が常に私有物なる事、常に私有分として現はれる事は、決して不可避の必要事ではない。前述の如く別の社會的法律關係は、此事を不用にするであらう。故に新經濟學者が貨幣資本を眞資本資本當體と認める事を以て舊經濟學者を咎めるならば、新經濟學者は私的資本を眞資本資本當體と認める廉を以て咎を受けなければならぬ。此意味に於ける資本は資本所有なる法制の爲めに必要となるので、決して人の主張するが如く、資本の爲めに資本所有が必要となるのではない。卽ち土地は有ゆる社會關係の下に於て生產に必要であるが、今日の意味に於ける土地所有權は必要ではない」(p. 314-15)のである。

Rodbertus が資本論中の個々の結論は、今必しも其當否を評する事を須ゐない。彼の資本は常に直接欲望充足資料を以て成る所得に對して、更に生產の用に供せ